



古典語における時に関わる文法形式の意味・機能一 体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化

井上, 高輔

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2022-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7943号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007943>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

令和二年二月一日

古典語における時に関わる文法形式の意味・機能

——体系変遷記述に向けたキ・ケリ・ツ・ヌのモデル化——

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

井上高輔

目次

はじめに	1
本研究の背景	1
本研究の対象・記述方針・目的	4
「はじめに」の参考文献	5
第一章 テンス・アスペクト・〈基本形〉	6
一・一 本章の目的	6
一・二 テンスの内実及びテンスと〈基本形〉の関係について	7
一・三 テンスが見えやすい時・見えにくい時	15
一・四 「はなしあい」と「かたり」とタクシス	19
一・五 古典語の〈基本形〉とテンスの関係	20
第一章のまとめ	27
第一章の参考文献	29
第二章 キ・ケリ	32
二・一 本章の目的	32
二・二 キに関する問題の導出	33
二・三 キのモデル化	39
二・四 ケリに関する問題の導出	44
二・五 ケリのモデル化	49
二・五・一 「あなたなる場」と本モデルとの関係	52
第二章のまとめ	56
第二章の参考文献	57
第三章 ツ、ヌ	60
三・一 本章の目的	60
三・二 ツ、ヌの意味・機能についての先行研究概観	60
三・三 井島モデルに至るまでの先行研究	65
三・三・一 中西モデルから井島モデルへ	65
三・三・二 井島(二〇一一)のアスペクトと事態の内的時間展開モデル	70
三・四 本研究のモデル	77
三・五 テンスレベルで機能するツ	84
三・六 形容詞に対する本研究のモデル	92
三・七 ツ、ヌの接続語彙の偏りについて	101
三・七・一 ツ、ヌの接続する語彙の偏りについての先行研究	101
三・七・二 ヌの承接が起こりにくいこと背景	101
三・七・三 ツの承接が起こりにくいこと背景	106

第三章のまとめ	112
第三章の参考文献	113
おわりに	116
本研究のまとめ	116
「はじめに」にこたえて	117
今後の課題	119

はじめに

本研究の背景

日本語は古典語において、キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リといった時に関わる文法形式が存在していたが、それらはごく一部の慣用的な表現あるいは方言を除いて消滅し、現代語において、タやテイルなどの形式に取って代わられていると考えられている。先行研究においては、各形式の意味や機能、構文的特徴について調査・記述が行われ、各形式の消長についての説明も試みられてきた。しかし、これら形式が成す体系の通時的変遷を説明しようと試みたものは少なく、対象とされる時代も限定されているので、全容の解明には至っていない。

本研究が持つ、本研究で負いきれないレベルの関心は、「文法形式はなぜ・どのように通時的に変化するか」ということである。文法形式というのは、生産性があるので、何らかの新しい事態を表現しようとする際に、現状ある形式で事足りるはずではないかという発想に立てば、文法形式が生まれたり消えたりすることは、理解しがたい奇妙な現象である。

そして、これより下の、より具体的なレベルにある関心として、「古代語から現代語にわたって、時に関わる文法形式とその体系がどのように変化してきたか」という問いがある。ここでいう「時に関わる文法形式」とは、述語部分に現れて時の様子を言い分ける要素(トール)のことで、古代語においてはキ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リが挙げられ、現代語においてはタ、テイルが挙げられる(詳しくいえば、ヲリ、テアル、テオル、ハジメル、ツヅケル、オワル、テシマウ、ダス等の形式や、各形式の複合形式も含まれる)。

次に、本研究のより直接的・具体的な背景を述べる。

言語形式の消失や収斂、交替について説明する理論としては、小柳(二〇一八)がある。まず、言語消失の段階については、形式の使用頻度が低下する「抑制」の段階と、形式を完全に使用しなくなる「廃棄」の段階が考えられるという。このうち、「抑制」には大きく分けて「積極的な抑制」と「消極的な抑制」の二種類あるとする。「積極的な抑制」は、「機能的利便性」や「評価的社会性」が低いために、当該言語表現を意図的に選択しないというもので、同音衝突の回避などが当たるといえる。「消極的な抑制」は、当該言語形式自体に理由があったのではなく、他の理由によって使われなくなっていくもので、言語表現の指示対象が社会から姿を消す場合や、ある形式が他の形式に取って代わられる場合が当たるといえる。

言語消失について、他の形式の発生や機能変化が絡んでくる場合としては、「統合」と「交替」という二つの場合を提示している。「統合」とは、

形式Aが意味 α を表し、形式Bが意味 β を表して併存していたのが、形式Bが意味 β のほかに意味 α も合わせて表すようになる変化である。途中には、形式Bが意味 α を表すようになって、意味 α に関して形式A・Bが競合する段階が考えられる。(二四四頁)

とし、最終的に意味 α ・ β を持つ形式Bだけが残るものとしている。そして、「交替」とは、形式Aが意味 α を表し、形式Bが意味 β を表して併存していた状態から、

ある意味 α を表す形式がAからBに代わる変化である。この途中には、やはり形式Bが意味 α も表すようになり、意味 α に関して形式A・Bが競合する段階が想定される。(二四五頁)

とし、最終的に意味 α を持つ形式Bだけが残るとしている。

以上が、小柳(二〇一八)の考える言語消失、収斂、交替のパターンであるが、キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リは、このモデルの中でどこで解消されるだろうか。従来よく言われていること(キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リは、タリ由来のタへ収斂したという考えや、それにはタリ・タの機能変化が付随しているという考え、補助動詞・副詞の発達によってもキ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リの機能の一部が担われるようになったという考え)が正しいのであれば、「消極的な抑制」の「統合」に解消されるだろう。

しかし、このモデル内で十分に解消され切るのだろうか。古典語と現代語とは、「体質」そのものが変わったという可能性はないのだろうか。すなわち、「意味 α 、 β 、 γ 、…を担う形式がそれぞれA、B、C、…だったのが、Aだけに代わった」というのではなく、「意味 α 、 β 、 γ 、…を担う形式がそれぞれA、B、C、…だったのが、意味 α 、 β を担うAだけが残り、意味 γ 、…は消失した」というような可能性はないのだろうか。なお、小柳(二〇

一八)は、同研究内で提示している言語消失のモデルが完璧なものだと強調しているわけではないということは付言しておく。

また、本研究が関心を持つ、形式の消失に関しては、鈴木(一九九三・二)の言及がある。鈴木(一九九三・二)は、ツ、又の通時的消失に関して、以下のように述べている。

それが現代日本語の過去形式とはなりえなかったのは、ツは動作動詞につき、又は変化動詞につくという、一種の動詞語尾の性格から完全には抜け出せず、ついに動詞全般にわたる文法形式たりなかったからであろう。(六一〜六二頁)

「動詞全般にわたる文法形式でなければ、消失する」という発想が前提となっているが、これは、小柳(二〇一八)のモデルから言えば、形式の消え方、実像の話であって、消失の理由にはならない。小柳(二〇一八)は、形式が生まれて、定着していく様子を以下のモデルで説明している。言語表現が生まれてくる「案出」「試行」「採用」と絡み合わせて把握すると、「案出」から「試行」の間で使われなくなれば(定着の方向へ進まなくなれば)、「廃棄」されるとする。「試行」から「採用」の間や、「採用」後に消失の方向に進む場合は、「抑制」の段階に至り、最終的に「忘却」(言語使用集団が当該言語形式を使用しない時期が続いたために、忘れ去ってしまうこと)に至れば、それ即ち「廃棄」となるとしている。

少なくともこの点については、鈴木(一九九三・二)の言及よりも小柳(二〇一八)のモデルがより自然であると考えられる。すなわち、ツ、又が生き残らなかった理由を考えるならば、別の点を考えなくてはならない。

時に関わる文法形式群の変遷自体については、先行研究の中には、体系的観点から説明しようとするものがある。例えば、山口堯二(一九九七)は、キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リがタに置き換わっていったと見て、機能分担の置き換わっていくプロセスを追い、変遷の要因を検討している。しかし、山口堯二(一九九七)は、主に中世以降のキ、ケリ、ツ、ヌ、タリがタリの後続たるタに収斂していく様子を説明するものであり、形式群の変遷が起こる準備的段階として、上代・中古にどのような環境が整っていたかということには焦点を置いていない。

以上、先行研究に触れながら紹介した本研究の背景となる関心・問題意識をまとめておけば、次のようになる。

大きく遠い背景
○文法形式はなぜ・どのように通時的に変化するか。
やや大きく遠い背景
○古代語から現代語にわたって、時に関わる文法形式とその体系がどのように変化してきたか。
比較的小さく近い背景
○古典語と現代語とでは、「体質」そのものが変わったという可能性はないのだろうか。 ○形式群の変遷が起こる準備的段階として、上代・中古にどのような環境が整っていたか。

本研究は、以上に述べたような関心・問題意識を背負って、次に述べる「本研究の目的」に取り組む。

本研究の対象・記述方針・目的

本研究では、キ、ケリ、ツ、ヌを対象形式とする。対象範囲は、およそ上代・中古にあたる。なお、資料は基本的に小学館の新編日本古典文学全集によったが、先行研究上で得られた用例はそのまま掲載する場合があります。

本研究で用例番号を用いる場合は、各章ごとで番号を区切り、章を越えて続けることはない。図表番号を用いる場合は、各章をまたがって通し番号とする。また、参考文献については、各章の最後にリストアップする。注番号については、各章にまたがって通し番号とし、注については、論文本体の最後にまとめて掲載する。

本研究は、古典語の時に関わる文法形式であるキ、ケリ、ツ、ヌが、ごく限られた慣用的表現を除いて、なぜ消えたか、その理由ないし背景を究明するために、それぞれの形式の意味・機能をモデル化し、競合関係を見ることを主たる目的とする。

そのためにまず、〈基本形〉（キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リが接続していない動詞・形容詞）について、テンスとの関係を把握することで、テンスそのものの範疇をどう扱うか、立場を明らかにする（第一章）。その後、キ、ケリ（第二章）とツ、ヌ（第三章）を時に関わる側面から把握し、モデル化を行う。なお、これに付随して、先行研究で指摘されているキ、ケリ、ツ、ヌの特殊なふるまいや、モデルとの関連付けも行う。

なお、本研究のモデル化の対象であるキ、ケリ、ツ、ヌとは別に、第一章で〈基本形〉のことを考えるというのは、目的と行為に飛躍があるので、ここで説明しておきたい。時に関わる文法形式は、「キ対ケリ」、「ツ対ヌ」、「タリ対リ」のように、有標形式同士の違いが議論されることが多いが、本研究では、無標形式たる〈基本形〉の位置付けを考えておく必要がある。先行研究において、有標形式同士の違いがよく議論されるのは、それらの形式同士に似た特徴があり、その解明に向けた動きであると理解できる。対して、〈基本形〉の位置付けについての議論もあり、それらは、〈基本形〉が体系内で役割を果たしている場合と果たしていない場合を分け、具体的に、どのように果たしているか・果たしていないか、用法を分類する研究であると言える。

本研究では、時に関わる文法形式の変遷記述を先に見据えているという事情から、そして、5〈基本形〉の位置付けが、テンス・アスペクト範疇をどのように捉えているかという、論の立脚点と関わることから、〈基本形〉について考えねばならない。

「はじめに」の参考文献

小柳智一（二〇一八）『文法変化の研究』くろしお出版

鈴木泰（一九九三・二）「時間表現の変遷」『月刊言語』第二二卷第二号、大修館書店

山口堯二（一九九七）「完了辞・過去辞の通時的統合——「たり」Vた」への収斂——」山口堯二（二〇〇三）『助動詞史を探る』和泉書院

第一章 テンス・アスペクト・〈基本形〉

一・一 本章の目的

本章では、日本語の文におけるテンスの位置付けと、〈基本形〉とテンス・アスペクトの関係性を把握するために、関連する先行研究を検討する。テンス・アスペクト体系やその変遷を把握するという点から、〈基本形〉の体系内での位置付けを明らかにする。

この立場を決めておくことは、後の議論を進めるために必要である。たしかに、本研究の主眼は、「古典語の時に関わる文法形式であるキ、ケリ、ツ、ヌが、ごく限られた慣用的表現を除いて、なぜ消えたか、その理由ないし背景を究明するために、それぞれの形式の意味・機能をモデル化し、競合関係を見る」ということなので、一見、〈基本形〉の動向に触れる必要はなさそうである。しかし、この主眼としている課題を究明するためには、テンス、アスペクトをどう扱うか、立場を明確にしておく必要がある、そのためには〈基本形〉の位置付けを考える必要がある。キ、ケリ、ツ、ヌ（今後の課題のことを言えば、タリ、リ、存在同等の形式）だけを観察対象とするだけでは、研究を進めることが不可能である。また、〈基本形〉そのものの体系内での位置付けを明らかにすることは、時に関わる文法形式の体系を明らかにすることそのものの一部であるということでもある。

〈基本形〉自体は、テンス・アスペクトの、少なくとも積極的な形式とは言えないが、消極的にでも意味・機能を担うものとして考えられており、古典語か現代語かに関わらず、テンス・アスペクトに関する議論では、〈基本形〉が意味・機能を持つか、持つとすればどのような意味・機能かということが問題となってきた。各形式の意味・機能のみを見る議論をするならば、〈基本形〉の位置付けの問題は顕在化しにくい。しかし、テンス・アスペクトが述語の体系であるという観点に立てば、〈基本形〉は、消極的にでも意味・機能を持ちうるという可能性を無視できない。

本章の結論を先取りして言えば、本研究は次の立場を取る。まず、テンスとは時間軸と基準時、事態で構成される主体的な範疇であるが、アクチュアル（現実的）な場合と非アクチュアル（非現実的）な場合があり、ある文や形式がテンスであるかどうかは曖昧な場合がある。そして、〈基本形〉は、もともと素材的・概念的でテンスレベルにない状態だが、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮する。ただし、テンスレベルに至るかどうかは、やはり曖昧である。これら〈基本形〉の事情は、古典語でも確認された。更に、〈基本形〉

の時間的意味・機能が不完成相から完成相に変化したと見るべきか、素材的・概念的に提示しがちだったのがそうではなくなったというふうには「かたり」方の癖が変化したと見るべきかと考えた場合に、どちらかと言えば後者の方が無理がないと考えつつ、断言は保留する。なお、「はなしあい」と「かたり」の違いと関係性及びタクシスについて踏まえておく必要がある。

また、これらに加え、従来、アスペクト形式としての意味・機能が記述されてきており、かつ、テンスとしての機能も一部に認められる場合があるツ、又についても、「テンスか否か」というより、「テンスらしく振舞うのはどんな時か」という視点を持って整理する必要があるのではないかという問題が出てくる。この問題は、第三章で取り組むことになる。

一・二 テンスの内実及びテンスと〈基本形〉の関係について

本節では、先行研究を検討することで、テンスの内実をどのように理解するか本研究の立場を決めるとともに、テンスと〈基本形〉の関係性についてどう見るかという問題に対しても本研究の立場を決める。

まず、議論を始めるために、テンスに関する基本的なモデルを導入しておく必要がある。テンスの基本的なモデルは、コムリー（一九八五）から得ることができる。

議論を進めるに当たって、まず、時間は直線で表すことができると仮定したい。慣例に従って、過去を左、そして未来を右に置く。その線上に現在点が点として表され、0で印される。この表記法を使うと、通常の言語での時間に関する言明を図上に表すことができる。たとえば、過去に起こった事象は図上で0の左に位置付けられる。また、一つの事象がもう一つの事象の後に起こったとすると、それは図上でもう一つの事象の右に位置付けられる。また、ある事象がある過程の間に起こったとすると、この事象の位置は図上でこの過程に割り振られた時間幅の中に示される。（三頁）

コムリー（一九八五）は、こう述べつつ、次のような図を掲載している。

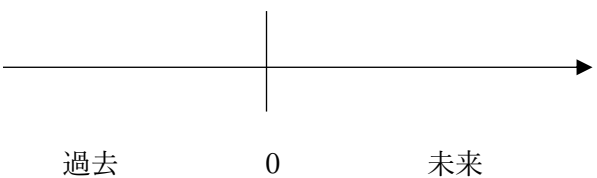


図 1

コムリー（一九八五…三頁）より、本研究掲載にあたって筆者作図。

テンスという枠組みを最も原義的に、個別言語から離れて考えた場合、「ある時間軸上にある基準時から見て、事態が時間的にどこに位置付けられるかを表わしわけける文法範疇」ということになると考えられる。すなわち、要素としては、「時間軸」「基準時」「事態」の三つがあり、これら三要素の性質と関係性を把握することがテンスを把握することと同じことになる。

この枠組みをテンスの基本的・抽象的なモデルとし、これにより具体性を持たせることで、テンスに関わる各形式のモデル化を行うことにする。なお、本研究では、便宜的に「0」を「基準時」と呼びかえることにする。

まず、テンスは、「時制」とも呼ばれるが、それが言語使用者にとって主体的なものであるか客体的なものであるかということについて、確認しておく必要がある。

木枝（一九二九）は、「アスペクト」「テンス」という術語を用いているわけではないが、「アスペクト」「テンス」で表現されるところの概念を取り上げ、「アスペクト」にあたるものは客体的なものであり、「テンス」にあたるものは主体的なものであるということに、既に気付いている。木枝（一九二九）は、時に関わる文法形式に関して、「客観的に見た動作

の完了、之を主観に移せばすなわち過去である」と述べ、形式自体の機能レベルと述定することのレベルの違いを指摘している。

いわゆる「陳述」に関する議論において一般的に認められている考え方によれば、主体的でない⇨客体的であるというのは、素材的・概念的であるということであり、言語使用者の「イマ、ココ、ワタシ」と関係を結ばずして存在しうる言葉の姿であると考えられるが、主体的である⇨客体的でないというのは、素材的・概念的なものが言語使用者の「イマ、ココ、ワタシ」と関係を結んで存在しているということであると考えられるだろう。

事態そのものというのは概念であり客体的であるが、仮定的な世界であれ、現実的な世界であれ、ある時間軸上に事態を定位するということは、世界観を持つ主体による営みであると考えられる。仮定的であれ現実的であれ、時間の流れを持つ一つの世界を設定するというのは、主体の判断に依拠している。

以上の考えから、テンスは主体的なものであるという考えが導出された。本研究は、この考えに従って議論を進める。

次にテンス範疇がカバーする範囲について、確認したい。

まず、言語上、テンスというのはそもそも考えられないレベルと考えられるレベルがあるが、このことは、三矢（一九三二）の時点で指摘されている。三矢（一九三二）は、言語上の「時」を「定時」と「不定時」に分けた。「定時」には、過去・現在・未来の「三態」があり、「不定時」には、「三態」がなく諺や習慣、一般的なもの等と言う際の姿であると考えている。⁹

殊、〈基本形〉の扱いについては、松尾（一九三六）が〈基本形〉が様々な時間的意味に用いられたり、時間的意味範疇から離れたたりすることを指摘している。松尾（一九三六）は、

雪は白い。

人は死す。

地球は西より東に回転す。

などといふのは、現在に於てとか、過去に於てとか、未来に於てとか、云ふやうなことは至く思惟の外に置いてあり、又何等之を表現して居ない。此は即ち時を超越して居るのである。之を不定時と名ける人もあるが、其では不定時といふ一種の時のやうな感が

あつて少しく物足りない。超時又は超越時と呼びたいやうにも思ふが、それも考へ様によつては一種の時と考へられる恐があるから、所詮、時を超越するといふのが妥当である。(六六七〜六五八頁)

と述べ、いわゆる「現在形」、本研究で言う〈基本形〉に「時を超越したもの」、「有限の時間の範囲の事象を指すもの」「過去を指すもの(竹取物語地の文の基本形を例として)」「未来を指すもの」があることを紹介している。

加えて、糸井(一九三七)は、〈基本形〉は本質的には素材的・概念的なものであり、テンス範疇にいつでも置かれるわけではないことに気付いている。糸井(一九三七)は、「時の基準点」を時に対する話者の「立脚点」のことであるとし、「来る」同様、ダイクシスのなものであると指摘している。

イ 吾・東京へ行く。

この如き語例は何の考慮をも加へることなしに、直ちに現在時を現はしてゐるものとするのであるが、これが果して現在時を現はしてゐるか否かは、改めて考へる必要がある。10
といふのは、かゝる言葉が實際上どんな場合に使はれるかといふことである。私はこれについて考へ得られる種々の場合を想像して見た。

イ甲 これを独語の場合として見る。「私は何所へ行くのでもない。私は今東京へ行くのだ。それはある責務を履行するためだ」の意。

イ乙 出懸けの途中友人などに「どちらへ」と聞かれた場合、「は、東京へ」と答へる程のもの。

イ丙 人に遊覧場所としては京都と東京といづれがよいかと問はれた時の返事。

先づこんな場合が想像される。然しそれ程沢山な場合はない。大抵はこの何れへか編入される。さてこれらがどれ程の現実味を示してゐるかを見ることにしよう。先づ(イ甲)は自ら「東京へ行くのだ」と云つてゐるので、これには現実感が全くない。たゞの観念しかないことが知れる。(三九九頁)

糸井（一九三七）は、助動詞の付いていない動詞を「単一動詞」と表現し、「時格」がないという。「単一動詞」で表現されるのは、観念のみであって、現実感・「時格」をもつためには、助動詞が必要であるという。また、この性格については、「単一動詞」と形容詞は同じであるという。

〈基本形〉あるいは形容詞がいつでも観念のみで「時格」がないというのは、〈基本形〉に消極的なテンスとしてのはたらしを認めるという立場が一般的となっている現在の考え方からすれば、言い過ぎている主張に思われるが、〈基本形〉の本質がテンス範疇のレベルにないという指摘は、本研究が従うところである。

また、山口佳紀（一九八五）も、言語上にテンスが現れている場合とそうでない場合があることを指摘している。山口佳紀（一九八五）は、テンス、アスペクト、ムードの関わりを考えているが、特にテンスとムードについて上代語の動詞の終止法を見、「叙実法」なるものと「叙想法」なるものを提示している。「叙実法」とは、「事態を表現主体が現実に生起することとして捉えている」ものであり、「叙想法」とは、「飽くまでも想像上の事態として捉えている」ものであるとしている。「叙実法」の中に「確言法」（終止形（上代では+ミユ、+ナリ））「推量法」（未然形+ム、終止形+ラシ）を分類し、「叙想法」の中に「仮想法」（未然形+マシ）、「志向法」（未然形+ム、未然形+ナ・ネ・ナム、連用形+テシカ（モ）、命令形）を分類し、「叙想法」にはテンスはないとしている。

テンスがいつでもあるわけではないという発想には従うが、ただ、「叙想法」的なものにテンスがないという考えには従えない。本研究は、後に議論するように、仮定的な表現には仮定的な世界の時間軸があると想定し、テンスを認める。

加えて、吉田（一九八九）は、時制を考える上で、文を「状態などを表現する文」と「個別的な出来事を表現する文」に分ける必要があるという立場に立ちつつ、次のように述べる。

「状態などを表現する文」では時制という範疇が積極的な意味では問題にならず、時制辞を下接させないそのままの形で〈超時〉（即時的な）現在〉という消極的な時制を（結果的には）表現することになる。

前提として、本研究は、吉田（一九八九）のこの発想の方向性は正しいと考えるし、本研究でも、立つ必要がある立場であると考え、採用する。ただし、修正しなければならない点があるとも考える。微妙な言い方の話になるが、〈超時〉は、「消極的な時制」ですらないはずである。より厳密には、「時制を持っていない状態」の文というべきであろうし、本研究ではこのような状態を「テンスレベルにない」と表現する。

なお、本研究の立場を明らかにするために明言しておくが、〈(即時的な)現在〉という「消極的な」時制は、あくまで時制なのであるから、テンスレベルにあると考えるべきである。

吉田（一九八九）は、現代語の「(右手に鉛を左手に錫を持ち比べて)鉛が重い。」という表現を「個別的な出来事を表現する文」ではなく「状態などを表現する文」であるとしつつ、そのテンスに関わる意味合いを〈(即時的な)現在〉と呼んでいるようだが、この例文はテンスレベルで意味を発揮しているということを意識しておきたい。

更に、吉田（一九九二）では、先の吉田（一九八九）と同じ発想に立ち、議論が進められている。動詞の〈基本形〉は、時制的に「無色」であるという立場に立ち、次に挙げる《状態表現用法》において、「現在」という意味が立ち現れたり現れなかったりすることの背景を説明している。

〈超時〉このビルの屋上からは三瓶山が見える。

〈現在時〉〈(実然的現在時)〉おいでよ！三瓶山が見える。

一方、《状態表現用法のル形》に〈現在時〉の意味が生じるのは、「基体―属性」関係の現実への対応という局面においてのことである。現に眼前にあるその基体_・にその性質_・がたしかに帰属しているとき、“他の時点のことは知らず今はその帰属関係が成り立っている”と言わざるを得ない。他の時点に対する関心を持たないという点で、それは明らかに〈現在時〉の表現だと見なすことができよう。

ものごとの関係を意味する文が「現実への対応」に至って〈現在時〉の意味が生じるといふのは、素材的・概念的な文がテンスレベルで機能する場合に何らかのテンスの意味合いが出てくるといふことであろう。

以上のような先行研究に従い、本研究では、文はテンスレベルにないものとあるものがあるということ、〈基本形〉については、まず素材的・概念的でテンスレベルにない状態を想定し、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮するものであるということを確認する。

次に、テンスの時間軸の種類に関する先行研究を見、本研究で使用する「アクチュアリティー」という術語を導出したい。三矢（一九三二）は、言語上の「時」を「定時」と「不定時」に分け、「定時」には、過去・現在・未来の「三態」があるとしたというのは先に紹介したが、三矢（一九三二）は更に、「定時」を「事実と一致する者」と「事実と一致せざる者」に分けている。ここに既に、次に紹介する「アクチュアリティー」と同様の発想が見られる。

奥田（一九七七）は、動詞のアスペクチュアルな性格と「アクチュアリティー」という概念で、現代語の動詞〈基本形〉が文終止の位置で「現在」の意味を表わせないということに次のような説明を与えている。

nuns というアスペクチュアルなたちが表現するアスペクチュアルな意味は、基本的には、《分割をゆるさない globality のなかに動作をさしだす》ことである。このように理解しなければならぬ根拠は、なによりもまず、suru という完成相の動詞は、その現在形において、《アクチュアルな現在》をあらわすことができないという事実にある。はなしのモメントに進行する動作は、動作を過程としてとらえる継続相 *site-iru* の現在形をもちいなければ、さししめすことができない。動詞のテンスとしての《アクチュアルな現在》は、はなしのモメントに進行する動作をさししめすわけだが、完成相の動詞は過程を表現する能力がかけているので、このような動作をさししめすことができない。（一〇〇〇～一〇二頁）

また、鈴木重幸（一九七九）も、次のように現代日本語のテンスについて説明する所で、「アクチュアリティー」という術語を使用している。

テンス形式は現在未来形と過去形の二つである。すでにふれたように、叙述法のテンス形式における完成相の基本的な意味は、動詞のあらわす動きや変化を分割をゆるさな

いひとまとまりのものとして現実の特定の時間に関係づけることであるとすれば、この二つの形のうち、過去形は過去の特定の（一つの）時間に関係づけるし、現在未来形は未来の特定の（一つの）時間に関係づける。これらが、この二つの形の基本的なテンズ的な意味である。これらをそれぞれアクチュアルな過去、アクチュアルな未来とよぶ。完成相の現在未来形は現在進行中の動きや変化（アクチュアルな現在）をあらわすことができない。（一五頁）

「アクチュアリティ」とは、現実世界に定位するものであるかどうかという問題を言い分ける概念の事であり、例えば、事態を現実世界の時間軸における過去に定位するのであれば、「アクチュアルな過去」と呼ぶことになり、現実世界の時間軸における未来に定位するのであれば、「アクチュアルな未来」と呼ぶことになる。反対に非現実世界の時間軸における過去であれば、「非アクチュアルな過去」、未来であれば、「非アクチュアルな未来」と呼ぶことになる。

本研究では、テンズの時間軸にアクチュアルなもの（現実世界のもの）と非アクチュアルなもの（非現実世界のもの）があると認め、「アクチュアリティ」という術語を使用する。

以上、先行研究を概観し、適宜検討したが、本研究はこれらと立場を基本的に同じくし、次のような立場を取る。

- テンズとは時間軸と「基準時」と事態で構成されるものであると考える。
- テンズは主体的な範疇であると考ええる。
- 文はテンズレベルにないものがあると考える。
- 〈基本形〉については、まず素材的・概念的でテンズレベルにない状態を想定し、場合によってテンズレベルで意味・機能を発揮するものであると考える。
- テンズにはアクチュアルなものとは非アクチュアルなものがあると考ええる。

以上の立場に立ちつつ、以下、議論を進めていく。

一・三 テンスが見えやすい時・見えにくい時

本節では、テンスという範疇は見えやすい時と見えにくい時があり、曖昧さを持っているという本研究の立場を示す。こうすることで、本章内の次節以降や第三章のツに関する議論の土台を作り、考えるべき問題の導出を行う。

ライオンズ(一九六八)は、テンス、アスペクト、ムードは、副詞的成分との関係によって、はつきりと立ち現れたり、曖昧になったりするものであるとしている。ライオンズ(一九六八)は、「時制範疇の本質的特徴は、文中において示される行動(action)、出来事(event)あるいは事態(state of affairs)の時を発話の時(発話の時間は「今」(now)であるが)と関連させることである」とし、テンスは、アスペクト、ムードと関係の深い存在であると述べている。

尾上(二〇〇一)は、現代語の形態論的カテゴリーとしてのテンス・アスペクトを想定することに限界があることを言うものであるが、その用法分類から、テンスという範疇には見えやすい時と見えにくい時があり曖昧さがあるということがわかる。尾上(二〇〇一)は、現代語の〈基本形〉にあたるスル形の用法を次のように詳しく整理している。傍線や一部の用例は省くなど、意味が変わらない程度に適宜改めて示す。

スル形の用法と叙法論的性格

(1) スル形の用法…主文述語終止法の場合

◎スル形終止法は非常に少ない。運動動詞はもちろん、状態動詞でも(動詞の種類が)限られる。

(A) 時間性を持つ用法

1 状態動詞が現在をあらわす

「スル」…イマ・ココの状態

「スル」…超時(運動動詞でもこれはある。ただし、状態動詞の方が多い。)

2 運動動詞が現在をあらわす(あえて時間性を認めるなら、現在と言える)

・「スル」…「思う」「信じる」「感じる」「考える」「言う」「主張する」など認識をあらわす動

詞のある用法……内容が前面にでてきたときは時間を問題にせず、スル形で現

在をあらわすことができる。

- ・「約束する」「命令する」などの遂行動詞のある用法
- ・「〜ていく」「〜てくる」が現在をあらわすことがある。

中退する学生がどんどん増えていく。

(以下は動詞語彙によらない)

- ・眼前描写　ほらほら、鳥が飛ぶ。
- ・真理・習慣・習性・傾向　アルコールは水に溶ける。

3 運動動詞、状態動詞が未来(予定、確かな予測、自分の意志・意向)をあらわす

例　船はあす午後神戸につく。(予定)

あいつはきつと偉くなる。(確かな予測)

わしは一人で行く。(自分の意志、意向)

4 物語中の歴史的現在

5 日記、記録の中の過去の事態

(B) 時間性から解放されている用法

6 問い返し　例　金魚がミルクを飲む？

(もちろん、時間性を帯びたままシタ形など他の形で問い返す場合もある)

7 提示　列ずうずうしい奴が得をする。それは人間の世界に限ったことではない。

8 前提提出　例　六十歳の人がひったくりに会う。「六十歳の老人が〜」と新聞に書

くと本人から「老人とは何事」と抗議が来たりする。

9 ト書き　例　忠治が中央に歩み出る。

10 発見驚嘆　例　わ、人形が動く！

出会った事態をそのままことばにすることによって発見、驚きの気持ちを表す。

遭遇対象を語ることによって遭遇による急激な心の動きを表すのは感動喚体(感

動喚体は本来時間性から解放されている)。

11 眼前描写　例　ごらん、朝日がのぼる。

今、飛び立とうとしている鳥をさして「ほら、鳥がとぶ!」というのは、この眼前

描写とは異なり、(予測というよりも) 予定の変種で、未来(Aの3)。

運動動詞スル形が未来を表すタイプの四つ目として「将前」(今まさにそうしよう

としている)を設定してもよい。

1 2 詠嘆的描述 例 はるかクナシリに白夜は明ける (富士の高嶺に雪は降りける)

感動喚体の一種。

話し手が一つの情景を額縁に入れて、異次元にたって眺めている表現で、額縁の中身は時間から解放されていると言える。

1 3 詠嘆的承認 例 愛は地球をすくう。

1 2と1 3の違いをみると、1 2は必ず「AはBする」の形だが、1 3は「AはBする」「AがBする」の両方ある。

根の深い違いが右のような点にあらわれる。

1 4 真理・習慣・習性・傾向

1 5 要求 例 さっさとすわる！

なすべき行為を指定する。

指定内容のみがことばになる。

1 6 メモ 例 歯ブラシを買う。履修届を出す。

1 7 受理 例 飛車を捨てて、角道をあける。なるほどね。

こういうことなんだなということのことばにして受け止める。

1 8 列記 例 サーフをおとす。足を踏まれる。会社に遅れる。今朝はさんざんだった。

1 9 表題 例 武村氏調整に動く。

新聞の見出し、映画の題、辞書の項目 など。

1 ～ 1 5 は表現、伝達のためのことば、1 6 ～ 1 9 は事態内容把握(内容認識)のためのことば。言語の用法が異質。

以上、尾上(二〇〇一)の〈基本形〉の用法整理である。

「2 運動動詞が現在をあらわす(あえて時間性を認めるなら、現在と言える)」は時間性を持つ用法として位置付けられている。例えば、「私は乙案の方がいいと思います。」と、会話の中で発言した場合、自身の思考内容を提示するという機能面だけを見るならば、時制＝

テンスにおける区分は見ないでおくことができるわけだが、「私は乙案の方がいいと思います。」という文との対立の中に置けば、テンス区分が際立ってくるということが考えられるだろう。

これに加えて、「(B) 時間性から解放されている用法」についても考えたい。まず、ここに挙げられている用法は、全て、「素材的・概念的」性格のものであると考えられる。「15 は表現、伝達のためのことば、16～19 は事態内容把握(内容認識)のためのことば。言語の用法が異質。」というメモに従いつつ、あえて言うならば、1～15は、「喚体」的な述語文であり、16～19は、単なる概念表出である。しかし、例えば、「6 問い返し」について、「もちろん、時間性を帯びたままシタ形など他の形で問い返す場合もある」と但し書きされているように、また、「16メモ」で、「歯ブラシはもう買った。」と表現できるように、明らかにテンスに関係する領域に〈基本形〉が入りこみ、対立を成すということもある。

ここから、テンスという範疇は、それがはっきり区別され認識されうる場合と、それが後景化され、あるいは、消失し、認識されない場合があると、より具体的にわかる(工藤一九九五は、【広義モダリティ】のアクチュアルからポテンシャルにかけての段階を認めており、そこで言う「ポテンシャル」の段階がテンス対立消失の段階である)。

ここからわかるのは、少なくとも〈基本形〉においては、テンスが際立つ場合とそうでない場合がありうる、すなわち、〈基本形〉のテンスの意味の認定にあたっては、曖昧さがあり、はっきりと決められない場合があるということである。次節以降では、この立場に立ちつつ、〈基本形〉とテンスの関係性を議論する。

そして、観点を別に移せば、従来、アスペクト形式としての意味・機能が記述されてきており、かつ、テンスとしての機能も一部に認められる場合があるツ、又についても、「テンスか否か」というより、「テンスらしく振舞うのはどんな時か」という視点を持って整理する必要があるのでないかという問題が出てくる。この問題については、第三章で考える。

一・四 「はなしあい」と「かたり」とタクシス

本節では、「はなしあい」と「かたり」と「タクシス」という先行研究で用いられている術語を導出し、後の議論の前提とする。先に尾上(二〇〇一)の〈基本形〉分類を見たが、「4物語中の歴史的現在」⁹⁾、「5日記、記録の中での過去の事態」も時間性を持つ用法として位置付けられている。こここの「時間性」というのは、これ以外の用法にあてられている「時間性」とは別のものと見る必要があると考えられ、それ故、特別に立項されていると考えられる。これらの用法は、工藤(一九九五)が言うところの「はなしあい」と「かたり」というテキストタイプの違いの中における、「かたり」中に位置付けられるものである。すなわち、ダイクシス「イマ・ココ・ワタシ」から直接発せられるものではなくて、「かたり」中にある「タクシス」という範疇で機能しているものと考えられる¹⁰⁾。すなわち、〈基本形〉で見ると、〈基本形〉が、「タクシス」という出来事間の時間関係表示機能に使用されていると見ることができ、これを従来から指摘のある「視点」の問題として見たとき、「かたり」の中に設定された「歴史的な」世界の時間軸上を流れる「今」に合わせて〈基本形〉が表出していると見ることになる。そして、本研究のテンスモデルで考えれば、時間軸は語られる対象の世界の時間軸として、「基準時」は語られる対象の世界の「今」として、解釈されると考えられる。

これに加えて、「はなしあい」と「かたり」には、二重にとどまらない構造を成しえるということを踏まえておく必要がある。すなわち、「かたり」の中の「はなしあい」の中の「かたり」という構造である。井島(二〇一一)では、「物語世界」と「表現世界」という「かたり」の基本的な想定と、「二次的」な世界である草子地の想定がされている。これらは、文体論的研究という側面もあるが、各形式がどのように機能するかという問題とも関連している。

「はなしあい」と「かたり」の違いと関係性及びタクシスは、〈基本形〉だけでなく、キ、ケリ、ツ、又について考える際も踏まえておく必要がある。

一・五 古典語の〈基本形〉とテンスの関係

本節では、より具体的に、古典語の〈基本形〉がどのようなテンス的意味・機能を持っていたかという問題について考えている先行研究を概観し、本研究の立場を明らかにする。

山口佳紀（一九八八）は、万葉集を対象とした研究で、終止法の動詞〈基本形〉の時間的意味を

- ・ 動作動詞でも変化動詞でも現在の状態を示しているものが圧倒的に多い。
- ・ 未来の例は、移動動詞であり、動作動詞でも二例の引用句である。

としている。山口佳紀（一九九七）は、万葉集の動詞〈基本形〉は基本的に「現在」を意味するという前提で、未来を表すと思しいものを検討している。結果、「未来」の意味であると解釈すべき次のような例はかなり稀で、祈願の対象である等、特別な事情がはたらいたのではと考察している。

○大船にま梶しじ貫きこの我子を唐国へ遣る（遣）齋へ神たち（万葉集・巻第一九・四二四〇）

○足柄のみ坂賜り顧みず我は越え行く（久江由久）荒し男も立しやはばかる不破の関越えて我は行く（由久）馬の爪筑紫の崎に留まり居て我は齋はむ諸は幸くと申す（麻乎須）帰り来までに（万葉集・巻第二〇・四三七二）

山口佳紀（二〇〇〇）でも、〈基本形〉は「現在」を表わすという考えに変わりはない。また、黒田（一九九二、一九九三）は、『万葉集』の用例に対して、次のような結論を出している。

○万葉集では、「す」は、現在の状態を叙述するのに、よく用いられる。「す」が現在時を表すのは、広い意味で言う現象を叙述する場合である。

○万葉集では、稀にはあるが、「す」は、未来の事柄の叙述にも用いられる。「す」が未来時を表すのは、人間の確実に、かつ意志的に実現する動作を叙述する場合である。

そして、現代語の〈基本形〉とは性質が異なることを強調している。

加えて、加藤康秀（一九九三）は、『古今和歌集』を対象とした研究で〈基本形〉は基本的に「現在」を表わし、「未来」を表わすことはほとんどないようであるとし、あっても特殊な事情があるとしている。

これら山口佳紀（一九八八、一九九七、二〇〇〇）、黒田（一九九二、一九九三）、加藤康秀（一九九三）の研究は、対象を歌に絞っているため、〈基本形〉の時に関わる意味・機能の用例を拾いきれていない。結果として、〈基本形〉の意味・機能の内、「現在」を表わすという部分だけが見えてしまっている。

対して、土岐（二〇〇三、二〇一〇、二〇一四）の研究対象は歌に絞られておらず、結果的に、〈基本形〉で過去・未来・現在の例があることが確認できている。土岐（二〇〇三、二〇一〇）は、肯定平叙文終止法限定で、平安時代の物語を対象に、〈基本形〉の用法を分類している。以下が土岐（二〇一〇）で示されたものである。

I 事態の具体性・個性がなく、テンス・アスペクト的な対立から自由なもの

A. 恒常

a 1 肯定的（中立的）評価事実 a 2 否定的評価事実 a 3 体言的用法

II 事態の具体性個性があり、少なくともテンス的対立を有するもの

（C. 現在の c 4 習慣や c 5 複数主体行為ではアスペクト対立は中和する）

B. 未来

b 1 意志 b 2 単純未来 b 3 命令

C. 現在

c 1 遂行 c 2 挨拶 c 3 行為説明 c 4 習慣 c 5 複数主体行為 c 6 現在状況

D. 過去

d 1 物語現在 d 2 パーフェクト的過去

III 本来は事態の具体性・個性があるが、発話時現在での話者の評価や解説を行うことを主目的とするため、結果的に事態の具体性・個性が失われ、テンスアスペクト対立が中和したもの

E. 評価・解説

e 1 評価 e 2 解説

これらの内、「未来」「過去」用法については、次のような用例が挙げられており、歌集ではなかなか得られない用法を得られている。

「B. 未来」用法

○〈さりととも消息してあるやう言ひてむ〉と待ちて、物も言はざりつるに、『明日渡る』となむ聞く。(落窪物語)

「D. 過去」用法

○一昨々年の二月の十日ごろに、難波より船に乗りて、海の中にいでて、行かむ方も知らずおぼえしかど、思ふこと成らで世の中に生きて何かせむと思ひしかば、ただ、むなしき風にまかせて歩く。(竹取物語)

以上、概観すれば、より広範にわたって調査している土岐(二〇〇三、二〇一〇、二〇一四)の古典語〈基本形〉の用法分類が、より優れていると評価できる。本研究では、土岐(二〇〇三、二〇一〇、二〇一四)に従い、古典語の〈基本形〉も「現在」以外のテンスの意味合いを持ち得、また、そもそもテンス的範疇から離れることもあるという立場を取る。

なお、土岐(二〇〇三、二〇一〇、二〇一四)と同じく広範な対象で古典語の〈基本形〉の時に関わる用法分類を詳細に行っている研究としては、鈴木(二〇〇九)があり、無視できない。鈴木(二〇〇九)の〈基本形〉の扱い及びテンスの扱いについて、本研究がどういう立場を取るか、示しておきたい。

鈴木(二〇〇九)の議論は、先に見た山口佳紀(一九八八、一九九七、二〇〇〇)、黒田(一九九二、一九九三)、加藤康秀(一九九三)と対象範囲は異なるが、〈基本形〉に「現在」の用法が多いことを見出す姿勢は共通している。厳密に言えば、鈴木(二〇〇九)は、〈基本形〉にアスペクトの「不完成相」としての意味を見出しており、そのアイデアを基本として議論を展開しているのだが、それは、現代語の〈基本形〉と比して、古典語の〈基本形〉にはより多くの「現在」用法が存在しているという見方に繋がっている。

ここでの結論を先取りして言えば、鈴木(二〇〇九)が「運動動詞」の〈基本形〉に、「現在」の用法であるとしているものの中には、そうとは認めるべきでないものがあることをま

ず指摘する。そして、(行為動詞の)〈基本形〉Ⅱ「不完成相」という見方だけではなく、〈基本形〉の用例に対して、素材的・概念的に提示されているものとして脱時間的な用法であると位置付けることも可能なのではないかと提示することを提示する。これは、古典語と現代語との「かたり」の癖の違いを認めるという立場に繋がる。ただし、本研究内で、〈基本形〉Ⅱ「不完成相」というアイデアを完全否定することは避けておく。

鈴木(二〇〇九)は、前提として、終止法的な〈基本形〉の意味に、大きく分けて〈具体的過程の意味〉、〈くりかえしの意味〉、〈潜在的質的意味〉、〈一般事実の意味〉、〈叙事的意味〉の五つを認めている。この内、本研究では、「不完成相」の問題について考えるために、〈具体的過程の意味〉を取り上げる。なお、ここで参考にする用例は、鈴木(二〇〇九)で挙げられている現代語訳付きのものをそのまま掲載する。それは、鈴木(二〇〇九)の解釈を把握し、検討するためである。

〈具体的過程の意味〉は、そのバリエーションとして、〈継続的意味〉、〈志向的意味〉、〈遂行的意味〉を持つと鈴木(二〇〇九)は言う。

〈継続的意味〉

①「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。(源氏・紅葉賀)〔姫君が人形を忙しうに並べながら、「追雛をするといつて、犬君がこれをこわしてしまつたので、つくろつております」と言う〕

②「桂の院といふ所、にはかに造らせたまふ」と聞くは、そこに据ゑたまへるにやと思すに、心づきなければ、(源氏・松風)〔紫の上は、「桂の院というところをにわかにおつくらせになつてゐるといふが、そこに明石の上をお置きになつてゐるのであろうか」とお思いになるにつけて、おもしろくない〕

③「∴針にて見ゆる子は、いとかしこき孝の子なり。嫗の、丹波に侍る女の童生まむとて見給へしやうは、『いと使ひよき手作りの針の、耳いと明らかなるに、信濃のはつりをいとよきほどに挿げて、嫗の衣に縫ひつく』と見給へし」と言へば、(宇津保・俊蔭)〔針の夢を見て生まれた子は、非常に賢い孝行の子です。私が丹波におります娘を産みますときに見ました夢では、じつに使いよきそうな手作りの針の穴がおおきく開いてゐるところに、信濃の

はつり糸をほどよい長さに通して、私の着物に縫いつけているところを見ました」と老女は言う]

(二七七頁～一七八頁)

鈴木(二〇〇九)は、①～③について、どれも継続的な意味であるとしており、その姿勢は、示された現代語訳にも現れている。たしかに、これらの現代語訳は、内容解釈自体は成功しているように見える。特に①の「つくろひはべるぞ」に対する「つくろっております」や②「造らせたまふ」と「おつくらせになつてゐる」は、内容解釈だけでなく〈基本形〉＝未完成相という形式面もうまく対応している。

しかし、③を見た場合、現代語訳で引用符トが避けられているところからわかるように、ここでは、そもそも純粹に「未完成相」ないし「継続的意味」と見ると、現代語にはうまく訳せないと考えられる。「縫いつけている」と見ました」となり、文の落ち着きが悪くなる。

これについては、文脈的に、尾上(二〇〇一)の言う「(A)時間性を持つ用法」の「物語中の歴史的現在」や、「日記、記録の中での過去の事態」にあたる可能性もあれば、「(B)時間性から解放されている用法」の「眼前描写」にあたる可能性もある。あるいは、トでマークされていることから、素材概念的に表示されているものの可能性もある。この場合、尾上(二〇〇一)の分類に強いてあてはめるなら、「(B)時間性から解放されている用法」の「提示」になるだろうか。

「(A)時間性を持つ用法」であれば、「未完成相」や「継続的意味」と捉えることは難しくなるだろう。「(B)時間性から解放されている用法」の「眼前描写」であれば、「③は見た夢の報告をしたもので、夢のなかでは情報はめのままで展開していくのだから、「縫いつく」という運動もその過程が継続しているところを表わしているのだと考える」と言う鈴木(二〇〇九)の立場からは、「未完成相」や「継続的な意味」と言うのかもしれない。そして、「(B)時間性から解放されている用法」の「提示」であれば、そもそも鈴木(二〇〇九)の認めるところでないということかもしれない。

では、代わりに古典語〈基本形〉から現代語〈基本形〉に置き換えるという方法で訳したとすれば、どうなるだろうか。「縫いつける」と見ました」となり、依然文の落ち着きは悪い。

要するに、③からわかることは、〈基本形〉の時間的意味・機能が不完成相から完成相に時代を経て変わったと考えてみても、そのような時代的变化はなかったと考えてみても、いずれにせよ結局は、〈基本形〉とアスペクト形式だけで現代語訳することに限界があるということである。自然な現代語訳を行おうとする場合、トコロといったその他の形式を用いたりする必要が出てくる。

ここまで考えれば、まず、古典語〈基本形〉は不完成相の意味・機能を持ち、現代語〈基本形〉は完成相の意味・機能を持つという壮大な変化の発想をわざわざ取るメリットが失われてくる。それよりも、〈基本形〉はずっと完成相なのであり、不完成相はその他の形式に担われてきたと考えてしまう方が、話は単純に済ませられる。

例えば、井島(二〇一一)は、そもそも〈基本形〉をアスペクトに関わるものとして考えることに批判的な研究であるが、「通時的にも、特に〈不完成相〉(＝〈継続相〉)から〈完成相〉へとのの価値が逆転するなどということは可能だろうか」と疑問を呈している。本研究も、この疑問は共感する所であり、加えて、無標形式が不完成相というアスペクト的に積極的な性質を持っていたとすることの不思議さや、〈基本形〉＝不完成相とした場合の、タクシスでの現れ方を説明できないのではないかという問題意識も持っている。例えば、現代日本語の〈基本形〉は完成相であると考えられており、その他の形式が接続することにより不完成相の意味になると考えられているが、これは自然である。〈基本形〉というのは、文法的要素が取り払われているのだから、動詞や形容詞の概念がそのまま宿っていると考えられ、「そのまま宿っている」というのは、概念まるごとがどこも失われずに存在していると考えられるからである。〈基本形〉とは、素直に考えれば、完成相であろうというのが自然ではないか。また例えば、次の例を見てみたい。

○日暮るるほど、例の集りぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは声歌をし、あるいは嘯を吹き、扇を鳴らしなどするに、翁、いでて、いはく、「かたじけなく、穢げなる所に、年月を経てものしたまふこと、きはまりたるかしこまり」と申す。『翁の命、今日

明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひさだめて仕うまつれ』と申せば、『ことわりなり。いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしのほどは見ゆべし。仕うまつらむことは、それになむさだむべき』といへば、『これよきことなり。人の御恨みもあるまじ』といふ。五人の人々も、「よきことなり」といへば、翁入りていふ。かぐや姫、石作の皇子には、「仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」といふ。くらもちの皇子には、「東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。いま一人には、「唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」。大伴の大納言には、「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ」。石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」といふ。(竹取物語)

これらの「いふ」が、仮に不完成的であるならば、タクシスとして前文脈と同時性を意味すると解釈することになるだろうが、そのような解釈は通るだろうか。むしろ、〈基本形〉が「完成的」にはたらいいて、継起的に文が繋がれていると解釈する方が自然ではないだろうか。

そして、〈基本形〉はずっと完成相なのであり不完成相はその他の形式に担われてきたと考える場合は、同時に、古典語と現代語とでは、「かたり」方の癖が変化してきたと考えることに繋がる。すなわち、現代語では素材的・概念的に提示することがあまりないような場合でも、古典語では素材的・概念的に提示することが珍しくなかったという考えである。先程の③をこの例として見ることはできないだろうか。

この「かたり」方の癖の変化というのも、大きな変化だと思われるかもしれないが、実際には〈基本形〉が不完成相から完成相へ変化したと考えるよりは無理のない変化だと考えられる。というのは、この「かたり」方の癖の変化の方では、先程見た「通時的にも、特に〈不完成相〉(Ⅱ)〈継続相〉」から〈完成相〉へと~~の~~の価値が逆転するなどということは可能だろうか」という問題や無標形式が不完成相というアスペクト的に積極的な性質を持っていたとすることの不思議さや、〈基本形〉Ⅱ不完成相とした場合の、タクシスでの現れ方を説明できないのではないかという問題を考えなくて済むからである。そして、なぜ、古典語では素材的・概念的な提示が普通だった「かたり」方が、そうでなくなってきたかという問題に

については、その他の文法形式や副詞の発達が背景となつて見ると見ることとで解決していくのではないか。

本研究では、その他の文法形式や副詞の発達までは検討できないので、〈基本形〉の意味・機能が不完成相から完成相に変わったという考えを完全に否定し切ることと、古典語では現代語よりも素材的・概念的な提示の仕方が好まれていたという考えを主張し切ることができない。ただ、鈴木(二〇〇九)の指摘に反対するこれらの発想は、十分にあり得ることなのではないかという立場には立っておきたい。〈基本形〉の時間的意味・機能が不完成相から完成相に変化したと見るべきか、素材的・概念的に提示しがちだったのがそうではなくなったというふうに「かたり」方の癖が変化したと見るべきかと考えた場合に、どちらかと言えば後者の方が無理がないと考える。

以上の検討から、本研究では、鈴木(二〇〇九)が言う(行為動詞の)〈基本形〉Ⅱ「不完成相」という見方に疑義を呈し、〈基本形〉の用例に対して、素材的・概念的に提示されているものとして、脱時間的な用法であると位置付けることも、より多くの場合で可能なのではないかという可能性を考える。〈基本形〉に対する扱いについては、とりあえずこのどちらの可能性も捨てない立場を取ることにする。

第一章のまとめ

本章では、テンス・アスペクト体系やその変遷を把握するということを先に見据えつつ、日本語の文におけるテンス範疇の姿の把握と、〈基本形〉の位置付けを決めるために、関連する先行研究を検討し、取るべき立場を決定した。

各節から次の結論が導かれた。

- 「一・二 テンスの内実とテンスと〈基本形〉の関係について」より
- テンスとは時間軸と「基準時」と事態で構成されるものであると考える。
- テンスは主体的な範疇であると考ええる。
- 文はテンスレベルにないものとあるものがあると考ええる。
- 〈基本形〉については、まず素材的・概念的でテンスレベルにない状態を想定し、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮するものであると考える。

○テンスにはアクチュアルなものと非アクチュアルなものがあると考える。

「一・三 テンスが見えやすい時・見えにくい時」より

○〈基本形〉において、テンスが際立つ場合とそうでない場合がありうる、すなわち、〈基本形〉のテンスの意味の認定にあたっては、曖昧さがあり、はっきりと決められない場合があると考ええる。

「一・四 「はなしあい」と「かたり」とタクシス」より

○「はなしあい」と「かたり」の違いと関係性及びタクシスについて踏まえておく必要があると考ええる。

「二・五 古典語の〈基本形〉とテンスの関係」より

○古典語の〈基本形〉も「現在」以外のテンスの意味合いを持ち得、また、そもそもテンス的範疇から離れることもあると考ええる。

○〈基本形〉の時間的意味・機能が不完成相から完成相に変化したと見るべきか、素材的・概念的に提示しがちだったのがそうではなくなったというふうに「かたり」方の癖が変化したと見るべきかと考えた場合に、どちらかと言えば後者の方が無理がないだろうと考えつつ、断言は保留する。

これらを総合すれば、次のようになる。まず、テンスとは時間軸と「基準時」と事態で構成される主体的な範疇であるが、アクチュアル（現実的）な場合と非アクチュアル（非現実的）な場合があり、ある文や形式がテンスであるかどうかは曖昧な場合がある。そして、〈基本形〉は、もともと素材的・概念的でテンスレベルにない状態だが、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮する。ただし、テンスレベルに至るかどうかは、やはり曖昧である。これら〈基本形〉の事情は、古典語でも確認された。更に、〈基本形〉の時間的意味・機能が不完成相から完成相に変化したと見るべきか、素材的・概念的に提示しがちだったのがそうではなくなったというふうに「かたり」方の癖が変化したと見るべきかと考えた場合に、

どちらかと言えば後者の方が無理がないと考えつつ、断言は保留する。なお、「はなしあい」と「かたり」の違いと関係性及びタクシスについて踏まえておく必要がある。

また、これらに加え、次の問題が導出された。

「一・三 テンスが見えやすい時・見えにくい時」より

○従来、アスペクト形式としての意味・機能が記述されてきており、かつ、テンスとしての機能も一部に認められる場合があるツ、又についても、「テンスか否か」というより、「テンスらしく振舞うのはどんな時か」という視点を持って整理する必要があるのではないかという問題が出てくる。

この問題は、第三章で取り組むことになる。

次章以降、これらを踏まえたうえで、議論を進めることとする。

第一章の参考文献

- 井島正博（二〇〇五）「中古和文の時制と語り——「今は昔」の解釈に及ぶ」『日本語学』第二四巻第一号、明治書院
- 井島正博（二〇一一）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
- 糸井善太郎（一九三七）『万葉集語法私論』非売品
- 大木一夫（一九九七）「古代日本語における表現意図について」『埼玉大学紀要教育学部（人文・社会科学）』第四六巻第一号
- 大木一夫（二〇〇九）「古代日本語動詞基本形の時間的意味」『国語と国文学』第八六巻第一号、東京大学国語国文学会
- 大木一夫（二〇一五）「現代日本語動詞基本形の時間的意味」『東北大学文学研究科研究年報』六四巻、東北大学大学院文学研究科
- 奥田靖雄（一九七七）「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」『国語国文』第八号、宮城教育大学（奥田靖雄一九八四『ことばの研究・序説』むぎ書房掲載分）
- 尾上圭介（二〇〇一）「スル・シタ・シテイルの叙法論的把握」『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

- 加藤康秀（一九九三）「古今集のテンス・アスペクト」『国文学解釈と鑑賞』第五八巻第七号
川端善明「用言」『岩波講座 日本語 6 文法Ⅰ』岩波書店
木枝増一（一九二九）『高等国文法講義』東洋図書
金水敏（一九九五）「進行態」とはなにか」『国文学 解釈と鑑賞』第六〇巻七号、至文堂
工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
黒田徹（一九九二）「万葉集における動詞のテンス・アスペクト」『日本文学研究』第三一号、大東文化大学日本文学研究会
黒田徹（一九九三）「古代語動詞のテンス・アスペクト研究のために」『研究会報告』第一四号、（大東文化大学）日本語文法研究会
佐久間鼎（一九四一）『日本語の特質』育英書院
鈴木重幸（一九七九）「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語に使われた完成相の叙述法断定のばあい」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房
鈴木泰（一九九二）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』ひつじ書房（改訂版（一九九九）ひつじ書房）
鈴木泰（一九九三）二月一日「源氏物語会話文における動詞基本形のアスペクト的意味」『武蔵大学人文学会雑誌』第二四巻第二・三号、武蔵大学人文学会
土岐留美江（二〇〇三）「古代語と現代語の動詞基本形終止文——古代語資料による「会話文」分析の問題点」『社会言語科学』第六巻第一号、社会言語科学会
土岐留美江（二〇〇九）「古典語のテンスにおける動詞基本形」『国語と国文学』第八六巻第一号
土岐留美江（二〇一〇）「古代語と現代語の動詞基本形終止文——古代語資料による「会話文」分析の問題点——」『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房
土岐留美江（二〇一四）「動詞基本形終止文の表す意味——古代語から現代語へ——」『日本語文法』一四巻二号、日本語文法学会
野村剛史（一九九四）「上代語のり・タリについて」『国語国文』第六三巻第一号、中央図書出版社
芳賀綏（一九五四）「陳述」とは何もの？」『国語国文』第二三巻第四号、中央図書出版社

- 益岡隆志（一九九二）「物語文のテンス」『モダリティの文法』第六章、くろしお出版
- 松尾捨治郎（一九三六）『国語法論攷』文学社
- 三矢重松（一九三二）『国語の新研究』中文館書店
- 山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』第三節・第四節、有精堂出版
- 山口佳紀（一九八八）「万葉集における時制^{テンス}と文の構造」『国文学 解釈と教材の研究』第三卷第一号
- 山口佳紀（一九九七）『万葉集』における動詞基本形の用法——テンスの観点から」伊藤博、稲岡耕二編『万葉集研究』第二一集、塙書房（山口佳紀二〇一一『古代日本語史論究』風間書房所収）
- 山口佳紀（二〇〇〇）「志賀白水郎歌群における〈袖振り〉の歌の解釈——動詞基本形の用法との関わりにおいて」西宮一民編『上代語と表記』おうふう（山口佳紀二〇一一『古代日本語史論究』風間書房所収）
- 吉田茂晃（一九八九）「けり」の時制面と主観面——万葉集を中心として」『国語学』第一五七集
- 吉田茂晃（一九九二）『大鏡』における時制表現の一特徴——時制助動詞のない場合について」『島大國文』第二〇号、島大國文会
- Comrie, B.（一九八五）『テンス』（久保修三訳、二〇一四、開拓社）
- J. Lyons（一九六八）『理論言語学』（國廣哲彌監修、國廣哲彌・杉浦茂夫・東信行共訳、一九七三、大修館書店）

第二章 キ・ケリ

二・一 本章の目的

本章では、キ、ケリの時に関わる文法形式としてのモデル化を行う。そのために、キ、ケリの意味・機能に関する先行研究から、具体的に本研究が検討しなければならない問題を導出する必要がある。

キ、ケリの意味・機能に関する先行研究について、ここで概要を示す²⁾。先行研究の意見、主張は、様々なアイデアをそれぞれが複合させるような形となっており入り乱れているが、それらを解きほぐせば、いくつかのパターンとして把握することができる。

まず、キについては、「過去の意味・機能」を持つものとして見解が共通していると見られるが、パターンとしては大きく二つに分けられる。一つは「過去」を意味するというだけのものであり、もう一つは主体的な経験に基づく「回想」を意味するというものである。この問題には、テンスという枠組みをどう捉えるかという立場の問題が絡んでいる。また、この二つ以外に、傍系の指摘として、キが表す過去の範囲を「発話時から見ても昨日以前に限る」という意見や、「キで示せる過去の範囲は、基準時から見てもその人の一生の間まで」という意見もある。

そして、ケリについては、どの時点の事態を指すかという観点から、「現在のこと」を指す、「過去」を指す、「過去から現在にわたる期間」を指す、「未来」を指す、という言葉があり、特に古い用法では、「継続」というアスペクト的な意味・機能があったのではないかという指摘があり、「かたり」の構造内や物語中の地の文におけるテキスト的機能を把握することによってケリの意味・機能を説明しようとする立場もある。加えて、「確認判断」や「気づき」「詠嘆」等のムード的な意味があるのではないかという指摘がある。

先行研究の実像としては、これらの発想が絡み合っている場合が多いわけだが、本章では、これらから、時に関わる部分を検討することで、キ、ケリの時に関わる意味・機能を把握したい。

次節以降、まず、キについて、単なる「過去」と見る先行研究と「回想」的なものとする先行研究を確認することで、問題を導出する。次に、キによって表される時間範囲が、基準時から見ても昨日以前に限られるのではないかという意見と、おおよそ人の一生のスケールに収まるのではないかという指摘を確認し、問題を導出する。そして、それら導出

された問題について、検討し、キの意味・機能について、モデル化を行う。その後、ケリについて考える。まず、ケリがどの時点を指すかという問題について、先行研究の議論を踏まえて検討する。次に、「継続」用法があったか、先行研究の指摘を踏まえながら検討する。

二、二 キに関する問題の導出

キが「過去」か「回想」かという論争は、まず、テンスという範疇を主体的なものとするか、主体的なものとは見ないかという立場上の問題が関わり、次いで、テンスを主体的な範疇のものと捉える立場内では、キが主体の実体験に関わるか否かという問題が関わる。

キを単なる「過去」と見るものは、三矢（一九二八）、大坪（一九七七）、吉田（一九九七）、山口明穂（一九九七）が挙げられる。

三矢（一九二八）は、キが動詞述語、形容詞述語、名詞述語にわたって過去を意味するものであると言及している。大坪（一九七七）は、訓点資料を対象とし、キを過去の意味であるとしており、また、吉田（一九九七）は、中古の形容詞の用例を検討し、キを過去の意味であるとしている。

以上は、「過去」という意味に特別深い意味合い・ニュアンス・制限等を含めずに言及しているものであるが、山口明穂（一九九七）は、キが「過去」を意味するということについて、「今は無い」という意味合いがあり、現代語のタのように未来の事態に使われる用法はないと述べている。加えて、キは、必ず話者の立場が関わるものとして考えている。

対して、キの意味・機能を「回想」という概念で説明しようとするものとしては、山田孝雄（一九〇八）があり、それを追認する形で、松尾（一九三六）、山崎（一九六三、一九六五）が挙げられる。

山田孝雄（一九〇八）は、「統覚作用の運用を助くる複語尾」に「陳述の確めに関するもの」と「思想の特殊の状態をあらはすもの」の二つを立て、「思想の特殊の状態をあらはすもの」の内に、「回想をあらはすもの」と「非経験の回想をあらはすもの」を立てた。更に、「非経験の回想をあらはすもの」の中に、「非現実性の思想をあらはすもの」と「非経験なれど現実に存すと思惟したるもの」を立てた。キについては、「こは過去をあらはすといふよりも、過去時にありし出来事を心内に回想したるその回想作用を言語にて発表したるものなり」としている。

ここで言う「回想」とは、「過去」とは客体的なものである」という立場から来るものであり、すなわち、文法上の「作用」として現れているキは、主体的な「統覚作用」の現れであるということを確認に表現しようとして用いられているものであると考えられる。この時点では、先に挙げた山口明穂（一九九七）と、本質的には似た立場であるということになる。

ここから更に考えが進んで、「主体の直接体験」という積極的なアイデアでキを説明しようとするものに、細江（一九三二）があり、それを追認するものとして、佐伯（一九五九）、湯澤（一九五九）、浅野（一九六九）、鶴田（一九八二）、中西（一九八二）、高山（一九八八）、加藤（一九九八）がある。また、部分的に追認する形で、時枝（一九五四）、岩井（一九七〇）がある。

細江（一九三二）は、キの意味・機能を「目睹回想」と呼んだ。「目睹回想」とは、言語使用者が直接的に体験したことを「回想」したということである。

この発想を追認する高山（一九八八）は、『平家物語』を中心資料とし、平安時代から中世のキの変容の実態を示そうとしており、平安時代におけるキは、体験性があるということに前提にしているような書きぶりである。すなわち、史実や伝説紹介の際に、非体験の事柄についてキを用いた例があることについて、漢文訓読語の用法なるものを想定しており、かつ、それは主観的なものであると考えている。その用法の存在をもってして新しい用法であるとしているのであって、あくまで、キは「主体の直接体験」のマーカであるという立場を取りながら、主体が直接体験していない事柄にキが用いられるのは、キの「直接体験」という主体的なニュアンスを逆手に取った新しい用法なのだと言明付けているのである。『源氏物語』と『平家物語』の地の文の文体的特徴について、違いを次のように述べている。

このような「見えし」「聞えし」という表現で、物語に現実性を与えたり、躍動感、臨場感を与えようとする手法は『源氏物語』には見られない手法である。……（中略）……しかし、係結の「ぞ……見えし」「ぞ……聞えし」による表現はみられないからこれは『平家物語』にみられる一つの強調表現の特徴といえそうである。（五一頁）

なお、会話文においてキは、平安時代に引き続き、体験による過去の用法であるとしている。

たしかに、『源氏物語』と『平家物語』とでは、それぞれ別の文体的特徴を持っているというのは、その通りだろう。

中西（一九八二）^二は、キの意味・機能について、話者の体験回想であり、神話の中で用いられる場合は、話者の体験によらない回想であるとし、神話の中でキを用いるのは、「それを歴史的事実として述べようとする立場に立つからである」としている。

宇都宮（一九九七）は、『海道記』を対象とし、キの意味・機能が目睹回想であるという前提に立ち、その説に当てはまらないものは「誤用」と見ている。

加藤（一九九八・二〇七～二〇八、二一〇）は、研究の結論として、キの基本的な意味・機能は、「その事象が生起するのをその時点で自分自身が直接目撃したり明確に意識したりしたという視覚的・感覚的記憶を伴うものを表現するのに用いる」とし、テンスに関しては、「事象が生起した時点と表現主体がその事象を認識した時点とは同じ」としている。

この「目睹回想」説には、反対論もある。山口佳紀（一九八五）は、次の用例を挙げ、キ
Ⅱ「目睹回想」説を批判している。

○香具山は畝傍雄雄しと耳梨と相争ひき（相諍競伎）神代よりかくにあるらし古も然にあれ
こそうつせみも妻を争ふらしき（万葉集・巻第一・一三）

○音に聞き目にはいまだ見ず佐用姫が領巾振りき（布理伎）とふ君松浦山（万葉集・巻第五・
八八三）

すなわち、これらの用例は、「直接体験」したことではない内容をキで表示しているのであって、反例となるとしているのである。

ここにおいて、先の、中西（一九八二）や加藤（一九九八）の主張との立場上の違いが見られる。すなわち、キの意味を「目睹回想」であるとするのは、反例があるから間違っているとするのか、反例に見えるものはキの意味・機能を逆手に取った表現で問題はないとするかの違いである。

キⅡ「目睹回想」に反するものとしては、他にも、鈴木泰（一九八四）や独自のテンス理論を主張する井島（二〇〇五）がある。鈴木泰（一九八四）は、キ、ケリに関する学説史を見ながら、キⅡ「目睹回想」説を、説明力が弱いと批判する。『源氏物語』に対する吉岡論説や、『今昔物語集』に対する桜井論説（用法分類）を見、『徒然草』についても妥当であるか、諸先行研究を見ながら検討することで、どの場合にもキⅡ「目睹回想」としては、十分に説明できないということを主張している。

この他にも、西田（二〇〇五）の批判があり、また、田中（一九七〇）は、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』を対象とし、キの意味について、「その本原の意味は、確実である」と信じられる過去の事柄を叙述する場合に用いられると結論することができるのである」とし、批判をしている。

高山（一九八八）や加藤（一九九八）に言われている、漢文訓読文の文体的性格の問題が正しいかどうかということは、本研究に直接的には関わらない。本研究で主に扱っている和文系と文体的特徴が違うからキの用法が特別なものになるということであり、キの意味・機能自体に違いはないということであるならば、問題はないということになる。

しかし、これらの先行研究の前提となっている言語使用者の直接体験という説明は、キの本質的な意味・機能を説明せんとするものであり、後述するように、キの指す時間幅についてのモデル化に影響するので、検討する必要がある。

キについては、表現できる過去の幅が限定的であることを指摘したり、その背景を見出す先行研究もあった。細江逸記の時制論が代表的なわけであるが、このモデルは、加藤（一九九八）に引き継がれている。加藤（一九九八）は、キの本質的な意味・機能を言語使用者の体験に置くことで、キの表わす時間的な範囲は基本的に限定されるという考えである。

加藤（一九九八）の対象範囲は、漢文訓読文を含み、本研究の対象範囲とずれがあるわけだが、本研究の対象範囲でも、加藤（一九九八）の立場をとった場合、キのテンス中での意味・機能を限定的なものとして描くことになるし、その立場をとらない場合、限定をかけずに描くことになるわけである。加藤（一九九八）の説の検討は、キがどれほど遠い過去まで表わすかということを左右する。

これに加え、鈴木（二〇〇九）は、「キは当日中の過去は表さない」ということを指摘している。この指摘についての検討は、基準時と同日中の過去を、キが表わすかどうかということを中心とする。

鈴木（二〇〇九：一六七）は、鈴木（一九九二）での「会話文でキ形が実際に発話時からどれくらいへだたった時点のできごとを表わすことがおおいかを、年代などをたよりに調査した結果」から、キの指し示す時間的範囲を検討している。「時間状況語」との関連も踏まえながら調査結果を分析しており、キは、「昨夜から数十年前までのかなりひろい時間的範囲におこったことを表わす」と述べている。なお、この調査の範囲は、「源氏物語の角川文庫・巻五の藤裏葉まで」であるという。

この調査研究に呼応する研究として、加藤（一九九八）が挙げられる。加藤（一九九八：二〇七―二〇八、二一〇）は、研究の結論として、「事象が生じた時点と表現主体がその事象を認識した時点とは同じ。これと発話時点との間には、夜間の睡眠一回等の、比較的長い時間的隔たりが存在する」としている。

そして、山口明穂（一九九六）は、キについて次のように述べる。

「き」の表すものは、現在から見れば時間の隔りのある時の事というものである。たとえば、実際には近い過去のことであっても、「き」を付けた形で表すことで、心理的に遠い時代のこととなり、……（後略）（二〇～二二頁）

これらの言及について、まず、本研究では、「キが発話時から見て当日中の過去を指せるかどうか」という問題に取り組まなければならない。もし、指せないということであれば、キのテンス形式としてのモデルは、限定のなかったものとしなければならない。指せるというのであれば、限定のない「過去」テンス形式としてモデル化することになる。

なお、これらの言及については、鈴木（二〇〇九）がツ、ヌを併せて見ているわけだが、〈基本形〉やケリ、タリ、リで発話時以前のことが表現されている箇所がどれほどあるかということも問題になってくる。キがテンスの形式であり、「過去」を意味するものであると結論付けられたとしても、これは、発話時以前の事柄は全てキでマークされるということ

意味しない。第一章で先行研究を踏まえ確認したように、内容的には発話時以前の事柄でも、述べ方次第で、テンス形式でマークせずに表現することは可能である。

以上のように、これらの先行研究は、本研究の目的上、検討の必要がある。従って、以下の三つを検討する。なお、鈴木（一九九二、二〇〇九）が調査研究により①②を主張しており、加藤（一九九八）が①②③④を主張している。

- ①キの表わす過去の幅は基本的に、「今日より以前」である。
- ②キの表わす過去の幅は基本的に、「およそ人の一生分である数十年前まで」である。
- ③キは、事態の生起を直接体験したということのマーカースとなっている。
- ④宗教的事実・歴史的事実など、何らかの権威によって事実とされている過去の事象を表現する際には、例外的にキが用いられる。

ただし、加藤（一九九八）は、「宗教的事実・歴史的事実など、何らかの権威によって事実とされている過去の事象を、まさしく事実であるとしてあらたまって述べる場合に限り、表現主体にとって、たとえそれが生起するのを自分自身で目撃したという記憶の伴わないものであっても、キを用いて表現する」（同書二〇八頁）という説明を行っている。そして、これは、キの基本的意味・機能は事態の生起を直接体験したというものであるということを通じて逆手に取った用法なのであり（「権威ある過去の事実を本当にあったと証言する際の特殊な用法」（同書二二三頁））、キの基本的な意味・機能と矛盾しないものであると考えている¹²⁾。

加藤（一九九八）は要するに、③を論理の根本にし、③に従って②の「およそ人の一生分である数十年前まで」という規定と、④の規定が成立していると考えているのである。キの基本的な意味・機能は「事態の生起を直接体験したということのマーカース」であり、それゆえにキの表わす過去の幅は基本的に、「およそ人の一生分である数十年前まで」に限定されており、一見③や②の例外とも見える用例は、事態の生起を直接体験したわけでもないことを、あたかも直接体験したことのあるような体で表現しているものであるということを主張しているのである。

以上の先行研究から、本研究では、キが主体の体験と関わるものであるかどうかということが問題となってくる。キが言語使用者の直接体験と関係なく使用できるものであれば、キ

は、テンスの「過去」のメーカーとして機能していると考え、それをモデル化することになり、関係があるものであれば、テンスの「過去」のメーカーであり、かつ、指せる時間幅に限定があると考え、それをモデル化することになる。

二・三 キのモデル化

キのモデル化を行うために、前節で導出された問題を考えたい。直接体験したわけでもない事態の生起をいう場合に使われるキも含めて、キの意味・機能を記述するには、加藤（一九九八）の主張のような立場もあれば、次のような立場も考えられる。すなわち、キには、直接体験したというようなニュアンスはなく、かつ、直接体験していないことを、過去の事態として断定的に述べたてるとはふつうしないのであるという立場である。直接体験していない過去の事態を断定的に述べたてるときは、ふつう、その事態は「何らかの権威によって事実とされてい」たりするものであるという立場である。

前者の立場をとるべきか、後者の立場をとるべきかを考えた際に、本研究は、後者の立場をとるべきであると考え。それは、後者の立場の方が、本研究の対象範囲に含まれるキの用例を自然に説明付けることができるからである。『日本語歴史コーパス』の「奈良―万葉集」コアデータと「平安―仮名文学」コアデータにおけるキ全般という範囲で見ただけの場合に通ずるか、という観点から検討し、キについての解釈を示したい。

(1) 酒の名を聖と負せし(負師) 古の大き聖の言の宜しさ(万葉集・巻第三・三三九)

(2) 古の小竹田壮士の妻問ひし(妻問石) 菟原処女の奥つ城ぞこれ(万葉集・巻第九・一八〇二)

(3) いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ(古今和歌集・三五三)

これらの用例は、「およそ人の一生分である数十年前まで」という範囲を超えた過去を表わしているが、キの使用者は「事態の生起を直接体験」したわけでもないし、また、そのようなニュアンスを強いて読みとることも難しい。ちなみに、たしかに「今日より以前」ではあるようである。

(1)の用例の場合、故事によっており、人の一生分というスケールを超えた過去に位置するものであるし、「何らかの権威によって事実とされている過去」であるという解釈は通る。ここでは、わざわざ詠み手が「事態の生起を直接体験」したという体をとっていると解釈せずとも、「故事によっていることなので、直接体験したことのない過去の事態であつても、断定的に述べたてることができている」という程度で済ますことができる。

(2)の用例の場合、説話上の人物の墓を取り上げているのであり、それらの人物の行為は、詠み手たちから見て、人の一生分というスケールを超えた過去に位置するものであると考えるのが自然であろう。「何らかの権威によって事実とされている過去」であるかどうかという点だけで考えた場合、説話であるからあてはまるといふ可能性は考えられるが、そもそも、詠み手が「事態の生起を直接体験」したというような体をとっているとも解釈しがたい。加藤(一九九八)の考えを敷衍させようとしても、疑問が残るが、本研究の立場からは無理のない説明ができる。(2)は、詠み手から見た過去の事態であるのでキが現れており、かつ、説話によって得た情報であるから断定的に述べたてられているのである。すなわち、説話上の出来事をあたかも「直接体験」したというようなニュアンスは全くないのであつて、ただ、説話上の、昔の出来事を事実に過去の出来事として述べているだけではないだろうか。なお、この場合、キにはただ過去を表わすというテンシ的な意味・機能がただだけで、「断定的に述べる」という要素は、キそのものが関わるものではない。

(3)の用例の場合、歌意から、「およそ人の一生分である数十年前まで」という範囲を超えた過去を表わしていると考えるのが自然だろう。また、「あつたかどうか知らない」ということから、当然、詠み手は「事態の生起を直接体験」したわけではないということも明らかであろう。「何らかの権威によって事実とされている過去」であるかどうかという観点から見た場合も、同じく歌意より考えて、説明を通しにくい。強いて、先行研究の立場から説明を通そうとした場合、次のような論理になる。

(3)の「ありき」は、詠み手が「直接体験」したことのない遠い過去の事態であるが、「何らかの権威によって事実とされている過去」のことであるから、「直接体験」したことのように表現することが許され、キが使用されている。

しかし、歌意を考えると、「あつたかなかつたか知らないが」と詠んでいるのであって、「権威ある事実をそれとしてあらたまつて述べる」という詠み手の態度と表現内容がそぐわない。あるいは、不定の意味においては事情が変わってくるとすれば、先行研究の立場を通すこともできるかもしれない。ただし、その場合、「直接体験した」という意味そのものを変更することになるはずで、それはもはや、先行研究の立場を根本から変更することになるはずである。(3)についてもやはり、キが果たしている機能は、過去を表わすということだけであつて、それ以外のことはないのではないだろうか。

以上の議論から、本研究の検討範囲では、キの基本的な意味・機能は「事態の生起を直接体験したということのマーカ―」であるということをも根本に据えた論理を通すことに無理があることがわかつた。また同時に、キは人の一生のスケールに縛られない範囲の過去を射程に入れる、かつ、直接体験していないことを過去の事態として断定的に述べたてふことはふつうしないという立場に立てば自然な説明が可能であるということもわかつた。

次に、残りの、キが「今日中の過去」を指さないという説について、検討したい。

「中納言」を用い、『日本語歴史コーパス』で、短単位検索、「キー、語彙素…今日」「後方共起1、キーから一〇語以内、語彙素…きAND品詞の大分類が助動詞」で検索したところ、二〇件ヒットした¹³⁾。

その内、「今日」がキを含む句に係っていると考えられるものが、二例確認された¹⁴⁾。

(4) 今日降りし(零之) 雪に競ひて我がやどの冬木の梅は花咲きにけり(万葉集・巻第八・一六四九)

(5) かならず今日奉るべきと思しける御下襲は、色も織りぎまも世の常ならず心ことなるを、かひなくやはとて着かへたまふ。来ざらましかば口惜しう思さましと心苦し。御返りには、「春や来ぬるともまづ御覧ぜられになん参りはべりつれど、思ひたまへ出でらるること多くて、え聞こえさせはべらず、

あまた年今日あらためし色ごろもきては涙ぞふる心地する (源氏物語・葵)

これらの用例に見られる「降りし」「あらためし」という事態は、リアルなもの（キを述べる話者や詠み手のいる世界の時間軸に定位するもの）であり、詠み手から見た「今日」中の「過去」であるだろう。

短単位検索、「キー、語彙素・今朝」「後方共起1、キーから1〇語以内、語彙素・き AND 品詞の大分類が助動詞」で検索したところ、六件ヒットした。その内、「今朝」がキを含む句に係っていると考えられるものが、四例確認された。

(6) 含めりと言ひし梅が枝今朝降りし(零四) 沫雪にあひて咲きぬらむかも(万葉集・巻第八・一四三六)

(7) 言繁き里に住まはずは今朝鳴きし(鳴之) 雁にたぐひて行かましものを(万葉集・巻第八・一五一一)

(8) 今朝の朝明雁が音寒く聞きし(聞之) なへ野辺の浅茅そ色付きにける(万葉集・巻第八・一五四〇)

(9) 今朝鳴きて行きし(行之) 雁が音寒みかもこの野の浅茅色付きにける(万葉集・巻第八・一五七八)

これらも詠み手から見た「今日」中の「過去」であると考えられる。

用例数としては、少ないようであるが、キが「今日中の過去」を指すものは見つけられる。

上代・中古のキはいわゆる近過去も指すものであると見られる余地がある。

最後に、この節のまとめとして、キのテンスの意味はどのようなものであるか示したい。

キは、もっぱら「過去のなもの」ないし「回想的なもの」を表現する形式として考えられてきたものであり、テンス範疇の形式であると考えられるので、第一章で示したように、コムリー(一九八五)のテンスモデルをより具体的なレベルに落とし込む形で、モデル化を行う。

どのように具体的なレベルに落とし込むかというと、第一章で示したように、「時間軸」および「基準時」が言語使用者の認識によってバリエーションを持つことになるので、まず、そのバリエーションを整理することになる。例えば、「時間軸」が当該言語使用者にとっての現実世界の時間軸と同じもので、「基準時」が発話時で、「ひとまとまりの事態もしくは事態の開始点」が発話時よりも前のどこかだった場合、ただ一つのテンス的把握が行な

われるわけで、この例は、一般的には、「絶対テンス」の「過去」であると解釈される。また、例えば、「時間軸」が当該言語使用者にとっての仮想世界の時間軸と同じもので、「基準時」が主節時で、「ひとまとまりの事態もしくは事態の開始点」が主節時よりも前のどこかだった場合も、ただ一つのテンス的把握が行われるわけで、この例は、一般的には、「相對テンス」の「過去」であると解釈される。「時間軸」は、「現実世界の時間軸」と「非現実世界の時間軸」がありえる。「基準時」は「発話時」や「主節時」がありえる。

(10) かからむとかねて知りせ(知勢婆)ば大御船泊てし泊まりに標結はましを(万葉集・卷第二・一五一)

(11) 古の小竹田壮士の妻問ひし(妻問石)菟原処女の奥つ城ぞこれ(万葉集・卷第九・一八〇二)

(12) さはれ、よろづにこの世のことはあいなく思ふを、去年の春、吳竹植ゑむとて乞ひしを、このごろ「奉らむ」と言へば、「いさや、ありも遂ぐまじう思ひにたる世の中に、心なげなるわざをやしおかむ」と言へば、「いと心せばき御ことなり。(蜻蛉日記)

(13) 含めりと言ひし梅が枝今朝降りし(零四)沫雪にあひて咲きぬらむかも(万葉集・卷第八・一四三六)

(11) はキ使用者の「基準時」から見て人の一生を超えるスケールの遠距離過去、(12) はキ使用者の「基準時」から見て人の一生に収まるが今日以前の中距離過去、(13) はキ使用者の「基準時」から見て今日中に収まる近距離過去である。「基準時」は、キ使用者が当該表現を行なった時であり、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」となる。これらの場合の時間軸は、キ使用者から見た「現実世界」の時間軸と同一となる。

(10) と(11)(12)(13)との違いは、「非現実的な時間軸」に定位するものか、「現実的な時間軸」に定位するものかという違いである。(10)は反実仮想の表現であり、表現者にとっての現実世界ではなく、可能世界の時間軸における「基準時」から見た「過去」に「知りせ」が定位される。ここで言う「現実的」というのは、「アクチュアル」と同義で、「非現実的な」というのは、「非アクチュアル」と同義である。

以上の議論から、キは、「基準時」から見た過去を表わすものであり、「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうることがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、反実仮想による「可能世界の基準時」となる。

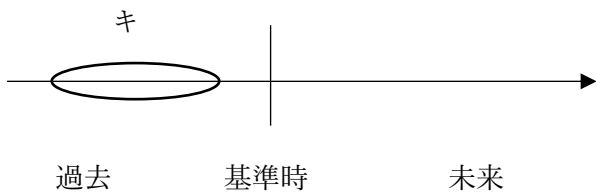


図2 キのモデル

二. 四 ケリに関する問題の導出

ケリの意味が他から得た情報を「回想」するという「伝承回想」論は、細江（一九三二）に端を発するが、その後の研究では、追認するものと批判するものがある。中西（一九八二）は、ケリについて、「人々によって今に伝承されてきた「古にありけること」を回想するもの」、「今における気付き」とし、「ものごとの真実のあり様を自覚すること」が本質であるとしている。更に、中西（一九六三、一九九六）は、ケリの用法を次のようにまとめている。

ケリ 伝承回想 間接的回想

気付き

確信的な判断

一般的判断

また、宇都宮（一九九七）は、ケリⅡ伝承回想説を正しいとし、『海道記』の分析を行っている。

ケリⅡ「伝承回想」論に批判的な研究は多いが、例えば、山口明穂（一九九六）が平安期の用例について、ケリは、「現在の事実をもとに過去を思うもの」と説明し、鈴木泰（一九八四）や、井島（二〇〇五）も違う形でケリの説明をしており、「伝承回想」論の弱さⅡ例外用例があることを指摘している。

次に、「継続」用法があったという先行研究を確認する。

ケリについて、関根（二八九一）は、「過ぎ去りし動作の今まで続けて存せるに云ひ」と述べ、吉田（一九三〇）は、「過去を現在へ継続的に又動作作用を連続的に叙述するに用ふる」と述べ、新井（一九三三）は、「過去の動作が現在に存続する助辞」としている。北条（一九七〇）は、「継承態」であるとしている。

新井（一九三三）は、

単に「けり」を過去辞と称するけれど、時の標準となるべき自己の現在の立場より以前の動作的事実が、諸種の形態と結果を齎して眼前に到達し現存する意義を成すから、過去の動作が現在に存続する助辞と認識すべきである。（八三頁）

としており、また、時枝（一九五四）は、過去の動作・作用が現在に及ぶというものだけでなく、現在にまでは及ばない例もあるとしている。そして、「継続した事実の判断」に用いられるものだとしている。

「けり」は、「あり」の複合した「たり」「り」と同様に、過去に始まった動作作用が継続してゐる事実の判断に用ゐられ、その継続が、過去において消滅したか、なほ現在（話手の立場における）に及んでゐるかによつて、これを回想の助動詞とする説と、現在を表はす説とに分れるが、主要な点は、継続した事実の判断に用ゐられることであつて、過去に属するか、現在に属するかは、問題でないやうである。（一六五頁）

これについて、「過去より現在に及ぶ回想された事実の判断に用ゐられた」例として、

○昔より言ひけることの韓国の辛くもここに別れするかも（万葉集・巻第一五・三六九五）を挙げ、次の「住みける」については、「事實は継続した事実であるが、全く過去に属していると考えている。

○常磐なす岩屋は今もありけれど住みける（住家類）人そ常なかりける（万葉集・巻第三・三〇八）

ここで問題となるのは、「過去から現在にわたって継続している」ものは、「継続」だというラベルを貼ることができても、「現在にまで至っていない」ものには、「継続」だというラベルを貼ってよいものか否か、判断の仕様がな^いということである。ある事態が「過去から現在にわたって継続している」場合は、その「継続」という要素を重視して「継続」というラベルを貼ることはできるだろう。しかし、事態が「現在にまで至っていない」場合には、その事態が過去に生じたことだけを言っていて特別「継続」の意味合^いはないのか、それとも過去に継続していたというニュアンスがあるのか、判断の仕様がな^い。

この問題については、北条（一九七〇）、春日政治（一九四二）が、継続的意味を表わすタリが、後世過去の意味を表わすようになっていったのと似ているのではないかと想定しており、すなわち、もともと「継続」という意味だったところから「過去」の意味に転じていった（「過去」の意味も併せ持つようになっていった）のであって、確認できる用例の最も古い時期には、既に二つの意味・機能が共存していたのではないかというストーリーが考えられている。

山口佳紀（一九八五）は、ケリがもともとは「継続的存在」だったという説に賛成しており、確認の意味を含めて上代のケリ用法を次の六つに分類している（五一二～五一三頁）。

①超時的事態（状態）を、初めて気づいたこと、改めて痛感したこととして述べる。

隼人の瀬戸の巖も鮎走る吉野の滝になほ及かずけり（不及家里）（万葉集・巻第六・九六〇）
みやびをに我はありけり（有家里）やど貸さず帰しし我そみやびをにはある（万葉集・巻第

二・一二七）

②恒常的事態を、初めて気づいたこと、改めて痛感したこととして述べる。

…天の原振り放け見れば照る月も満ち欠けしけりあしひきの山の木末も春されば花咲きにほひ秋付けば露霜負ひて風交じり黄葉散りけり(落家利) …(万葉集・卷第一九・四一六〇)

③過去に起こって結果の残っている動作作用を、初めて気づいたこととして述べる。

家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり(向來) 妹が木枕(万葉集・卷第二・二一六) 田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける(零家留)(万葉集・卷第三三一八)

④過去に起こった動作・作用を、初めて気づいたこととして述べる。

我が大君天知らさむと思はねば凡にそ見ける(見絡流) 和東柚山(万葉集・卷第三・四七六) ますらをと思へるものを大刀きて可波の田居に芹そ摘みける(都美家流)(万葉集・卷第二〇・四四五六)

⑤過去または現在の事態の原因・理由に気づいて、事態の必然性に初めて納得したことを表わす。

朝髪の思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける(所見家留)(万葉集・卷第四・七二一四)
嘆きつつますらをのこの恋ふれこそ我が結ふ髪の潰ちてぬれけれ(奴礼計礼)(万葉集・卷第一二・一一八)

⑥過去の事態を伝聞として述べる。

…もししきの大宮人の罷り出て漕ぎける(枋來) 舟は棹梶もなくてさぶしも漕がむと思へど(万葉集・卷第三・二六〇)
鶏が鳴く東の国に古にありける(有家留) ことと今までに絶えず言ひける葛飾の真間の手児名が麻衣に青衿着け…(万葉集・卷第九・一八〇七)

そして、山口佳紀（一九八五）は、これらの用例分類について、

今まで気づかなかったことに気づく、或いは意識してなかったことをはっきり意識するという共通の意味合いが感取される。ケリにそうした用法のあることは、従来しばしば指摘された所である

と述べる。

ケリは、もともと継続的な意味だったという話をするためにこの用法分類をしたはずだが、一つ一つ取り上げて説明はしていない。ただし、⑥だけ過去に限られたもので、④から展開したものでろうという言及はある。

用例が得られる時代よりも昔のことは何とも確定的なことは言えないが、用例が得られる時代以降、少なくとも外形上は、「過去から現在まで継続している事柄」と「過去に生起し現在はもうない事柄」の両方をカバーしていたということが確認できれば、本研究では、事態の開始が非未来に位置付くという形で、テンス形式としてモデル化ができることになる。従って、「継続」のニュアンスがあったかどうかということについては、立ち入らないことにする。

次に、ケリに未来を指す用法があるかないかという議論を見る。

山岸（一九四〇）は、ケリに「未来」用法を認めている。未来の事象を取り上げて、ケリを使うものも少数ながらあるとし、次の用例を挙げている。

○式部卿宮、明けん年ぞ、五十になり給ひける（源氏物語・乙女）

これに対し、山口明穂（一九九六）は、時を示す副詞成分の指定と述語の時は、古語の場合は一致しなくてもよかったと他にも次のような例を挙げて説明している。

○「あきらけき鏡にあへば過ぎにしも今ゆく末のことも見えけり」（大鏡）

○……永き世にありける（有家留）ものを世の中の……（万葉集・巻第九・一七四〇）

木之下（二九六四）も、ケリが未来を表わすとする説を批判する。「……未来時の事象に「けり」を用いるという意見には従えない。山岸博士や竹岡氏が、「けり」が未来時の事象に用いられていると言われるのは次のような例である。（九〇一〇頁）」とし、次の用例を挙げている。

○式部卿の宮、明けむ年ぞ五十になり給ひける。（源氏物語・乙女）

○昨日今日と思ひ給ふる程に、御はてもやうやう近うなり待りにけり（源氏物語・幻）

○よかめり。憎げに押し立ちけることなどはあるまじかめり（源氏物語・若菜上）

たしかに、例えば「五十になり給ひける」というのは、地の文であり、物語で語られる内容を過去のものとして扱う語り手の視点から発せられたものであると解釈すれば、ケリは過去であると言うことができそうである。「御はてもやうやう近うなり待りにけり」というのは、「御はて」が発話時から見て未来のことではあるが、ケリはあくまで「近うなり待りに」に接続しているのであって、事態そのものは過去に生じたものとして捉えるのが自然である。「今はまだ近くなっていない」というニュアンスではないだろう。「押し立ちける」は、「新編日本古典文学全集」では、ケリでなくタリであり、そもそも不審な用例である。ケリに特別、未来の意味・機能があつたとは認めがたい。以上の言及を踏まえつつ、ケリのモデル化を行う。

二・五 ケリのモデル化

ケリは、様々な先行研究でその意味・機能、あるいは用法について議論されてきた。その中から、本研究の目的上、立場を決めておかなければならないことは、ケリをテンスの範疇で捉えても問題はないかということである。

鈴木（二〇〇九・三八一）は、ケリをテンスに入れないという立場をとっている。ただ、次のようにも述べている。

ツ・ヌ形、キ形、ケリ形であらわされるできごとを時間軸上にならべると、発話時を基準にすると、その日のあけがたまでがツ・ヌ形、昨夜以前からほぼ人間の一生の範囲内

までがキ形、人間の一生の範囲をこえたそれより以前はケリ形で表わされるという分担が一見成立しているようにも見える。しかし、過去でもキ形では表せないはるかとおい過去のできごとをケリ形があらわすのは、伝承や物語りなどに依拠してその内容をとりあげるといふ、あとでのべるようにケリ形の〈言及〉の用法として説明するのが適当であつて、単純に時間軸上の位置の問題としては処理できない。鈴木(二〇〇九:三八一)

ケリの持つ本質的な意味・機能は、あくまでテンスとは違うものであり、積極的にはテンスの形式としては認めていないという程度であろうか。

鈴木(二〇〇九)の立場はさておき、本研究では、たとえケリの本質的な意味・機能がテンスとは違う範疇のものであつても、ケリをテンスの枠組みの中で捉えるという立場をとることにしたい。それは、たとえ消極的であつたとしても、ケリは非未来の事態を言う際に用いられていると考えられるからである。テンス体系の全体像を描こうという場合には、含まないわけにはいかないのである。

ケリが現れているとき、表現主体が事象を認識した時点は事象が生起した時点よりも後。ただし、事象が生起後にも継続している場合があるので、同時と考えられる場合もある。その場合にも表現主体は認識した時点よりも事象の生起時点の方が前だと意識していると考えられる。(加藤一九九八:二一〇)

ケリが非未来の事態を言う際に用いられているというのは、これによつていふ。本研究の対象とする用例においてもこれは適うものであると考えられる。また、本研究の想定するテンスの枠組みにも適合する。「表現主体が事象を認識した時点は事象が生起した時点よりも後」という規定は、ケリ使用者の認識レベルで「基準時から見て、事態が時間的にどこに位置付けられるかを表わしわかる」ことにあてはまる。とりもなおさず、本研究の言うテンスのマーカであることになる。

先の言及に賛成した上で、本研究の方法に従った記述を行なう。具体的には、用例にあたりながら、ケリによって表現されている事態と時間軸および基準時との関係性、時間軸および基準時のバリエーションを記述していくこととする。

(14) 右大臣住まずなりにければ、かの昔おこせたりける文どもをとり集めて返すとて、よみておくりける (古今和歌集・七三六・詞書)

(15) むかし、たけとりの翁といふものありけり。 (竹取物語)

(16) 式部卿の親王、閑院の五の御子に住みわたりけるを、いくばくもあらで女御子の身まかりにける時に、かの御子の住みける帳のかたびらの紐に文を結びついたりけるをとり見れば、昔の手にてこの歌をなむ書きついたりける (古今和歌集・八五七・詞書)

(17) 昔より言ひける (伊比祁流) ことの韓国の辛くもここに別れするかも (万葉集・巻第二五・三六九五)

(18) 今の世にも昔の世にも、この皮は、たやすくなき物なりけり。 (竹取物語)

(14) (15) の場合、ケリによって表現されている事態は、書き手の「記述時」を「基準時」と考えて、それより過去の事態であると考えられる。この場合、遠い昔の出来事を記述することもできる。作り話をする場合、「遠い昔」としながら、可能世界を想定し、「非現実的な時間軸」に事態を定位することもできる。

(16) は、時間的な距離はわからないが、先と同じく、書き手の「記述時」を「基準時」と考えて、それより過去の事態であると考えられる。

(17) の場合、習慣的に「昔」から言い伝えられているということが表現されており、「昔」から現在近くにわたる範囲が射程となっている。

(18) は、ほとんど発話時現在と捉えられそうなものであるが、加藤(一九九八)のいう「事象が生起後にも継続している場合があるので、同時と考えられる場合」にあてはまると考えられる。

ケリが表わす過去の範囲は、「基準時」より過去ということになる。ただし、キとは違って、事態が現在も続いていることもありうる。

以上の議論から、ケリは、「基準時」から見た過去を表わすものであるが、事態の生起時点が過去に位置づくというものである。その点、キとは違って、「基準時」にあっても事態が続いている場合がある。「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうることがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、想像による「可能世界の基準時」となる。

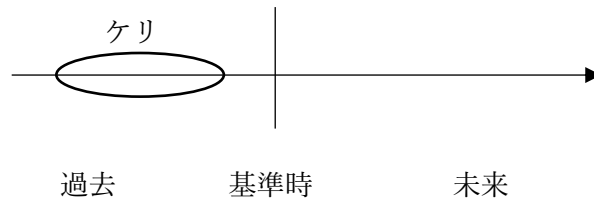


図3 ケリのモデル (パターン1)

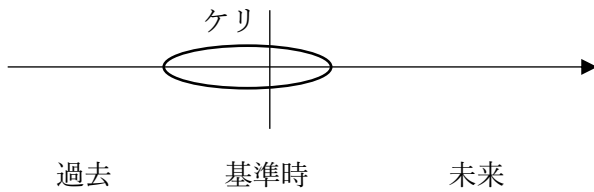


図4 ケリのモデル (パターン2)

二・五・一 「あなたなる場」と本モデルとの関係

竹岡（一九六三）は、「あなたなる場」というモデルを考えている。このモデルに素直に従えば、ケリは「未来」すらもカバーするものであり、時制とは関わりのないものとなる。

「あなたなる場」というモデルは、叙述の際に、どこかへメインとなる視点を置いている場合は、そのメインの対象を非ケリで表示し、そのメインの話の筋からずれている対象をケリでマークするというモデルである。すなわち、「かたり」の流れの中で、メインの筋を追っている際に、挿入句的に、焦点となっている対象とは別の事柄について情報を提示する際に現れるのが、ケリなのであるという考えである。名称については、メイン対象の場を「現場」と呼び、メインではない方の場を「あなたなる場」と呼んでいるわけである。

○いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる児の御容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。(源氏物語・桐壺)

○風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじうものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、事にもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。(源氏物語・桐壺)

○ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつありさまを聞こしめす。(源氏物語・桐壺)

竹岡(一九六三)の説明では、

物語中の現場は光源氏と桐壺帝とが中心人物であるに対し、「けり」の付いている傍線部は「一の御子」についての叙述であって、今、この物語中に展開されている現場からは、「あなたなる」世界についての叙述になっている。

となつている。先の用例については、「物語中の現場は、桐壺帝を中心としてその側から見た弘徽殿の人柄の叙述になっているのに対し」、ケリの付いている文では、「今のそういう現場からは別の、上人・女房などの作者の側からの叙述になっており、物語のこの辺の主流からは挿入的叙述となっている」と述べている。どれも同種の用例として挙げられている。

右の三つの解釈については、ケリでマークされている叙述情報がまさに挿入句的であり、「あなたなる場」のモデルで問題がないように思われる。

○その屋には、女ひとり泣く声のみして、外の方に法師ばら二三人物語しつつ、わぎとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜もみな行ひはてていとしめやかなり。清水の方ぞ光多く見え、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の声尊くて経うち読みたるに、涙の残りなく思さる。(源氏物語・夕顔)

これについては、「この物語中の現場からは遙か別の「あなたなる」世界であるかのように眺められている」としている。また、作者の「目」が物語中の「現場」の人物と重なっている叙述の仕方がされているとも述べている。

これについては、先ほどの「メイン叙述の中に別の時間帯の情報が挿入句的に入ってきて、ケリでマークされている」というものとはやや違っている。こちらは、メイン叙述の中の一連の話の一つとして語られる「遠景」の情報にケリがマークされているというのである。そして、

○惟光とく参らなんと思す。あり処定めぬ者にて、ここかしこ尋ねけるほどに夜の明くるほどの久しきは、千夜を過ぐさむ心地したまふ。(源氏物語・夕顔)

については、「過去から現在までの継続」という従来あった説にも合致する用例として挙げられている。ただし、これも竹岡(一九六三)の論理では、「あなたなる場」の事であるが故、ケリでマークされているのだとするはずである。実際、そのように内容を解釈することはできると考えられる。

そして、次は、ケリが前文脈と同時的関係を結ぶことが確認できる用例として挙げられている。

○朱雀院の帝、……例ならずなやみわたらせたまふ。……さるべき御心まうけどもせさせたまふ。御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四ところおはしましける、その中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもものしたまひければ、御まじらひのほども心細げに

て、大后の、尚侍を参らせたてまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。(若菜上)

大木(一九九八)は、地の文では二つの時間の流れとケリが絡み合っているとし、「あなたなる場」説を考える価値を示唆している。

これに対して、春日(一九六四)は、「迎え取り」モデルを提示し、「あなたなる場」モデルを批判している。「あなたなる場」は、ケリと関係なく成立しうることなのではないかという批判である。

ケリの関与する時が未来にもわたるばあい極めて稀に存するのは、いわゆる常在必至ないし超時間的真理に対してその川途が拡大された例であろう。それはあたかも「いま」が超時間的に未来の事象に対して用いられるのと奇しくも共通する所であって、つまり今という現在点に立って未来を迎え取る程のものであろう。「けり」の時における定位は現在であるが、それは過去を常に迎え取る姿勢において、元来時間的に無色のものではあり得なかった。それが時間的に解放され、対象の動作を客観する姿勢において常在必至の事象に向けられることになったもので、この二次的段階を竹岡説は「あなたなる場」の叙述と純空間的に表現されたものと思う。「あなたなる場」の叙述が中心となって種々なる意義が付会形成されたと見ることは説明の便宜上からは都合のよい場合もあるが、実は原理的には方向が逆であり、一方的な見方であると思う。

しかし、先の用例やその他の用例を見る限り、情報を時間的空間的に離れたところから得ている姿勢はケリに読み取れるのであり、「あなたなる場」のモデルを否定しきけることは難しいと思しい。

本研究のモデルから考えれば、「あなたなる場」のモデルと齟齬を来しうるのは、ケリが「未来」をも表しうるという点であるが、先行研究の指摘を見る限り、事態そのものの生起

が絶対テンス上の「未来」に位置付いていると見なくてもよいのではないかと考える。すなわち、竹岡（一九六三）自身が説明しているように、語り手の視点というのは、登場人物の視点と重なることもあれば、戻ってきて「語り手」としての視点そのものから語られることもあるのであり、「未来」だと言われている例は、作品世界を客観的に見ている「語り手」の視点なのであるとできるだろうし、そうすれば、「未来」であるという必要はなくなる。

第二章のまとめ

本章では、キ、ケリの時に関わる文法形式としてのモデル化を行った。キについて、単なる「過去」と見る先行研究と「回想」的なものと見る先行研究を確認することで、問題を導出し、次に、キによって表される時間範囲が、基準時から見ておおよそ昨日以前に限られるのではないかという意見と、おおよそ人の一生のスケールに収まるのではないかという指摘を確認し、問題を導出した。そして、それら導出された問題について、検討し、キの意味・機能について、モデル化を行った。

キは、「基準時」から見た過去を表わすものであり、「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうるということがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、反実仮想による「可能世界の基準時」となる。

その後、ケリについて考えた。まず、ケリがどの時点を指すかという問題について、先行研究の議論を踏まえて検討し。その後「あなたなる場」との関係性に触れた。

ケリは、「基準時」から見た過去を表わすものであるが、事態の生起時点が過去に位置づくというものである。その点、キとは違って、「基準時」にあっても事態が続いている場合がある。「時間軸」は「現実的な時間軸」も「非現実的な時間軸」もありうるということがわかった。「現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、「発話時」や「詠唱時」、「記述時」がありえ、「非現実的な時間軸」の場合、「基準時」は、想像による「可能世界の基準時」となる。

「あなたなる場」理論については、未来のことをも対象としようと考えらば本モデルと齟齬を来すが、語り手の視点に着目すれば、未来のことをも対象としようと考えれば本モデルと齟齬を来すが、語り手の視点に着目すれば、未来のことをも対象としようと考えれば本モデルと齟齬を来すが、特に「あなたなる場」理論と本研究のモデルの間に矛盾関係は見られなくなった。

第二章の参考文献

- 浅野信（一九六九）『日本文法語法論』桜楓社
- 天野恵子（一九七五）「竹取物語における文体——助動詞「けり」」平安文学研究会編『平安文学研究』第五四集、平安文学研究会
- 新井無二郎（一九三三）『国語時相の研究』中文館書店
- 井島正博（二〇〇五）「中古和文の時制と語り——「今は昔」の解釈に及ぶ」『日本語学』第二四卷第一号、明治書院
- 糸井善太郎（一九三七）『万葉集語法私論』非売品
- 岩井良雄（一九七〇）『日本語法史 奈良・平安時代編』笠間書院
- 大坪併治（一九七七）「説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリ——訓点資料を中心に——」『国語学』第一一一集
- 春日和男（一九六四）「助動詞「けり」の二面性——竹岡説に思う」『国文学 言語と文芸』第三四号
- 春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』岩波書店
- 加藤浩司（一九九二）「助動詞キ・ケリの機能——最勝王経古点・三宝絵詞・今昔物語集を資料として」田島毓堂・丹羽一弥編『日本語論究 2 古典日本語と辞書』和泉書院（加藤浩司（一九九八）所収）
- 加藤浩司（一九九三）「古代語における文章の「視点」「体験性」——和泉式部日記におけるキとケリの使用を例として——」『名古屋大学国語国文学』第七二号（加藤浩司（一九九八）所収）
- 加藤浩司（一九九四）「蜻蛉日記における助動詞キ・ケリの用法について」『名古屋大学人文科学研究』第二三三号（加藤浩司（一九九八）所収）
- 加藤浩司（一九九五・三）「助動詞キ・ケリが示す「体験性」の差異について——付、大鏡における公事・私事の錯綜——」『信州大学人文科学論集』第二九号（加藤浩司（一九九八・一〇）所収）
- 加藤浩司（一九九五・七）「上接語・下接語から見た助動詞キ・ケリの差異——品詞レベルでの分析——」『ことばの研究 長野県ことばの会会誌』第七号（加藤浩司（一九九八・一〇）所収）

加藤浩司（一九九五・九）「法華經訓読における助動詞ケリの変遷——「気づき」の意味はいつまで理解されていたか」名古屋・ことばのつどい編集委員会編『日本語論究4 言語の変容』和泉書院

加藤浩司（一九九七・三）「キ・ケリ研究史概観——付、編年体研究文献目録」『信州大学人文科学部人文科学論集文化コミュニケーション学科・第三二号（加藤浩司（一九九八）所収）』

加藤浩司（一九九七・一二・一〇・㉔）「キとケリが示す事象の生起と認識と発話時との時間的距離について——土佐日記を資料として」『帝塚山学院大学研究論集』第三二集、帝塚山学院大学

加藤浩司（一九九七・一二・㉔）「上接語の相違から見た助動詞キ・ケリの差異——「自己卑下」の敬語と「くげなり」に着目して」名古屋・ことばのつどい編集委員会編『日本語論究』

5 敬語』和泉書院

加藤浩司（一九九八）『キ・ケリの研究』和泉書院

木之下正雄（一九六四）「けり」について』『国文学 言語と文芸』第三四号

桑原博史（一九六九）「徒然草における二つの場」『国語と国文学』第四六巻第五号、至文堂

国立国語研究所（二〇一六）『日本語歴史コーパス 平安時代編』
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html（二〇一九年七月三〇日確認）

国立国語研究所（二〇一七）『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html#manyo（二〇一九年七月三〇日確認）

鈴木淳一郎（一九八八）「ケリ」の変遷についての一考察』『中央大学国文』第三一号、中央大学国文学会

鈴木泰（一九八四）「き」「けり」の意味とその学説史』『武蔵大学人文学会雑誌』第一六巻第三・四号

高山伸司（一九八八）「過去の助動詞「き」について」『二松学舎大学人文論叢』第三九集、二松学舎大学人文学会

竹岡正夫（一九六三）「助動詞「けり」の本義と機能——源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として」『国文学 言語と文芸』第三二号、大修館書店

田中喜美春（一九七〇）「和歌における「き」「けり」』『月刊文法』第二巻第七号

鶴田常吉（一九八二）『日本文法学 上・下』国書刊行会

時枝誠記（一九五四）『日本文法 文語篇』岩波書店

中西宇一（一九八二）「動詞性述語の史的展開」（2）アスペクト テンス 態・時」川端善明他編『講座日本語学2 文法史』明治書院

西田隆政（二〇〇五）「助動詞キと「直接体験」——地の文での係り結びの使用傾向をめぐって」『国語と国文学』第八二巻第一二号

原田芳起（一九五五）「上代日本語動詞の時について——通時論的な一二の問題」『樟蔭文学』第七号、大阪樟蔭女子大学

北条忠雄（一九七〇）「いわゆる「過去の助動詞」とは」『月刊文法』第二巻第七号

細江逸記（一九三二）『動詞時制の研究』泰文堂（一九七三『動詞時制の研究（訂正新版）』篠崎書林）

堀重彰（一九四一）『日本語の構造』畝傍書房

馬淵和夫（一九六四）「助動詞「キ」と「ケリ」の区別はなんとみるべきか」『国文学 解釈と鑑賞』第二九巻第一〇号

山岸徳平（一九四〇）「古典の論理的解釈と日本文学の再吟味」皇朝文学会編『皇朝文学』白帝社（山岸徳平一九七三『山岸徳平著作集IV 歴史戦記物語研究』有精堂出版所収）

山口明穂（一九九六）「古典解釈と文法」『国語と国文学』第七三巻第一一号

山口明穂（一九九七）「古代日本語に於ける時間の意味」『紀要』第一六六号（文学科第七九号）、中央大学文学部

山口明穂（二〇〇四）「助動詞「けり」と古典の解釈」『月刊言語』第三三巻第一二号

山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』第三節・第四節、有精堂出版

山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館

湯沢幸吉郎（一九五九）『文語文法詳説』右文書院

吉岡郷甫（一九二二）『文語口語対照語法』光風館

吉田茂晃（一九九七）「古代日本語における形容詞時制述語」『山辺道』第四一号（天理大学）

吉岡曠（一九九六）『物語の語り手——内発的文学史の試み』笠間書院

第三章 ツ、又

三. 一 本章の目的

本章では、ツと又の時に関わる意味・機能をモデル化することを主眼とする。ツと又については、先行研究において、基本的にアスペクトの観点からのモデル化が進められてきた。なお、ここで言う「アスペクト」とは、「完成相か未完成相か」「ひとまとまりかひとまとまりでないか」という観点に限らず、「事態の内的時間展開のどの部分を指すか」という広めの観点で使用されているものである。それらの先行研究で議論されている内容を検討し、それをブラッシュアップすることで、ツと又のより正確なモデルを示したい。

また、モデル化を行うだけでなく、そのアスペクト的発想のモデルとテンスとの関係性を明らかにする。なぜこのようなことをしようとするのかと言えば、まず一般的に、アスペクト形式がもう一つの時間的意味・機能範疇であるテンスと深く関わっているのは、指摘されてきたことであり、文法形式の時間的側面を明らかにしようとする場合は、必ず検討しなければならないからである。そして、実際にツ、又はテンスとの関係性が先行研究で取り上げられており、より詳細な説明が必要であると考えられるからである。

更に、ツ、又の接続語彙の偏りについて、モデルとの関係性を示しておく。接続の偏りはツ、又の意味・機能にとって本質的なものと考えられ、モデルとの齟齬がないか確認しておく必要がある。なお、これは本研究の主眼から見れば傍系の研究にあたるが、先行研究で残されている問題の一部に、本モデルから一定の説明を与えることができると考えられるものである。

三. 二 ツ、又の意味・機能についての先行研究概観

本節では、次節で見る先行研究以外の先行研究を見、ツ、又の時に関わる意味・機能についてどのように考えられてきたか、確認しておく。次節で見る先行研究は、ある一定の共通した方向性を持ち、ツ、又の時に関わる意味・機能をモデル化しているものだが、それ以外にも多くの研究、指摘はあるので、本研究の研究史上の位置を明らかにするためにも、触れておく必要がある。

ツと又の意味・機能について、先行研究では、主に両形式を対立的なものとしながら、多くの言及・主張が行われており、それらはおおよそいくつかの方向性として把握することが

できる。先行研究のタイプについては、松尾（一九三六）、桑田（一九七八、一九八八）、井手（一九九五）にまとめられており、先行研究一つ一つということであれば、鈴木（二〇〇九）、井島（二〇一一）に、非常に詳しくまとめられている。

本研究では、ツ、ヌに纏わる個別具体的な研究史を見る（＝先行研究を研究する＝先行研究の主張内容について、なぜそのような主張が導かれたか検討する）のではなく、時に関わる意味・機能の面での言及（＝「時に関わる観点から言つて、ツ、ヌの意味・機能は……というものである」という類の言及）と、ツ、ヌの外形的特徴（＝接続語彙の偏りや用法）を見る必要がある。すなわち、アスペクトや動作態といった用語・概念で表される範疇でのツ、ヌの意味・機能についての言及と、ツ、ヌの使用に関する数量的調査に注目する必要がある。

ツ、ヌの意味・機能についてアスペクトの観点から言及するものは数多いが、議論の前提となる事態の内的時間展開の捉え方や用例解釈の態度が異なるという問題が絡み、多くの先行研究では意見・主張が噛み合わず、方向性のある議論の展開はあまり見出せない¹⁵⁾。

ツ、ヌの意味・機能の違いを言おうとしている先行研究として、表現に曖昧さはあるものの、小林（一九四一）が挙げられる。

「つ」は動作の完了と共に動作の惹き起す結果の観念を持つてゐるものである。

動作の完了が主観的には過去の意味を齎すことは、「ぬ」の場合と違はない。その差は唯その結果の観念を伴ふところに在る（三一七頁）

これとは対照的に、井手（一九九五）は、ツのついた動詞は、「動作過程に焦点がおかれ、その動作過程を中心に把えられた動作自体を表現」するとし、動作の完了、終結の意味であると見ている。対して、ヌのついた動詞は、「動作作用の結果に注目し、その結果である状態の方に焦点をおいた動作作用を表現」するとし、「動作の完了の結果発生した状態変化に注目する」、「その結果である状態の発現をもってその動作が終了する（走り行く、行ってしまう）のを、あとから追認するという消極的な完了認定」をするものであると言う。

次に、より分析的な先行研究を見ていく。山田（二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七）を確認したい。この一連の研究は、ヌで表現される事態は、より大きな事態の行程に位置付けられることがあり、「空間的に伸張する事態」の場合、「事態の既発」とはつきりわかるもの、「事

態の既済」とはつきりわかるもの、曖昧なものがあるというふうにつまえている。山田(二〇〇七)によれば、以下のパターンがある¹⁰⁾。

(1) 事態の既済を示す場合がある。その場合、事態の行程は事態が終焉するまで形成される。

○「クラモチノ皇子ハ蓬萊ノ玉ノ枝ヲ取りニ」おはしぬ」と人には見え給て、三日ばかりありて、(難波ニ)漕ぎかへりたまひぬ。(竹取物語)

(2) 事態の既済を示し、事態の行程が完成している場合がある。

○(弁ガ薰ニ)「……、年ごろよからぬ人の(私ニ)心をつけたりけるが、人(弁)をはかりごちて、西の海のはてまでとりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えて、その人もかしこにて亡せ侍にし後、十年あまりにてなん、(私ハ)あらぬ世の心ちしてまかりのぼりたりしを、……」など聞こゆるほどに、(源氏物語・橋姫)

(3) 事態の既済を示し、事態の行程が完成しているか否かが不定である場合がある。

○正身(浮舟)の心ちはさはやかに、いささかもおぼえて見まはしたれば、一人見し人の顔はなくて、みな老いほうし、ゆがみ衰へたる物のみ多かれば、(浮舟ハ)知らぬ国に來にける心ちしていとかなし。(源氏物語・手習)

(4) 事態の既済を示すものの、事態の行程は完成することなく、既済の事態と同趣の事態が引き続いて生起する場合がある。この場合、当該事態はその行程が延長されたより大きな事態の全行程の中途(経由地)までを行程とするものである。

○今は和泉の国に來ぬれば、海賊ものならず。(土佐日記)

(5) 「おはす」や「参る」などの「行く」「来」の意を有する敬語動詞が用いられた表現の言及する事態では、事態の既済と事態の既済のいずれを示すのか不分明であり、事態の行程の完成についても不分明である場合がある。

○(源氏ハ左大臣邸内ノ) わが御方にて、御なをしなどはたてまつる。(源氏ハ紫上邸へ) 惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。(紫上邸ノ) 門うちたたかせ給へば、心知らぬ物開けたるに、御車をやをら引き入させて、(源氏物語・若紫)

以上、五パターンが挙げられているが、移動動詞における「既発」と「既済」なるものがどういうものなのかモデルがはっきりとしないために、「既発」と「既済」という正反對の意味合いが出てきているものと考えられる。たしかに、(1)の用例「おはしぬ」について、「蓬萊ノ玉ノ枝ヲ取りニ」出発した」という解釈をし、その「出発」という概念の内容自体から「既発」という捉え方をすることは、文章の内容解釈自体としては、可能なことである。また、例えば、(2)についても同様に、「西の海のはてまでとりもてまかりに」について、「まかりに」の到達点である「西の海のはて」が表示されていることから、その文章の内容解釈として、「既済」という捉え方をすることは、可能なことである。すなわち、「おはしぬ」については、「出発する前」から「出発した後」の段階への移行と見て「既発」と言い、「まかりに」は、「移動中」の段階と「移動が終わってストップした後」の段階と見て「既済」と言うことは、文章の内容解釈上は、成り立ちうることである。しかし、それならば、「西の海のはてまでとりもてまかりに」というのは、「西の海のはてまで至る前」の段階と「西の海のはてまで至った後」という捉え方も可能なはずであり、これをもって「既発」とラベリングしてもよさそうなものである。

また、同じく、小田(二〇〇七)は、次の用例を観察することで、又の意味に「変化の始発の局面」と「変化の完成の局面」の二パターンがあるとしている。

- (A) 渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに(伊勢物語)
- (B) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる(古今和歌集・一六九)
- (C) はかなく暮れぬれば、その夜はとどまりたまひぬ。(源氏物語・宿木)
- (D) 秋は来ぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜な鳴かむ風の寒さに(古今和歌集・四三二)

小田(二〇〇七)は、(A)(B)を「変化の始発の局面」、(C)(D)を「変化の完成」であると解釈している。たしかに、文章内容上の解釈として、(A)を「日が暮れ始める」と読

み、(C)を「日が暮れ終わる」と読むことは、可能であろう。(B)を「秋が来始める」と読み、(D)を「秋が来終わる(すっかり秋になっている)」と読むことも可能だろう。しかし、ものによっては逆にして、(A)を「日が暮れ終わる」と読み、(D)を「秋が来始める」と読むことも、可能ではないだろうか。

このような問題は、又だけではなく、ツの分析においても起こりうる。竹内(二〇一四)は、上代の用例を対象とし、ツ、又を変化の表現であるとした上で、又は、テイナイ状態からテイル状態への変化を、ツは、テイナイ状態からテイル状態への変化とテイル状態からテイナイ状態への変化のどちらもありうるとしている。ツの用例としては、以下のものを挙げている。

♫ 我も見つ(吾毛見都) 人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城処(万葉集・卷三・四三二)
♪ 剣大刀身に取り副ふと夢に見つ(夢見津) 何の兆そも君に逢はむため(万葉集・卷四・六〇四)

♫ 霜雪もいまだ過ぎねば思はぬに春日の里に梅の花見つ(梅花見都)(万葉集・卷八・一四三四)

♫ 思ひつつ来れど来かねて三尾の崎真長の浦をまたかへり見つ(又顧津)(万葉集・卷九・一七三三)

このうち、♫は、テイル状態からテイナイ状態への変化の用例であり、♫は、テイナイ状態からテイル状態だという。しかし、これも、♫などは、テイル状態からテイナイ状態への変化としても、用例解釈上、不可能ではないはずである。

以上の先行研究が示唆しているのは、事態毎の内的時間展開のモデル化をより精緻化して示さなければ、ツ、又について、一貫性のあるモデル化を行うことが困難になってしまうということである¹⁷⁾。

これら、ツと又の表現するアスペクトの意味合いが説によって異なるという状況の中、基本的な考え・姿勢が一致しており、ツ、又で意味・機能をそれぞれ一本化させたモデルを提示している先行研究がある。そのようなモデルを提示している先行研究としては、中西(一

九五七)、吉田(一九九二)、大木(一九九三)、竹内(一九九三)、井島(二〇一一)がある。⁸⁾特に、井島(二〇一一)は、事態毎の内的時間展開を精緻にモデル化しようとしており、本研究としては着目する必要がある。

次節では、これらの先行研究の提示するモデルを把握し、モデルに残された問題を把握する。

三. 三 井島モデルに至るまでの先行研究

三. 三. 一 中西モデルから井島モデルへ

中西(一九五七)、吉田(一九九二)、竹内(一九九三)、井島(二〇一一)では、又の意味を「状態の発生」や「発生」、「過程の始発」などと規定し、ツの意味を「動作の完了」や「完了」、「過程の終結」などと規定している。例えば、竹内(一九九三)は、「ぬ」は発動・移行性の完了を外面的(話し手不関与・傍観的)に表す」とし、「つ」は完結性の完了を内面的(話し手関与・確認的)に表す」としている。

まず、「状態の発生」、「発生」、「過程の始発」、「動作の完了」、「完了」、「過程の終結」の内実について、先行研究はどのような説明を行っているだろうか。先行研究では、「状態の発生」、「発生」、「過程の始発」とはすなわち事態の開始局面そのものであり、「動作の完了」、「完了」、「過程の終結」とはすなわち事態の終了局面そのものであると捉えている。例えば中西(一九五七)は、図五を挙げ、次のように述べる。

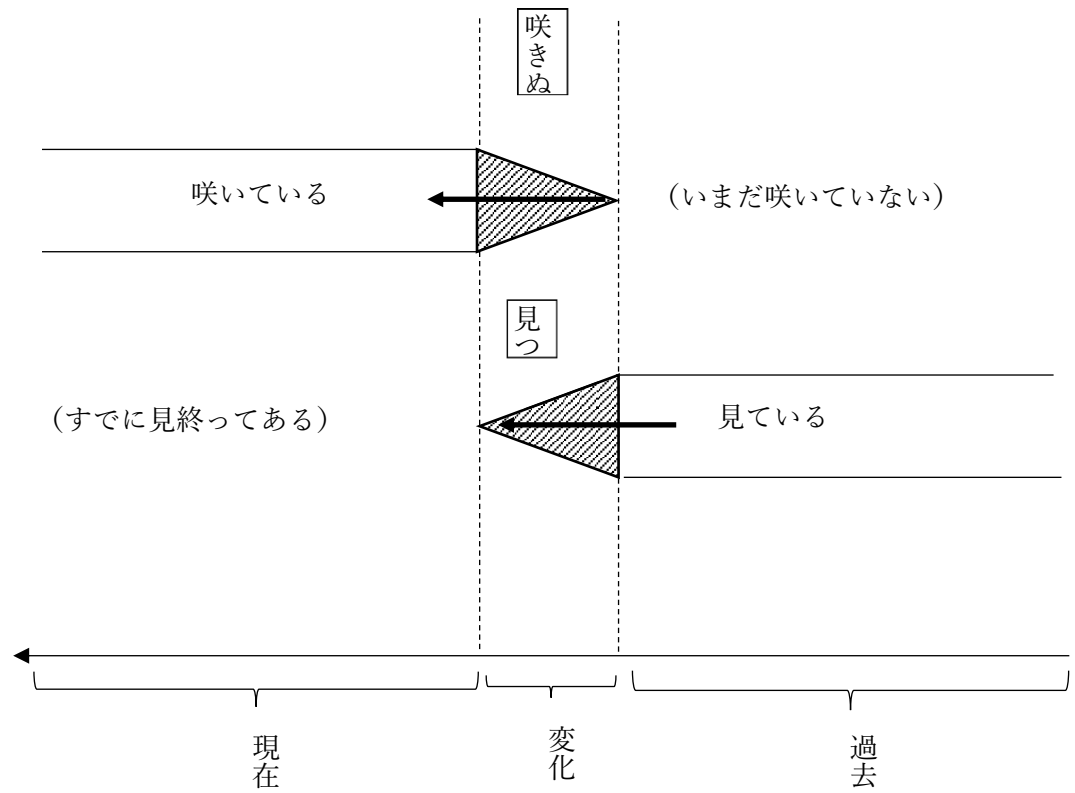


図 5

すなわち、「ぬ」「つ」いずれも過去から現在への変化を意味し、その変化の方向は「ぬ」が未来に向う変化の方向を示し、「つ」は過去から終る変化の方向を示す。すなわち「は」は発生変化を示し、他は完了変化である。したがって「つ」における完了動作は過去より変化時までを亘り、「ぬ」における発生状態は変化時より現在、さらに未来に亘ってその状態を持続するものとなるといえよう。

図五の「咲きぬ」と「見つ」が配されているところは、まさに事態の開始位置と終了位置である。中西（一九五七）は、又、ツの意味そのものは「過去から現在への変化」であると述べるが、ここでのいう「変化」とは、「状態の発生」においては事態の開始そのものことである。「動作の完了」においては事態の終了そのものことである。ただ、「咲きぬ」、

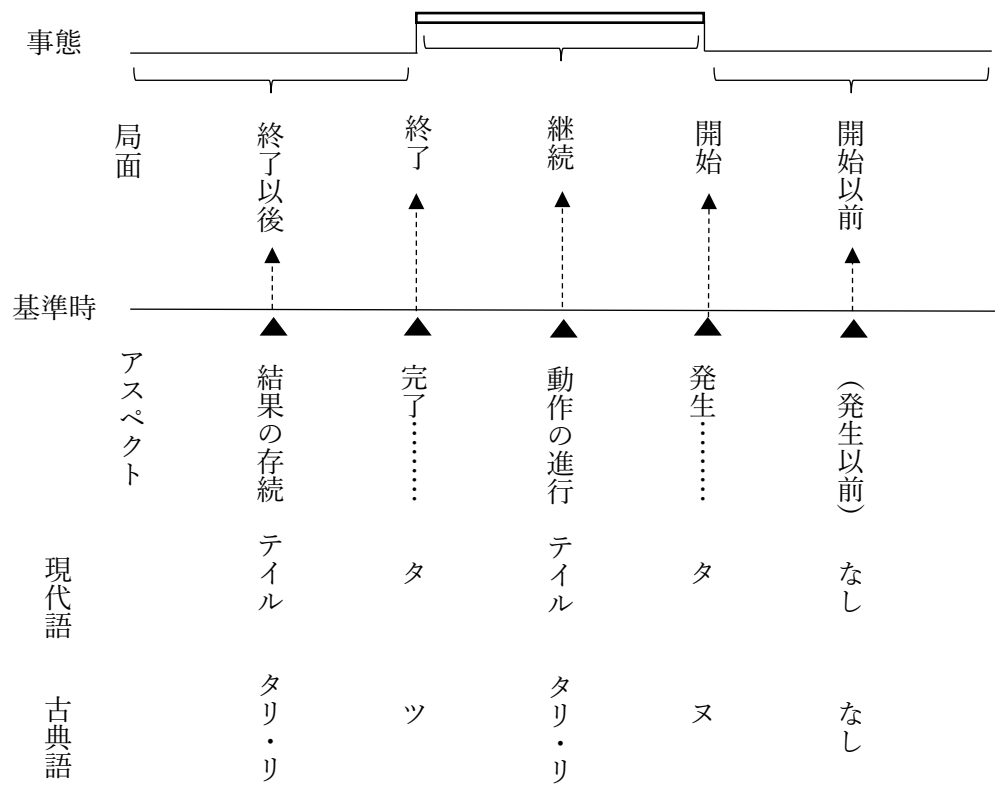
「見つ」、又、ツにあたるのがそれぞれ矢印なのか、斜線部なのかはつきりせず、又は「変化」前の局面や後に続く中途局面とは切り離されると考えているのかどうか、また、ツはその前の局面である中途局面や後に続く「完了」後の局面と切り離されて考えているのかどうか、はつきりしない。

また、中西（一九八二）は、「ひと」の動作なるものと「ものごと」の作用・状態なるものの区分の中でツ、又、タリ、リの付いた動詞述語を解釈しようというモデルを考えている。ここでは、「うぐいす鳴きぬ」は「うぐいすが鳴く季節になった」という意味だという解釈をしており、後の井島モデルなどと比べると、未だ十分な分析的態度をとりきれていない段階だと言えるだろう。内容の解釈として間違っているわけではないが、言語の機能・意味という観点からは、精緻化の余地がある。

また、吉田（一九九二）は、中西（一九五七）の又、ツに対する意味規定の内実は正しいと考えている。ただし、「状態の発生」と「動作の完了」というネーミングはその内実を宿す語として相応しくないと考えたため、又は「過程の始発」、ツは「過程の終結」を表わすものであると呼び替えている。

井島（二〇一一）は、又、ツの意味規定に関して、基本的に中西（一九五七）に従うものである。すなわち、又の意味を「状態の発生」、ツの意味を「動作の完了」とする発想に従い、それをより分析的に発展させている。なお、先の吉田（一九九二）で触れた「状態」、「動作」という名称の問題については、井島（二〇一一）も「事態」という呼び方に一本化しており、解消されている。

井島（二〇一一）は図表一を挙げつつ、次のように述べる



図表 1

ただし、相対テンスのシステムでは、事態同士の全体としての前後関係を表わすことはできるが、事態の時間的展開の内部に立ち入って、ある時点（以後「基準時」と呼ぶ）において、当該事態が時間的展開のどの段階にあるか（以後「局面」と呼ぶ）を表わすことはできない。そのような機能を担ったシステムのことを、「アスペクト」と呼ぶことにしたい。ここで、局面を順に「開始以前」「開始」「継続」「終了」「終了以後」と呼べば、アスペクトは、基準時に 事態が開始局面にあることを「発生」、継続局面にあることを「動作の進行」、終了局面にあることを「完了」、そして事態からはみ出すことになるが、開始以前の局面にあることをとりあえず「発生以前」、終了以後の局面にあることを「結果の存続」と呼ぶことにする。……（中略）……結論先取りのではあるが、発生を表わす形式は、現代語ではタ（・トコロダ）、古典語ではヌ、動作の進行を表わすのは、現代語ではテイル（・テイルトコロダ）、古典語ではタリ・リ、完了を表す

のは、現代語ではタ（・タトコロダ）、古典語ではツ、結果の存続を表わすのは、現代語ではテイル、古典語ではタリ・リであると考えられる。（一三四頁）

井島（二〇一一）は、事態というものの内的時間展開を考え、そのうち開始局面を表わすのが又であり、終了局面を表わすのがツであると考えている。

中西（一九五七）、井島（二〇一一）であまり気にされていない問題として、又とツが指す先や、指す意味内容についての記述ないしモデルの正確さが今一步不足しているということがある。特に、井島（二〇一一）のモデルで見た場合、又が指すものは「事態開始局面」という点的なものであり、ツが指すものは「事態終了局面」という点的なものであり、又は事態の終了局面や継続局面を表わすことに関与せず、ツが事態の開始局面や継続局面を表わすことに関与しないということを言い含むことになるはずである。すなわち、又は開始局面のみを表わし、ツは終了局面のみを表わす、というのが井島（二〇一一）の主張であると読み取れるのである。この点について見れば、中西（一九五七）のモデルの方がやや緩やかかもしれない、又は「変化」という局面から「現在」という局面にかかり、ツは「過去」という局面から「変化」という局面にかかるもので、どちらも少し幅が意識されている可能性はある¹⁹⁾。

ただし、中西（一九五七）のモデルも、「つ」における完了動作は過去より変化時まで「亘り」というところと、「ぬ」における発生状態は変化時より現在、さらに未来に亘ってその状態を持続するもの」というところで、「変化」と言われていることの内実に幅を認めているのかどうか、曖昧である。

また、井島（二〇一一）モデルが他の先行研究と大きく違っている点として、ツ、又のモデルに（アスペクト形式のモデルに）、「基準時」を導入していることが挙げられる。この点についても、議論の余地があると考えられ、次節で取り上げることとする。

以上を概説すれば、これら中西（一九五七）、吉田（一九九二）、井島（二〇一一）は又を事態の開始ないし開始局面を意味するもの、ツを事態の終了ないし終了局面を意味するものとして扱っており、ツ、又のアスペクトに関わる意味・機能を統一的に理解するための有効なモデルを与えてくれていると見ることができるとは。ただ、中西（一九五七）のモデルと井島（二〇一一）のモデルを併せ見たとき、そこには精緻化の余地が今尚あると考えられる。

三.三.二 井島(二〇一一)のアスペクトと事態の内的時間展開モデル

本節では、先行研究の中でも比較的精緻なモデルを提示している井島(二〇一一)を見る。井島(二〇一一)は、先に触れたように、ツ、又自体の意味・機能だけを単純に提示するだけでなく、事態の内的時間展開のタイプ分けをし、事態のタイプごとのツ、又の使われ方を提示している。ただし、変更すべき点も残されているので、本節では変更すべき点を整理し、次節に繋げる。

まず、ツ、又自体の意味・機能については、前節でみたように、ツが事態終了局面を指し、又が事態開始局面を指すという意見である。そして、ツ、又の意味・機能には、本質的に「基準時」が備わっていると考えている。これらのことは、先に掲載した図表一に表現されている。

井島(二〇一一)は、事態の内的時間展開のタイプとして、「行為事態」、「変化事態」、「複合事態」の三タイプを考えている。井島(二〇一一)がその三タイプを導出するに至った過程を見ておきたい。

井島(二〇一一)は、現代語で考えた非能格自動詞と非対格自動詞と他動詞が語彙的に持つ時間構造を考え、そのモデルを中古語の事態の時間構造にそのまま当てはめる形で応用しようとしている。

ここで、この述語構造を、アスペクト理論と組み合わせることにしたい。

……(中略)……

これまでの現代語の議論を中古語にあてはめて考えてみたい。ただし、現代語の動作アスペクトの議論から、中古語の事態アスペクトの議論にシフトした段階で、もはや非能格自動詞非対格自動詞他動詞、あるいは使役動作基幹動作という概念を用いるわけにはいかない。ここでは、およそ使役動作に対応する「行為事態」、基幹動作に対応する「変化事態」というものを考えたい。すなわち、行為事態は典型的には人間の意志的行為を表わすが、意志的ではない場合、人間ではない場合などもある。また、変化事態も典型的には事物の変化を表わすが、事物でなく人間である場合、変化でなく動きである場合などもある。

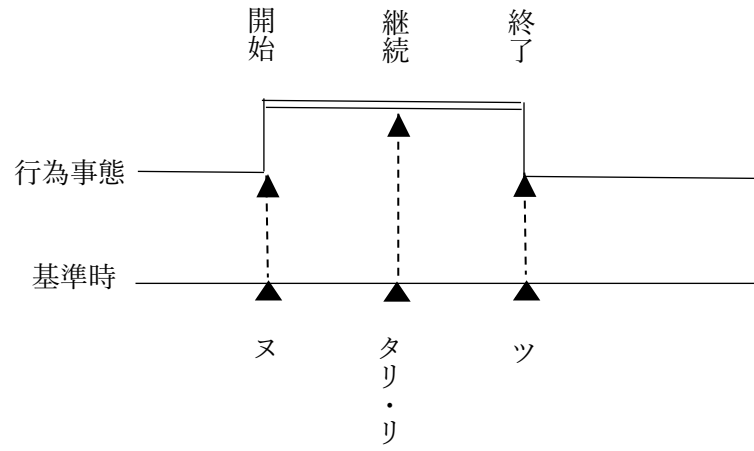


図6 中古語の行為事態

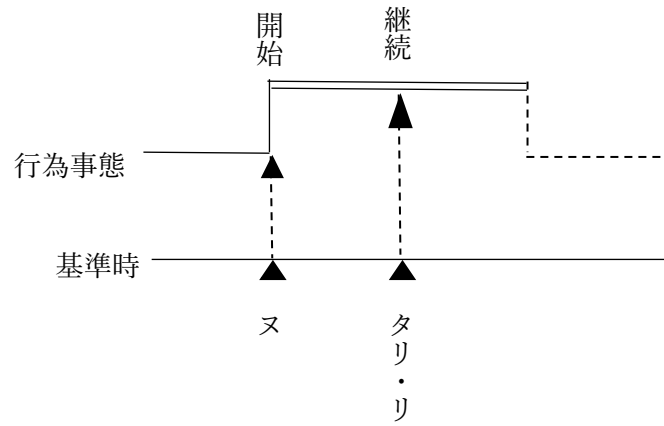


図7 中古語の変化事態

さて、ある具体的な出来事は、行為事態、変化事態単独で表現されることもあるが、行為事態と変化事態とが複合したもの（以後これを「複合事態」と呼ぶ）として表現されることもあると考えられる。複合した事態は、他動詞にあたる場合が多いとはいえ、他動詞であっても行為事態のみの場合（打撃動詞など）もあり、自動詞であっても複合事態の場合（移動動詞など）もある。（一八一〜一八三頁）

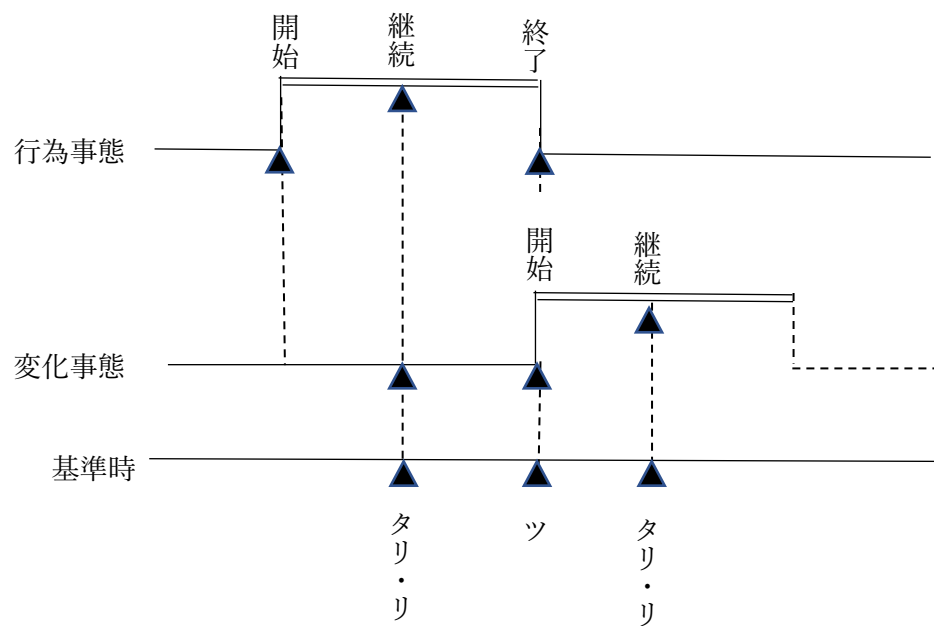


図8 中古語の複合事態

これが、井島(二〇一一)の考える「アスペクト」であり、ツ、ヌの位置である。なお、このモデルについては、現代語で作成したモデルを中古語に当てはめるところにやや飛躍があると思しいところがあり、モデルの導出過程に問題があると言えるかもしれない。ただ、結果としては、中西(一九五七)と比べても、より正しい方向にモデルが精緻化されていると考えられる。なお、ここで「飛躍」と言ったのは、「現代語の動作アスペクトの議論から、中古語の事態アスペクトの議論にシフトした段階で」、動詞の話から「事態」の話に移行している点や、それに付随して、現代語のモデルの方でポイントだった〈意志性〉の要素を取り消している点であり、結果、なぜ、この「現代語のモデル」をこの「中古語のモデル」に当てはめれば話がうまく進むのか、よくわからなくなっている点である。ただし、この問題については、現代語の方の動詞の構造についての議論がネックになっていると思しく、本研究の関心からはややずれるので、これ以上は立ち入らない。

これら事態の内的時間展開のタイプ別に場合分けされたモデルには、以下のような問題が残されていると考えられる。

- ① 「行為事態」という名称が不適切であること。
- ② ツ、ヌの指す対象が点的理解になってしまっているため、「動作態」形式との違いがわからなくなってしまうところ。

①については、井島(二〇一一)自身、「行為事態は典型的には人間の意志的行為を表わすが、意志的ではない場合、人間ではない場合などもある。」と述べているように、自然現象の事態にツが接続した場合に、自然現象の事態を「行為事態」と呼ばざるを得なくなり、不適切である。例えば、「(雨や雪などが)降る」という動詞にツの接続する用例があるが、この用例解釈の際に、「(雨や雪などが)降る」というのは、「行為事態」であると言うことになり、奇妙なことになる。例えば、

(1) 我が袖に降りつる(零鶴) 雪も流れ行きて妹が手本にい行き触れぬか(万葉集・巻第一〇・二三二〇)

(2) 秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にみだるるもみぢ成けり(後撰和歌集・和歌下)

(3) 今年いたう荒るるとなくて、斑雪ふたたびばかりぞ降りつる。(蜻蛉日記)

(4) 日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。(源氏物語・蓬生)

等の用例が挙げられる。「(雪や雨が)降る」という、「行為」とは呼べない現象にツが接続しているものである。

この問題については、モデルの更なる精緻化という観点から、「行為事態」という名称の変更は行うべきであると考え、次節で行うこととする。

②については、前提として、井島(二〇〇五・一一、二〇〇七・一一、二〇一一・二)は、ハジメル、ツヅケル、オウル等の補助動詞的形式群が表現する、時に関わる文法的な意味・機能を「動作態」というレベルに置き、現代語でいうタ、テイル、古典語でいうツ、ヌ、

タリ、リが表現する時に関わる文法的な意味・機能を「アスペクト」というレベルに置いている(先の図表一)。そして、「アスペクト」は「基準時」と必ず関係を結ぶものであり、「動作態」は「基準時」とはそのままで関係せず、純粹に事態の内的時間展開を表わしわけるのであるとしている。つまり、「アスペクト」と「動作態」との意味・機能の違いは、「基準時」を持つか否かであり、ツ、ヌとオワル、ハジメルはどちらも事態を点的に取り上げるものであることは共通していると考えている。

「基準時」を持つか否かで違うと言うが、しかし実際は、「動作態」形式も、例えばアクチュアルな時間軸に定位するということがあり得るが、そのような場合に、「アスペクト」形式と「動作態」形式とで意味・機能が違ってくることについて、どのような説明を与えるのだろうか。加えて、「動作態」形式と「アスペクト」形式が共起する場合は、モデルをどう解釈してよいか、よくわからなくなってしまう。

例えば、現代語で考えれば、「太郎が走り始める」と「太郎が走った」、「太郎が走り続ける」と「太郎が走っている」、「太郎が走り終わる」と「太郎が走った」があり、実際は、これらの表現には意味・用法の面で差が生まれうるわけだが、その差がこのモデルでどう理解できるか、説明しにくいのではないかと考えるのである。

「太郎が走り始める」と「太郎が走った」の違いは、「基準時」のあるなしだけでなく、事態の内的時間展開をどのように取り上げるか、どこを指すか、ということところにもあるように考えられる。

そして、実際に用例を見た場合、そのような点的解釈がそぐわないのではないかと考えられるものが出てくる。

(5) むぐらはふ下にも年は経ぬる身なにかは玉のうてなをも見む (竹取物語)

(6) むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しと思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。(伊勢物語)

(5) の「経ぬる」は井島(二〇一一)のモデルに従えば、「経始めた」といったことと同じ内的時間展開の捉え方をすることになるが、「長年を経始めた」なり「長年を経

出した」なり、「長年を経ること」の内的時間展開の開始部に焦点が当たっているように思われぬ。(6)の「月日を経ること」についても同様である。

(7) 君が行き日長くなりぬ(成奴) 山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ(万葉集・巻第二・八五)

(8) 大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ(物念瘦奴) 人の兇故に(万葉集・二・一二二)

(9) 思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く世の中憂きことと思ひ憂じはてて、帝の御母后のおもと人、この知れる人のなかにいひやる。(平中物語)

(7) も、「久しくなり始めた」や「久しくなり出した」等、事態開始部に焦点を当てるような解釈はそぐわないように思われる。(8) も、「瘦せ始めた」などという、事態の内的時間展開上の開始部に焦点を当てたニュアンスと取るのは、歌意にそぐわないだろう。(9) の「かからずなりにける」は、望みをかけていた司召の機会を逃してしまったということであろう。ある状況が確定的になったものとわかる。(9) も、「かからずなり」「始めた／出した」というニュアンス解釈では変になる。

75

(10) 雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとほり来つ(来津)(万葉集・八・一五七四)

(11) 「いで見む。誰が子ぞ。われいまは老いなりとて、若人求めてわれを勘当したまへるならむ」とあるに、いとをかしうなりて、「さは、見せたてまつらむ。御子にしたまはむや」とものすれば、「いとよかなり。させむ。なほなほ」とあれば、われも、とういぶかしさに、呼び出でたり。聞きつる年よりもいと小さう、いふかひなく幼げなり。(蜻蛉日記)

(10) は、「たもとほり」とあることから、「来つ」が「来終わった」などと事態の終結部に焦点を当てたニュアンスであると解釈するのは苦しい。(11) も「聞き終わり」という事態の終結部をわざわざ分析的に表現しようとしているとは考えにくい。

引き続いて、「逃がしつ」の場合を考えたい。

(12) 「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。(源氏物語・若紫)

従来、主体動作客体変化動詞の「逃がす」の内的時間展開は、「逃がす前の局面」、「逃がすという行為中の局面」、「逃がした後の局面」という「動作的」側面と、対象物の「逃がされる前の局面」、「逃がされた後の局面」という「変化的」側面の複合として捉えられているだろう。そして、その複合の在り方としては、井島(二〇一一)のモデルでは、「逃がすという行為中の局面」の終了点と、「逃がされた後の局面」の開始点が重なりと捉えられるはずである。

しかし、実際は、井島(二〇一一)モデルのように点的な解釈ができるものでないと考えられる。「逃がす」の場合、主体の「逃がす前の局面」があり、その次に、「逃がすという行為中の局面」がある。そして、主体の「逃がす前の局面」は、客体の「逃げる、逃がされる前の局面」と重なる。ここまでは、従来と変わりはない。次に、主体の「逃がすという行為中の局面」が始まった段階で、客体の「逃がしている、逃がされている最中の局面」が始まる。

ここの「逃がすという行為中の局面」と「逃がしている、逃がされている最中の局面」の複合体は、実際の事態によって様々であろう。客体が積極的な意志性を持っている場合は「逃がしている」様子が際立ち、そうでない場合は「逃がされている」様子が際立つ。(7)の用例であれば、「犬君」が「鳥」を逃がすにあたって、具体的にどのような行動を行ったか(「鳥」が「犬君」に逃がされるにあたって、どのような過程を経たか)によって、様々であろう。そして、この「鳥」が「逃がされる」過程というのは、その開始の部分から、徐々に変化していく様相であって、「逃げそうになっている」ところから「逃げおおせたところ」までの間に、わかりやすい点(瞬間的な点)が存在しているわけではない。従って、「逃がすという行為中の局面」と「逃がし終わった後の局面」との間にもわかりやすい点(瞬間的な点)が存在しているわけではない。

井島(二〇一一)自身、「典型的には」と但し書きをしているように、それらを全て点的・瞬間的なものと見てしまうのは、問題である。たしかに、モデル化をしているわけなので、ある程度の様相は捨象するということは必要である。しかし、このツとヌのモデルに関しては、点的・瞬間的なもののようにまで捨象してしまつては、正確な分析が困難になる。

次節では、これらの問題を克服する形で(井島二〇一一)のモデルをブラッシュアップする形で、本研究のモデルを提示する。

三. 四 本研究のモデル

本節では、前節の検討を踏まえて、井島(二〇一一)モデルに調整を入れていく形で本研究のツ、ヌのモデルを提示する。その前に、便宜上、各「局面」の名称を改めておきたい。

「開始以前」を「事態開始前局面」、「開始」を「事態開始局面」、「継続」を「事態中途局面」、「終了」を「事態終了局面」、「終了以後」を「事態終了後局面」と呼びかえておきたい。これは、元の名称に問題があったからではなく、あくまで便宜上の変更である。

まず、①の、「行為事態」という名称を改める件について、検討する。

要は、「行為」か「行爲」じゃないかということは、このモデルでは考えなくて大丈夫なのであり、名称については、「変化事態」の方のモデルと区別がつきさえすればよい。といって安直に「不変化事態」などとしてしまうと、これはこれでまた内実にそぐわない名称となつてしまふのである。

「変化事態」と呼ばれていたモデルと「行為事態」と呼ばれていたモデルそのものの形に着目すれば、前者は「事態開始前局面」と「事態開始局面」と「事態中途局面」を持つものであり、後者は「事態開始前局面」と「事態開始局面」と「事態中途局面」と「事態終了局面」と「事態終了後局面」を持つという違いがある。この点に着目し、「変化事態」は、「三局面事態」、「行為事態」は、「五局面事態」と呼びかえることにする。なお、「複合事態」については、「三局面事態」と「五局面事態」の「複合」したものであることと、「複合事態」という名称のままでもよいだろう。なお、「変化事態」の方まで名称を変更したのは、呼び方を一貫性のあるやり方で統一した方がよいだろうという考えに基づく。

次に、②の、ツとヌの指すものが点的に表現されてしまつていふ問題について、改善案を提示する。

本研究では、ツとヌが指している局面を点的なものとするのではなく、ツは「事態中途局面」から「事態終了後局面」への移行関係を指し、ヌは「事態開始前局面」から「事態中途局面」への移行関係を指すものである。それを図にしたものが、図六～図八である。なお、更に正確なことを言えば、前節で指摘したように、「事態開始局面」と「事態終了局面」は見出しにくいものがあるわけで、そのことまで場合分けしてモデルに示した方が精緻なわけだが、本研究で検討する内容にとっては、描き分けなくても困らないので、割愛する。

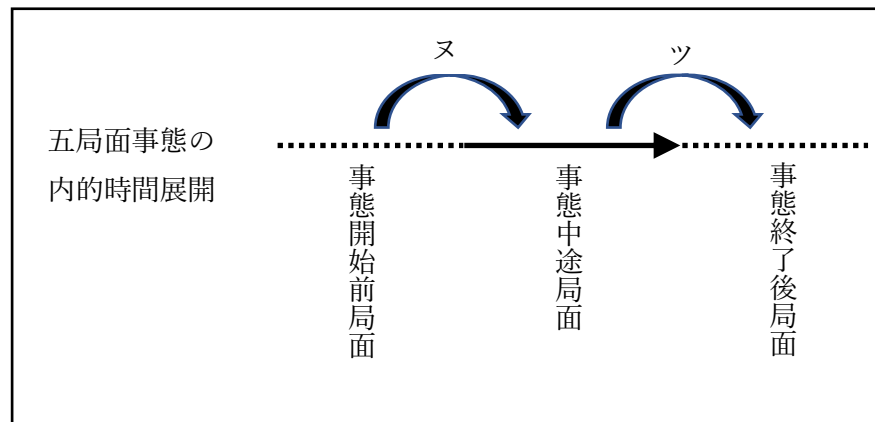


図9 五局面事態

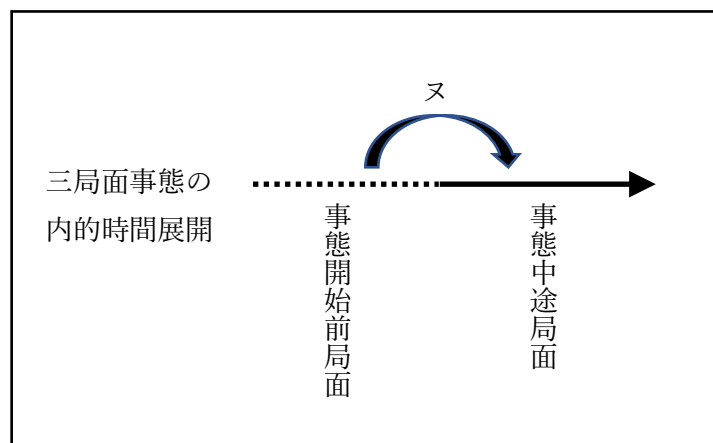


図10 三局面事態

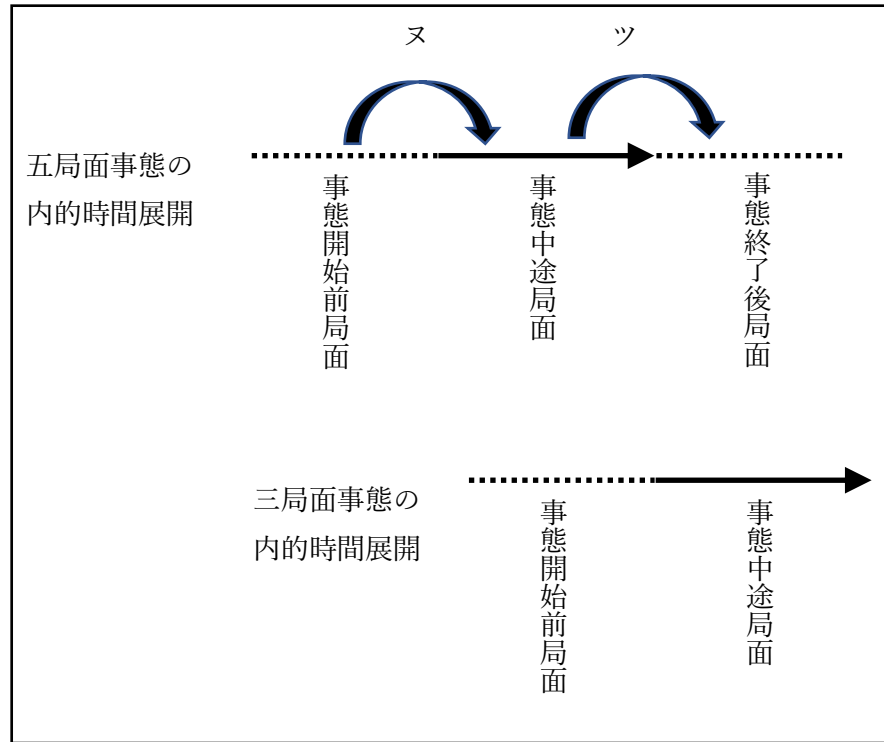


図11 五局面事態と三局面事態の複合事態

これによって、ツ、ヌは、事態の内的時間展開の捉え方という点で「動作態」と違うということになる。以下の用例のように、開始や終了を意味する「動作態」は、点的に「事態開始局面」と「事態終了局面」を指している。

- (13) 妹が紐解くと結びて竜田山今こそもみちはじめてありけれ(黄葉始而有家礼)(万葉集・巻第一〇・二二二一)
- (14) さて、十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗り始めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。(土佐日記)
- (15) 世にふるをうき身と思ふわが袖のぬれはじめける宵の雨かな(落窪物語)
- (16) ある人、県の四年五年果てて、例のことも皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべきところへわたる。(土佐日記)

なお、これらの図では、「基準時」を表現していないが、「基準時」を省くべきであると考えているわけではない。ツ、又と「基準時」との関係性を説明しなければならぬのだが、このことは、後の議論で取り上げることになる。

この新モデルが井島(二〇一一)のモデルと比べて、どう良くなったか説明しておく必要があるだろう。まず、①の名称に関しては、もはや言うまでもないだろう。②の問題に関しては、前節の(5、12)のツ、又の用例解釈が自然に行えるようになり、その他の用例に対しても支障なく解釈できる。同じ用例を以下に再掲し、確認しておきたい。

(前節の用例再掲)

(5) むぐらはふ下にも年は経ぬる身のかは玉のうてなをも見む(竹取物語)
(6) むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦し
と思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。(伊勢物語)

(7) 君が行き日長くなりぬ(成奴)山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ(万葉集・巻第二・八五)

(8) 大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ(物念瘦奴)人の児故に(万葉集・二・一一二)

(9) 思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く世の中憂き
ことと思ひ憂じはてて、帝の御母后のおもと人、この知れる人のなかにいひやる。(平中物
語)

(10) 雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたもとほり来つ(来津)(万葉集・八・一五七四)

(11) 「いで見む。誰が子ぞ。われいまは老いなりとて、若人求めてわれを勘当したまへ
るならむ」とあるに、いとをかしうなりて、「さは、見せたてまつらむ。御子にしたまはむ
や」とものすれば、「いとよかなり。させむ。なほなほ」とあれば、われも、とういぶかし
さに、呼び出でたり。聞きつる年よりもいと小さう、いふかひなく幼げなり。(蜻蛉日記)

(12) 「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえ
たるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めた
りつるものを」とて、いと口惜しと思へり。(源氏物語・若紫)

(5)の「経ぬる」は、自身の地上での生まれや、今までの暮らしぶりを表現するもので、「未だ長く経てはいない局面」と「すでに長く経ている局面」を把握したうえで、それらの移行関係を指すマーカーとして、又が現れている。(6)も「未だ月日が経ていない局面」と「すでに月日が経ている局面」およびそれらの移行関係を指すマーカーとして、又が用いられていると考えられる。(7)も、「未だ久しくなっていない局面」から「久しくなっている局面」への移行関係を又が表示していると考えられる。(8)の場合、「未だ痩せていない局面」と「すでに痩せている局面」の移行関係を表わすマーカーとして又が現れているのだと説明すれば、無理はないように考えられる。(9)は、「望みをかけて司召の機会をうかがっていた局面」が事態開始前局面で、「司召の機会を既に失っている局面」が事態中途局面である。

(10)の「来つ」は「君」のもとまで来たということ、「来る」という移動の実行中局面である「事態中途局面」と辿り着いた後の「事態終了後局面」が取り上げられ、それらの移行関係をツが指されている。(11)の「聞きつる」というのは、「聞いていた」ということであり、聞くという事態は終了している。すなわち、「聞くこと」の実行中と終了後局面の移行と見ることができる。(12)の「逃がしつ」は、「逃がす」という行為中の局面である事態中途局面と「逃がし終えた後の局面」＝「事態終了後局面」の移行関係であると捉えられる。

以上、井島(二〇一一)のモデルからの解釈では不審さがあつた用例について、本研究のモデルから解釈を試みた。以下では、本研究のモデルの有効性を確認するため、その他の用例についても解釈しておきたい。

又の場合

- (17) 翁いふやう、「我朝ごとと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。(竹取物語)
- (18) たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごと、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。(竹取物語)
- (19) 散りぬとも香をだにのこせ梅の花恋しきとき思ひいでにせむ(古今和歌集・四八)
- (20) 君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る(伊勢物語)
- (21) このあひだに、雨降りぬ。(土佐日記)

(22) 「大殿油まみれ」など言ふまぎれに、這ひよりて、遣戸の片の樋に添へて、えさぐらすまじく、さしてさりぬ。(落窪物語)

(17) の「知りぬ」は、「翁」が竹の中にかぐや姫のいたことを知ったことを指し、今まで知らなかったことを知るようになったという意味で、「まだ知らない」というところから「すでに知っている」ということへの移行関係として読み取れる。(18) の「かさなりぬ」は、「たけとりの翁」がかぐや姫を見つけた後、「黄金ある竹」を見つけることが度重なるようになったことを指し、「かさなる」という事態がまだない局面と、既に実現している局面が読み取れる。(19) の「散りぬ」は、咲いていた「梅の花」が散ることを指し植物の様子の移り変わりにおける局面の内、「まだ散っていない局面」と「既に散っている局面」が捉えられている。(20) の「過ぎぬれ」は、相手が来ると約束した夜ごとに、待つてはみるものの、いつも来ないで過ぎていくということであり、「まだ過ぎていない局面」と「既に過ぎていく局面」が捉えられている。(21) の「降りぬ」は、「この間に」という期間に「降っていない局面」から「降っている局面」へ移行したことがわかる。なお、これは、三局面事態において又が用いられている例である。(22) の「さりぬ」は、動作主が場所を去ることを指し、「まだ去っていない局面」から「もうすでに去っている局面」への移行が表現されていると考えられる。

ツの場合

(23) たけばぬれたかねば長き妹が髪このころ見ぬに搔き入れつらむか(搔入津良武香)
(万葉集・巻第二・一二三)

(24) 夏葛の絶えぬ使ひのよどめれば事しもあるごと思ひつる(念鶴鴨) かも(万葉集・巻第四・六四九)

(25) 「御前に御遊びなどしたまへるを、からうじてなむ聞えつれば、『たがものしたまふならむ。いとあやしきこと。たしかに問ひたてまつりて来』となむのたまひつる」(大和物語)

(23) の「掻き入れること」は、終了のある動作であり、「掻き入れつらむか」は、もう掻き入れてしまったかどうかを考えている。すなわち、「掻き入れる」ということが、実行中の「事態中途局面」と、実行後の「事態終了後局面」がツによって表現されている。

(24) の場合、「思っている最中の局面」と「もう思い終わった後の局面」が取り上げられている。ただし、ここで言う「もう思い終わった熱尾の局面」というのは、「今はそのような思考はしない」というような意味合いは含まない。あくまで五局面事態の「思ふ」であって、ある時間の流れで「何かあったのか」という思考をした、ということである。事態中途局面は当該思考がはたらいっている段階のことであり、事態終了後局面は当該思考をはたらかせていない段階のことである。例えば、人は、何か考え事をする時間と、その考え事を切り上げた後の時間というのがあり得るが、ちょうどそれと同じである。

以上、見たように、ツは「事態中途局面」と「事態終了後局面」の移行を捉えるアスペクト形式であり、又は「事態開始前局面」と「事態中途局面」の移行を捉えるアスペクト形式であると見ることができる。

(25) は、「〜とおっしゃいました」という意味だが、「おっしゃっている最中の局面」と「おっしゃり終わった後の局面」との移行関係をツが指していると見て大丈夫だろう。

以上、本研究のモデルの有効性を示した。

三. 五 テンスレベルで機能するツ

本節では、アスペクト形式であるツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムを、本研究のモデルから説明する。まずツがテンスとして機能しているのではないかと指摘している鈴木(二〇〇九)の言及を確認する。そして、用例を見、ツそのものがテンス形式だと言えるわけではないということ踏まえる。次に、実際にツがテンスレベルで過去を表現しているように見える用例を確認し、その過去の射程が近過去に収まるものではないということを確認する。その後、井島(二〇一一)のモデルでは、ツがテンス的に過去を指すようになることを説明しにくいことを指摘する。最後に、本研究のモデルでは、ツがテンス的に過去を指すようになることを説明できることを示す。

鈴木(二〇〇九:一六八)は、テンス体系にツは含まれ、テンス的に「非遠過去」を表わすということができないのではないかと言及している¹²⁾。鈴木(二〇〇九:一六八)は、「会話文においてツ形、又形が発話時からどれくらい前のできごとを表わしているか」を調査し、その結果、「ツ形、又形の三分の二以上が発話時と同日のできごとを表わしている」ということを明らかにしている。また、ツ形、又形が発話時と同日であることを表わす「今、今日、今朝」などの表現と共起することが多い一方で、「昨日、ひとひ、昔」などの表現と共起した例が見当たらないことから、「ツ形、又形は発話時とおなじ日におこったできごとを表わすことができるのにたいして、キ形はそうではない」と述べている。そして、「発話時、またはそれとおなじ日におこったできごとというのは、当然発話時になんらかの効力や影響をおよぼしている」という前提に立ち、ツ形、又形は「現在とつながった過去、すなわちパーフェクト的過去」を表わすと主張している。ここから、「キ形が発話時からとおい過去のできごとを表わすのにたいして、ツ形、又形が発話時にちかい過去のできごとを表わす」と主張している。なお、この調査の範囲は、「源氏物語の角川文庫・巻五の藤裏葉まで」であるという。

鈴木(二〇〇九)の主張は、ツ、又が「基準時」より以前でその日中の事態を表わすということである。本研究では、ツがテンスレベルでどのように機能しているか、検討したい(又の詳細な検討については、今後の課題である)。

ツが過去を表現しているように見える例を見る前に、ツそのものがテンス形式だと言えらるわけではないということを次の用例で確認しておきたい。

(26) この座にて申すは、はばかりあることなれど、かつは、若くさぶらひしほど、いみじと身にしみて思うたまへし罪も、今に失せはべらじ。今日、この伽藍にて、懺悔つかうまつりてむとなり。(大鏡)

(26) は、これから懺悔話をすることを宣言するものであり、テンス的には未来である。ムのはたらきと関連をもちつつ未来テンスの意味になつていてと考えられるが、ここでツがテンスであると考えると、説明に困難をきたす。ツがテンスであるとすれば、ム、キ、ケリと共起した場合の競合について説明しなければならぬ。例えば、(6) について未来テンスになることに説明を与えなければならぬが、これは困難である。従つて、ツそのものがテンス形式だと言えぬわけではない。

次に、ツが使用者から見てその日より以前の事態を表わす際に用いられる例を見たい。

(27) さて、七八日ばかりありて、初瀬へ出で立つ。巳の時ばかり、家を出づ。人いと多く、きらぎらしうてもものすめり。未の時ばかりに、この按察使大納言の領じたまひし宇治の院にいたりたり。人はかくてののしれど、わが心ははつかにて、見めぐらせば、あはれに、心に入れてつくろひたまふと聞きしところぞかし、この月にこそは、御はてはしつらめ、ほどなく荒れにたるかなと思ふ。(蜻蛉日記)

(28) 御火取召して、いよいよたきしめさせたまつりたまふ。みづからは、萎えたる御衣どもに、うちとけたる御姿、いとど細うか弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこしものしけれど、いとあはれと見るときは、罪なう思して、いかで過ぐしつる年月ぞと、なごりなう移ろふ心のいと軽きぞやとは思ふ思ふ、なほ心げさうは進みて、そら嘆きをうちしつ、なほ装束したまひて、小さき火取とり寄せて、袖に引き入れてしめぬたまへり。(源氏物語・真木柱)

(29) 「おもとは、今宵は上にやさぶらひたまひつる。一昨日より腹を病みて、いとわりなければ下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、昨晚参上りしかど、なほえ堪ふまじくなむ」と憂ふ。(源氏物語・空蟬)

(30) 七月にもなりぬ。御はてとてののしりあふ。その日になりぬれば、去年の御法事おなじこと、百僧なり。有様、おなじことなればとどめつ。去年よりのち、女房六人をとどめ

つ。宮の御かたにあつかはせたまへるが、「今はまかでなんずるが、あはれにかなしきこと。

……(讃岐典侍日記)

(27)の用例は、「按察使大納言」の「宇治の院」に到着した一行が騒いでいる中、筆者である主人公は対照的に思いにふけりながら荒れてしまった周りを見やる場面であり、「按察使大納言」の一周忌は今月もう行なったのだろうかと考えている。時系列を考えれば、ツ使用者(≡主人公)から見て、その日よりも以前で、その月以内の事態を表現するのにツを使用していることになる。

(28)の用例は、玉鬘に心移りしてしまった髭黒が、泣いている北の方を見ながら、どのようにして長年結婚生活を続けてきたものか、と考える場面である。ツの射程は、長年を収めており、一日に収まるものではない。

(29)は、ある女房が、病により一昨日から休んでいたが、召集され、昨晚は参上したが、やはりがまんできそうにないと述べている場面である。「一昨日より下にはべりつる」↓「召ししかば、昨晚参上りしかど」という時系列であり、鈴木(二〇〇九)のキ、ツのテンス分掌の説明に反している。ツ単独で見ても、「一昨日より」とあることから、「その日中」という限定を超えている。

(30)も「去年よりのち」という表現が「とどめつ」に係っており、ツの射程が一日を超えることがあることがわかる。

以上から、ツがテンスとして機能しているように見える用例では、「近過去」のみならず「遠過去」までもを射程にしようということがわかる。

次に、井島(二〇一一)のモデルでは、ツがテンス的に過去を指すようになることを説明しにくいことを指摘する。「見」の用例でこれを確かめてみたい。

(31)うち臥したれど目もあはず、見つる夢のさだかにあはむことも難きをさへ思ふに、かの猫のありしさま、いと恋しく思ひ出でらる。(源氏物語・若菜下)

この用例の「見つる夢」というのは、先刻見た夢という意味で、テンス的に「過去」のものとして解釈が通る。

井島(二〇一一)のモデルから、ツがテンスレベルで機能する様を把握しようとした場合、「見る」という事態の終了点が基準時に位置付くということになるだろうが、これでは、「今、見終わった瞬間である」という意味合いが出てきてしまう。この用例に、そのような唐突感 は表わされていないだろう。あるいは、「見る」という事態の終了点は、発話時以前に位置 付けられるのだと言うのであれば、なぜ、そのポイントが、基準時でなく、そして、「基準 時以後」でもない「基準時以前」に位置付くことになるのか、説明が必要になってくるが、 これは困難であると思しい。すなわち、点的に捉えられ、時間的ギャップが備えられていな いモデルでは、ツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムまでは、見ることができ ないと考えられる。

最後に、本研究のモデルでは、ツがテンス的に過去を指すようになることを説明できるこ とを示す。

本研究のモデルでは、まず、「夢」を「まだ見ていない局面」、「見ている最中の局面」、「見 終わった後の局面」が事態そのものの内的時間展開構造として想定でき、「見ている最中の 局面」と「見終わった後の局面」の移行関係を指すマーカーとしてツが機能しているという 解釈をすることになる。

そして、(31)の「見」というのは、物語世界中の現実世界の事態であり、すなわち、物 語世界中のアクチュアルな時間軸上での話である。

「見ている最中の局面」と「見終わった後の局面」の移行関係をアクチュアルな時間軸上 に位置付けようとする場合は、「見終わった後の局面」を事実的なもの、既知のものとして 把握している必要がある。でなければ、「見ている最中の局面」から「見終わった後の局面」 に移行したということは仮想的なこととなり、非アクチュアルな時間軸に定位するしかな くなる。

すなわち、「見つ」という事態をアクチュアルな時間軸に定位するという態度で表示した 場合、必ず基準時には既に事態終了後局面に至っていないければならず、それは必ず、事態中 途局面が時間軸上の基準時より左(≡過去)に位置することを意味する。

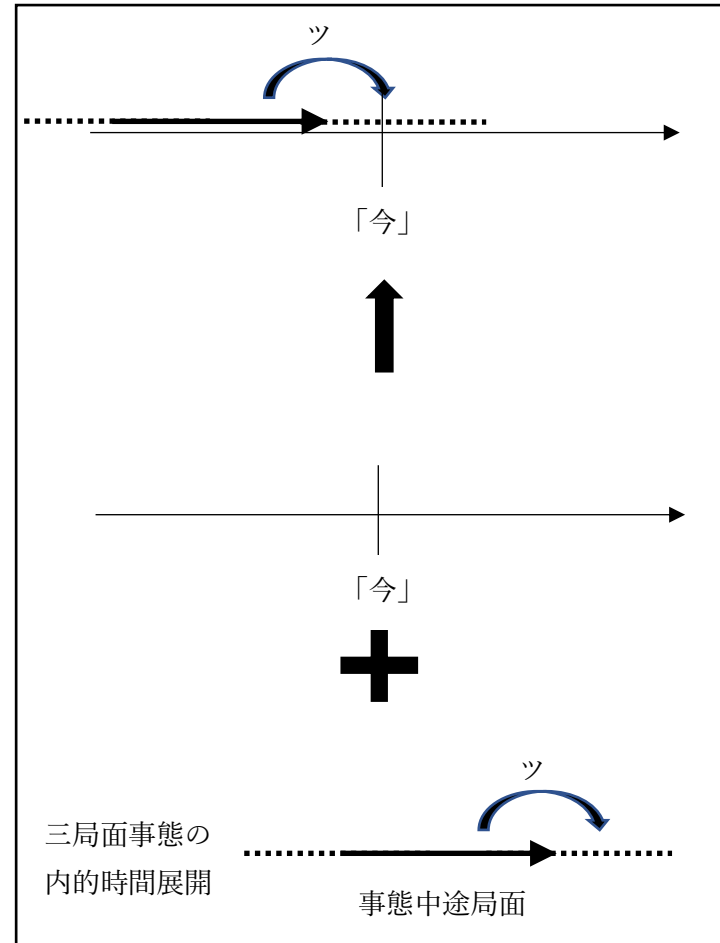


図12 アクチュアルな時間軸に定位する
「三局面事態+ツ」

この「見終わった後の局面」というのは、「夢の内容について記憶がある」局面である。「見終わった後の局面」というのは、実際は様々あるはずだが、言語主体者が「見つ」と知覚できているということは、必然的に、「見終わった後の局面」というのは、「見た内容について記憶がある局面」という性格を持つことになる。この「見た内容について記憶がある」という様相の把握を「イマ・ココ・ワタシ」において提示するという態度（ムード）で表示されれば、「見終わった後の局面」|| 「見た内容について記憶がある」局面が発話時現在のものとして位置付き、必然的にそれよりも以前にある「見ている」局面は、結果として、発話時から見た「過去」に位置付けられることになる。

時間軸の基準時より過去に事態中途局面が位置付き、事態終了後局面は、基準時に覆い被さる形で位置付く。「過去」に「見」ていて、「今」はもう「見」ていないという形であり、まさに「テンスの過去」らしい「テンスの過去」である。

次に、「降る」について見たい。

(32) 今年いたう荒るとなくて、斑雪ふたたびばかりぞ降りつる。助のついたちのものども、また白馬にもものすべきなど、ものしつるほどに、暮れはつる日にはなりにけり。(蜻蛉日記)

(33) 十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけむかし。日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠しして、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。(枕草子)

これら「降る」の場合、「降る前」の局面、「降っている最中」の局面、「降り終わった後」の局面が、その内的時間展開として想定できる。そして、これらの用例では、テンス的に「過去」の意味として解釈できる。「イマ・ココ・ワタシ」において、「もう降っていない」今日という局面を通して、「降っている最中」の局面が「過去」に位置付いている。

ツは、事態の内的時間展開を指すのみではなく、さもアクチュアルな時間軸上の過去に事態を定位させるための形式のようにはたらいっている。事態そのものの内的時間展開の一部である事態中途局面と、テンス範疇の時間軸上の「今」における話し手・書き手の記憶とがかさなることで、このような形が生まれている。

「逃がしつ」の用例でも確認したい。

(34) 「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるとところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。(源氏物語・若紫)

この用例の「逃がしつる」は、文章解釈上、紫の上の発話時基準から見た「過去」の意味であるという風に見える。ここ「逃がしつる」は、紫の上が、「犬君」が「鳥」を「逃がす」という行為中の局面」と、「逃がす」という行為後の局面」＝「逃げる」という過程が十分に進んだといえる局面」を実際に見たと思しい。これは、紫の上にとって、アクチュアルな世界での出来事である。そして、「逃がす」ということを、「イマ・ココ・ワタシ」の立場から断定判断的な述べ方で表示している。このような述べ方をする際は、言明された事態はテン

スレベルに位置付けられる。この場合の位置付き方は、「逃がすという行為後の局面」＝「逃げるという過程が十分に進んだといえる局面」が、発話時現在に重なりと考えるのが自然である。それは、「逃がす」という事態の終了を「逃がすという行為後」の局面＝「逃げるという過程が十分に進んだといえる」局面を見ることで把握しているからであり、断定的判断とは、この把握を「イマ・ココ・ワタシ」において言語化することであると考えられるからである。

このような形で「把握」が断定的に述べられた場合、先のモデルから、「逃がす」という事態は、必然的に「発話時から見て過去」に位置付けられることになる。それは、「逃がす」という事態の終了は、必ず、「逃がすという行為後」の局面＝「逃げるという過程が十分に進んだといえる」局面に先行するものだからである。

本研究の立場から言えば、テンスレベルで何かを表現する際は、必ず話し手・書き手の主体的立場から行われる。そして、ある事態をアクチュアルな時間軸に定位させる時というのは、主体的な立場から、事態を時間軸に定位させているということになる。事態をアクチュアルな時間軸に定位させるといえることは、その事態が確実なものであるという判断を行わない限り、できない。不確実なものを時間軸に位置付けようとする場合は、それ即ち、非アクチュアルな時間軸に位置付けようとすることにすり替わってしまう。ツの接続した事態が話し手・書き手から「確実である」と判断されうるのは、事態終了後局面にあたる部分までが話し手・書き手に把握されたときである。

従って、ツの接続した事態をアクチュアルな時間軸に定位させる時は、基準時において、既に事態終了後局面に至っていないなければならない。そして、これは必然的に、事態中途局面は基準時から見て過去に定位することになる。

本研究のモデルは、井島(二〇一一)で示されたモデルと、「事態の内的時間展開の中で、ツによって表現されることに、時間的ギャップが含まれているか含まれていないか」という点で異なる。そして、この「時間的ギャップ」をモデル化しておくことで、ツが「過去」のテンスとして機能するメカニズムを説明できるようになっている。

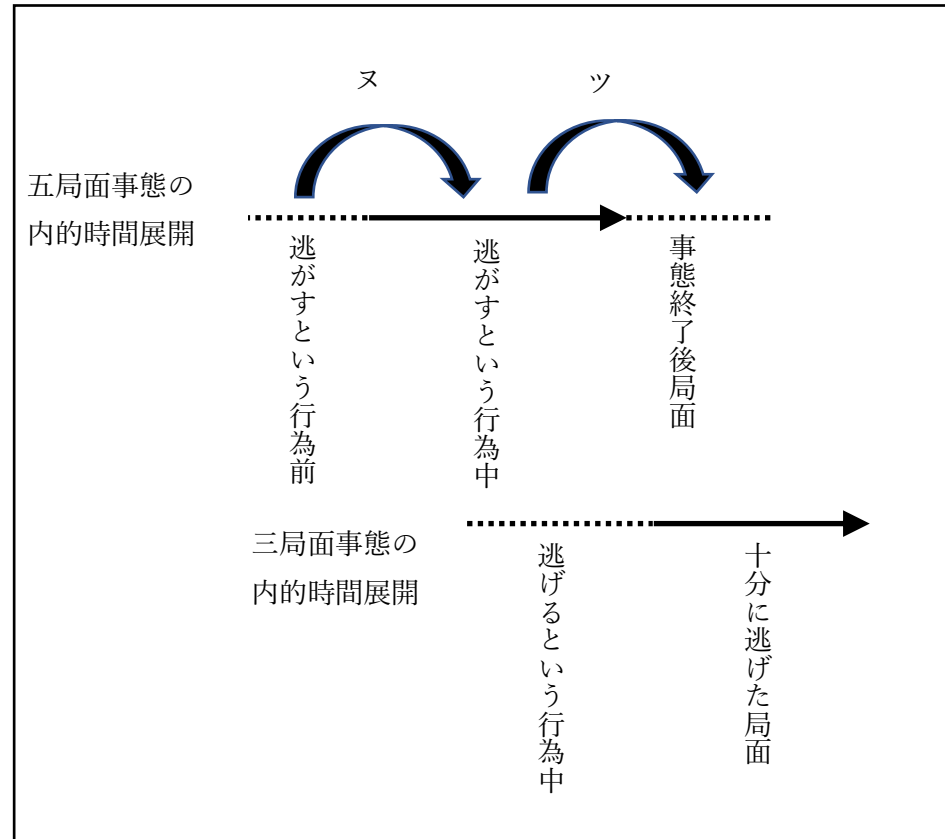


図13 「逃がす」事態のモデル

三. 六 形容詞に対する本研究のモデル

形容詞については、特殊な事情があるので、個別にメカニズムを考える必要がある。形容詞は、動詞で示される事態と同じような「内的時間展開」の構造は持たないと考えられる。本研究のモデルに合わせて考えれば、素性としては、「一局面」しか持たないと考えられる。

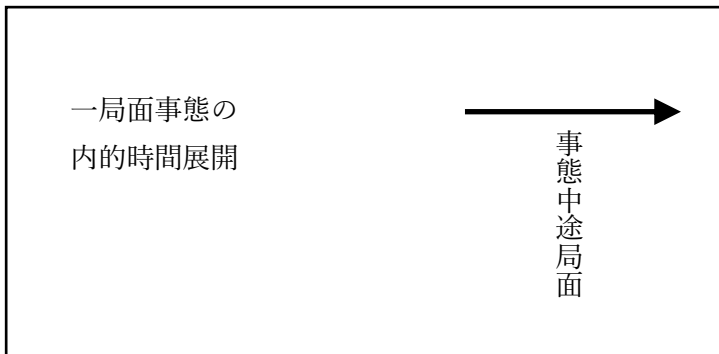


図14 一局面事態

動詞は、客体的な「概念・素材」として、「内的時間展開」を持っており、それらの各局面をアスペクト形式で指すことが可能であるが、形容詞の場合、ただではそれができない。事態局面間の移行を捉えようにも、形容詞そのものの中に必要な局面がそろっていない。

形容詞にヌが接続する場合には、吉田（一九九七）¹⁶が、接続面の特徴とその背景を説明している。吉田（一九九七）によれば、形容詞にヌが接続する場合は、更にム・マシ・ベシのいずれかが例外なく後続していると指摘している。

確認のために、オンラインコーパスアプリケーション「中納言」を用い、『日本語歴史コーパス』で検索したところ（短単位検索、キー…「品詞の大分類が形容詞」、後方共起1…「キ」から1語、語彙素…ぬ AND 品詞の大分類が助動詞」、「検索対象…時代名「1奈良」「2

平安「3鎌倉」「4室町」、一〇二件がヒットしたが、全て、ムやベシ、マシといった推量に関わる表現と共起している。以下にその用例を掲載する。

(35) 頭弁の、職にまゐりたまひて、物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。(枕草子)

(36) 「ここかしこの立て石どももみな転び失せたるを、情ありてしなさばをかしかりぬべき所かな。かかる所をわざと繕ふもあいなきわざなり。(源氏物語・松風)

(37) ひとり引き籠めはべらむも人の御心違ひはべるべければ、御覽ぜさせてこそは」と聞こゆれば、「引き籠められなむはからかりなまし。袖まきほさむ人もなき身に、いとうれしき心ざしにこそは」とのたまひて、ことにもの言はれたまはず。(源氏物語・末摘花)

推量助動詞と共起する場合のみヌが接続しうるとすれば、非アクチュアルな時間軸に定位する場合にだけ形容詞にヌが接続しうると考えることになる。

形容詞にヌが接続する場合は、その下に更に推量助動詞も接続するという現象に対して吉田(一九九七)は、以下のように考察する。

すなわち、本来は始めもなく終わりもないものであるところの、形容詞の表現内容たる \wedge (現実的ないし心的)状態 \vee が、ム・マシ・ベシによって、未来を中心とする非現実的な時点へと位置づけられ、そのことによって、それまでは問題にもされなかった \wedge 状態の開始時点 \vee が重要な意味を持つようになる。時間の流れに対して非関与的に、常に現前する状態を描写していた形容詞が、後続のムやベシなどによって非現実的であることを強要され、それと同時に未実現のその状態がいつ実現するのかが一つの論点として俎上にあげられたわけである。(六三頁)

吉田(一九九七)の論は、形容詞の表現内容が、非アクチュアルなものとされることで、未実現の状態がいつ実現するかが問題となってくるが故に、ヌが表示されうるといいうものである。

吉田（一九九七）は、「いつ実現するのか」が問題となると強調しているが、「いつ」と言うとき、時間軸上の近くか遠くかということが問題となるということになってしまふ。これは不自然ではないか。また仮に「いつ実現するのか」が本当に問題になるとして、それが又接続を許すようになるというところまでは、論理的な飛躍がある。「いつ実現するか」という問題意識と、ヌが用いられるかどうかということの間に、関係性を見出すことは難しいのではないか。

形容詞が推量助動詞と共起した場合にヌが接続できるようになるという現象に対しては、本研究のモデルからメカニズムを説明することができる。

まず、形容詞にヌが接続したモデルを想定する。

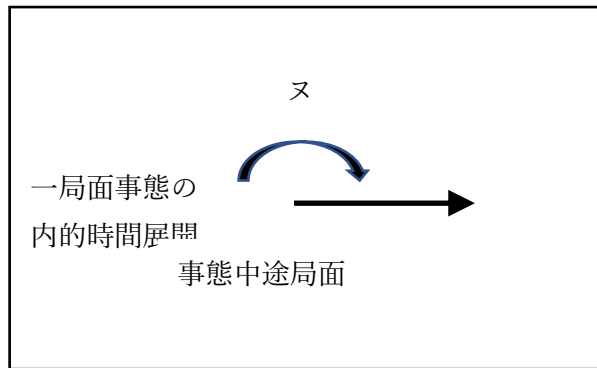


図15 形容詞+ヌのモデル

このままでは、ヌが指す移行関係の起点となる事態開始前局面がなく、成立しない。しかし、推量表現が用いられるようになると、非アクチュアルな時間軸が設定され、すなわち、テンスが設定され、「形容詞+ヌ」がそこに定位する。非アクチュアルな時間軸に定位した形容詞事態というのは、次のようなモデルとなる。

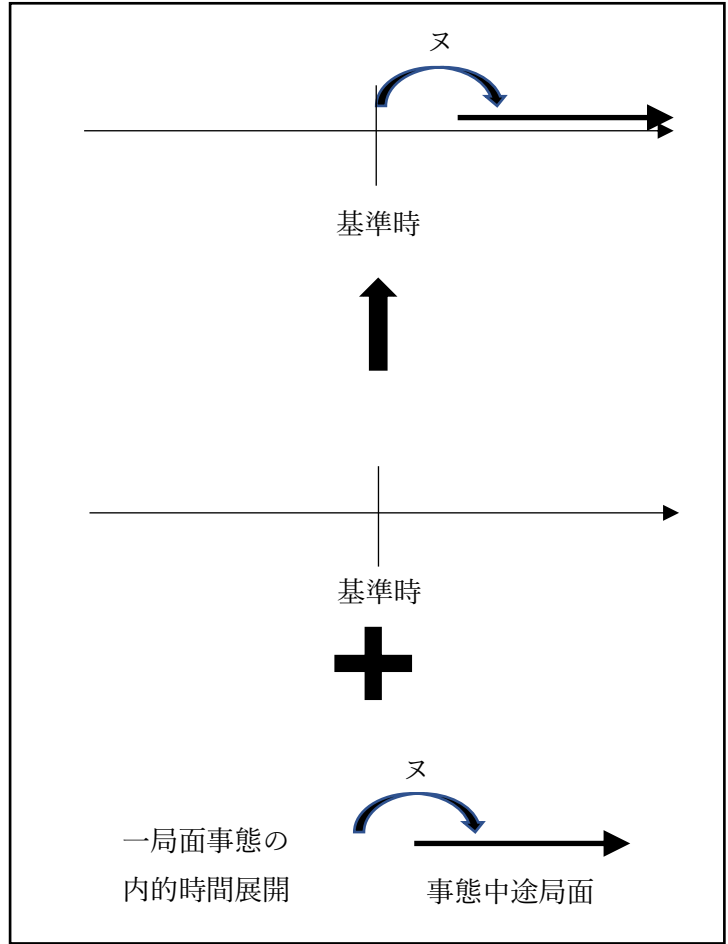


図16 テンスに定位する「形容詞+又」

時間軸上の基準時が擬制的に「事態開始前局面」としてはたらし、結果、又が安定するようになる。

形容詞に又を接続することは、基本的にはできないが、例外として、非アクチュアルな時間軸上であれば、時間展開における事態開始前局面を擬制的に持つようになり、これに対して又を用いることができるようになっていいると考えられる²³⁰。

確認のために、実際の用例で考えてみたい。

(35) については、「もし丑の刻になってしまったら具合が悪いだらう」という意味だが、頭弁が「もし丑の刻になってしまったら」と非アクチュアルな未来を想像し、その想像上の未来においては、「具合が悪い」だろうと判断しており、「まだ具合が悪くない」基準時と「既に具合が悪い」局面の移行関係表示として、又が使用されていると見ることができ。

(36) については、「風情のあるように仕上げれば、面白そうな所だ」という意味であるが、「もし風情のあるように仕上げれば」と非アクチュアルな未来を想像し、その想像上の未来においては、「面白い」だろうと判断しており、「まだ面白くない」基準時と「既に面白い」局面の移行関係表示として、又が使用されていると見ることができ。(37) については、「しまいこんでしまわれたら、つらいだらう」と言う意味だが、「もししまいこんでしまわれたら」と非アクチュアルな未来を想像し、その想像上の未来においては、「つらい」だ

ろうと判断しており、「まだつらくない」基準時と「既につらい」局面の移行関係表示として、ヌが使用されていると見ることができている。続いて、ツについて考える。

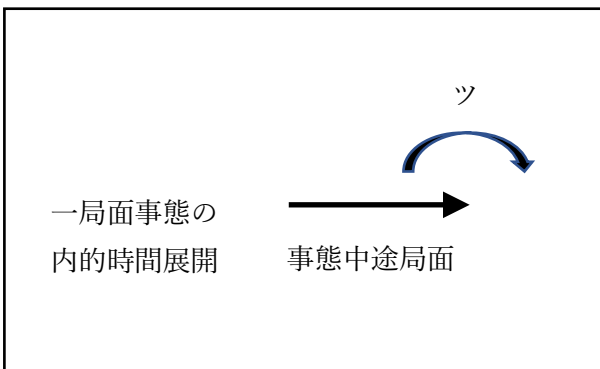


図17 形容詞+ツのモデル

これでは、やはりヌの場合と同じように、ツが安定しない。事態終了後局面がなく、ツの移行関係の意味が発揮できない。

ツが形容詞に接続する場合には、まずそもそも「事態終了後局面」を持たない形容詞に、ツが接続できるようになるのはどんな場合なのか、考えておく必要がある。ヌの場合は、推量助動詞が必ず共起するという条件があり、ヌが使用できるようになるための特定の構文的環境があったが、ツの場合は、何か特別な構文的環境の下で現れているようには見えない。

この問題については、吉田（一九九七）の指摘が参考になる。吉田（一九九七）は、ツを△過程の終結Vを示すのが本来であるとしたうえで、

そのツが形容詞に下接した場合には、本来は変化というものを予想しない形容詞の表現内容たる状態に、最後の瞬間（終結時点）を設定することになる。その時点まではその状態が続いていたのだが、その時点を境としてそれから後はその状態が認められないという意味合いを、「形容詞+ツ」型の述語は表現するわけである。（六五頁）

と述べ、更に、「状態そのものが終結という変化を迎えるこのような用例に対して、状態そのものの成り行きは不問のまま、それへの認識のほうが終結する」と述べる。そして、次の用例を挙げ、

○かかることとそはありけれ、とをかしくて、何人ならむ、げにいとをかしかりつと、ほのかなりつるを、なかなか思ひ出づ。(源氏物語・手習)

○道すがら、心苦しかりつる御気色を思し出でつ、たちも返りなまほしく、さまあしきま
で思せど…(源氏物語・総角)

認識対象にまつわる「心苦し」という状態そのものの存否はわからないけれども（おそらくは存続しているものと思われる）、それを認識する主体である話手が現場を離脱したことによって、認識という行為が中断され終結する。その認識行為の終結を、（認識の対象たる）状態の終結を語る形式を借りて表わしたのが、これらの「形容詞＋ツ」型述語であろうと考えられる。（六五頁）

と述べる。

吉田（一九九七）の指摘は、ツが形容詞に接続する場合は、テンスレベルで機能している時であるということ想起させる。「認識する主体である話者」が「現場を離脱したことによって、認識という行為が中断され」終結するというのは、素材的・概念的レベルでなく、主体的なテンスレベルの営みであるように考えられる。

そして、一見、又のような特別な構文的環境がないように見える「形容詞＋ツ」だが、実際に用例にあたってみると、現実世界の過去の様子を指している例ばかりのようで、アクチュアルな時間軸の過去の様子ばかりのようである。又の方では推量形式と共起していたが、ツの方では推量形式と直接接続した例も見つからない。

別の言い方をすれば、形容詞事態をアクチュアルな過去のものとして言おうとする場合は、ツが生起しようということではないだろうか。アクチュアルな時間軸では、話し手・書き手の「今」が基準時となるが、その基準時から見て過去に、形容詞で表現されるところの様子が存在したという形で、ツが使用されるのではないだろうか。この場合、話し手・書き

手の「今」が、形容詞事態の事態終了後局面にあたる部分として関係を結ぶことになる。形容詞事態がアチュアルな時間軸に定位したとすれば、時間軸上の形容詞事態より右側に「今」があり、そこを事態終了後局面と擬制できるようになる。

これを又の時と同じ順番で説明するならば、まず、形容詞にツが接続したものは、そのままでは安定していない。しかし、形容詞にツが接続したもので表現しようとする事態が「アチュアルな時間軸における過去の事態である」という態度で示されようとする場合のみ、そう判断する話者・書き手の「今」が形容詞事態の事態終了後局面に擬制的にあたるようになり、使用が許される。

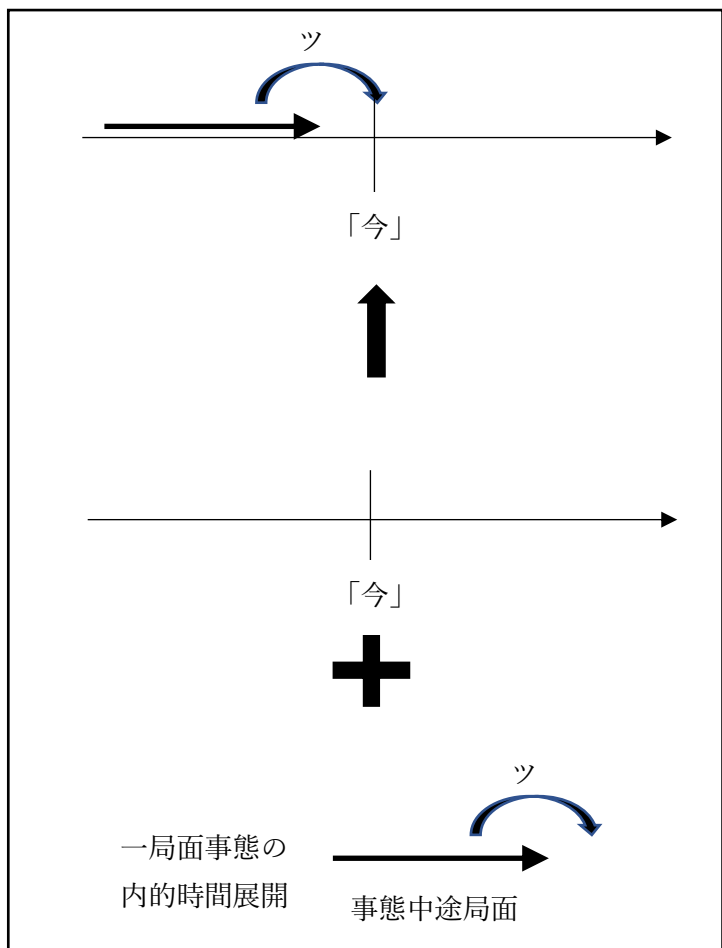


図18 テンスに定位する「形容詞+ツ」

確認のために、実際の用例を取り上げてみたい。

- (38) いつしかといふせかりつる難波瀉葦漕ぎ退けて御船来にけり (土佐日記)
- (39) また、この袈裟のこのかみも法師にてあれば、祈りなどもつけて頼もしかりつるを、にはかに亡くなりぬと聞くにも、このはらからのここちいかならむ、われもいと口惜し、頼みつる人のかうのみ、など思ひ乱るれば、しばしばとぶらふ。(蜻蛉日記)

(40) 中納言、酔ひて出でたまふとて、「世に今まで侍りつるが、心憂かりつるに、うれしき契りに」などのたまふ。(落窪物語)

(41) さても、いとあやしかりつるほどに、ことなしびたる、しばしは、忍びたるさまに、内裏など言ひつつぞあるべきを、いとどしう心づきなく思ふことぞ、かぎりなきや。(蜻蛉日記)

(42) 使はるる人も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。(竹取物語)

形容詞事態は、基準時も継続しているものがあるのではないか、という疑問が出てくるだろう。モデル図では、まるで基準時にはその形容詞事態は消失しているように見え、また、本研究のモデルでは、この基準時に擬制されていたところのものは、「事態終了後局面」と呼んでいるので、そのように疑問が生じるはずである。例えば、(42)の「うつくしかりつる」というのは、「今」の評価でもあるのではないか、という批判である。

これについては、吉田(一九九七)の言及がある。吉田(一九九七)は、次の

○よそに思ひつるよりもこよなう心とどまりて、とみにも立ち出でられぬ程に、……(中略)……大人しかりつる人、「〜」と言ひておるは、乳母なるべし。(狭衣日記)

○雨のわりなくはべりつれば、やむまではかくてなむ。(和泉式部日記)

という用例について、以下のように述べる。

(認識の対象たる)状態はおろか、認識行為すら終結していない。が、これらの用例については、その状態に対する確認が言語化に先行したことを表現したもの、と理解しておきたい。つまり、雨の激しい状態に対する認識がいったん完成(終結ではない)しており、そのようにしてすでに得られている情報を基に、雨が激しいからやむまでは……という発言が企図される、そうである以上、その発言に対してその認識は時間的に先行し

ていなければならぬ。そうした時間的先後を明確にするために、△先行認識の完成▽を助動詞ツによって表現したものとされる。

この説明は、従えるものである。形容詞にツが付けば、「事態中途局面」にあたる判断過程の部分がアクチュアルな時間軸に定位するが、その時間軸の基準時たる「今」には、話し手・書き手が当該判断を下したことを客観視する形で認識をはたらかせている。(42)で言えば、「かわいらしい」と思考したことが過去にあり、その過去の思考経験を客観視する形で「今」表現しているのである。

そして、形容詞の場合のテンスのあり方を考えた場合、場合によって、「テンス」の「過去」だと見えやすいものから、見えにくいものまで、グラデーションがあると考えられる。

「過去」だと見えやすいものは、判断過程の部分と発話時との時間的ギャップがある程度あるという特徴、発話時においてその判断はもうできない、あるいは、正反対の判断をすることになるという特徴がある場合で、そのような特徴が薄れていくほど、「テンスの過去」のイメージから遠ざかっていく³⁴⁾。「今」「いぶせし」と思うことはないだろう(38)や、話題の人が「今」亡くなっていて「頼もし」とは思えない(39)、「今」正反対の心持でいる(40)は、「テンスの過去」らしさが強いだろう。(41)は、「かたり」中の過去であろうが、物語をしているという態度から発せられる表現は、「テンスの過去」らしさが出ている。(42)や、先の吉田(一九九七)の挙げた例は、「今」もそう評価できそうなのであったり、判断したのが「今」に非常に近い位置だったりするので、「テンスの過去」らしさが薄い。

以上、ヌでもツでも、形容詞に接続する場合は、テンスレベルに生起すること、ヌの場合は、非アクチュアルな時間軸に定位し、基準時よりも未来になること、ツの場合は、アクチュアルな時間軸に定位し、基準時よりも過去になることをモデル化した。また、ツの場合で、「テンスの過去」に見えやすい例から見えにくい例まであることを見た。

三・七 ツ、又の接続語彙の偏りについて

三・七・一 ツ、又の接続する語彙の偏りについての先行研究

ツ、又の接続語彙の偏りについては、木下（一九六四）が⁸⁶、「記紀万葉祝詞宣命風土記をはじめ、歌経標式琴歌譜や仏足石歌正倉院文書に至るまでの、目に触れた限りのツ・又全用例を集め」、ツ、又が接続する動詞を分類したところ⁸⁷。ツはおよそ他動詞に接続しており、又はおよそ自動詞に接続していると判断できたところから、ツは他動詞に接続するのが基本であり、又は自動詞に接続するのが基本であるという立場に立ってみて、その例外について、例外たる所以を説明しようと試みている。

例外たる所以については、掛詞による要請が働いたというものや、誤用として処理するもの、意志性の有無が関わっているとするもの、中西宇一の「ツは動作の完了、又は状態の発生を表わす」という説で解消するしかないというのが提示されている。

接続語彙自体にそもそも違いがあったのではないかという発想と共鳴するものとしては、伊藤（一九六二・一九六三・一九六五）の調査⁸⁸が挙げられるなど、その他多くの研究で調査・言及されていることであり、意味・機能を考える上で、無視できないものとなっている。

このことを踏まえ、後の節で、ツ、又の意味・機能と接続語彙の偏りの関係性を示すこととする⁸⁹。なお、形容詞については、又がムやベシ、マシと共起する形の用例しか見当たらないということがあるが、このこと背景については、先に述べた。

三・七・二 又の承接が起こりにくいこと背景

三・七・二・一 「ず」によって事態開始前局面の認識が難しくなる現象

助動詞「ず」は、ツが直接承接した用例が平安期で九七例確認されるが、又が直接承接した用例が奈良・平安期で確認されない。「ず」に上接する語が、たまたまツを下接するものばかりであるならば、着目する必要もないだろうが、そうではないので着目したい。例えば、「知る」は、又が直接承接した用例が平安期だけで五二例確認されるのに対して、ツが直接承接した用例は、奈良・平安期を通して確認されないのであるが、「知らず」にツが直接承接した用例は、平安期に四例確認できるのである。

まず、「知る」に又が承接した用例を簡単に確認しておきたい。

(43) (ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを(源氏物語・明石)

(43) では、「まだ知らない状態」たる事態開始前局面と、「すでに知っている状態」たる事態中途局面が認識されていると考えられる。

次に、「知らず」にツが承接した用例について考察していく。

(44) 今朝は霜おきけむ方も知らざりつ思ひいづるぞ消えて悲しき(古今和歌集・巻第一三・恋歌三・六四三)

(45) 「年ごろは世にやあらむとも知らざりつる人の、この夏ごろ、遠き所よりものして尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、また、うちつけに、さしも何かは睦び思はんと思ひはべりしを、先つころ来たりしこそ、あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか。(源氏物語・宿木)

(44) は、「今朝」、霜が降りていた様子も、自身がどのように起きたかも知らないでいたことをうたっている。「知らない状態」たる事態中途局面と、「知らない状態」への認識を欠いていた事態終了後局面が認識された結果、ツが現れていると考えることができる。「知らない」という事態の表現にヌが承接しうるかどうか、試みに「知らない状態」の前に存在する事態開始前局面を想定しようとしても、捉えどころがなく難しい。

(45) は、「長年、世の中にいるだろうとも知らなかった人」が訪ねに来たことを述べているのであって、「知らない状態」たる事態中途局面と、「すでに知っている状態」たる事態終了後局面が認識されたものと解釈できる。やはり、「知らない状態」の前の段階を想定しようにも想定しようがない。事態開始前局面の想定が難しいが、「知る」に「ず」が加わった場合におけるヌ、ツの逆転現象の背景にあるものとして理解できる。

以上のことから考えれば、「ず」が承接した表現は、内的時間展開の素性として、事態開始前局面を想定し、認識することが難しいものであるという可能性が考えられる。

他にも、「ず」にツが承接した用例を見てみたい。

(46) 『かかるとの、制したまへば、雲居にてだにもえ』などいひ聞かせよとてなむ、迎へる』といひければ、「今まで、などかおのれにはのたまはざりつる。人の気色とらぬ先に、

月見むとて、母の方に来て、わが琴弾かむ。それにまぎれて、簾のもとに呼び寄せて、ものはいへ」（平中物語）

（47）それより立ちて、行きもて行けば、なでふことなき道も山深きこちすれば、いとあはれに水の声す。例の杉も空さして立ちわたり、木の葉はいろいろに見えたり。水は石がちなる中よりわきかへりゆく。夕日のさしたるさまなどを見るに、涙もとどまらず。道はことにかしくもあらざりつ。紅葉もまだし、花もみな失せにたり、枯れたる薄ばかりぞ見えつる。（蜻蛉日記）

（46）は、「今までなぜ私におっしゃってくれなかったのですか」と述べる部分である。「おっしゃらない状態」たる事態中途局面と、話を聞いた後、すなわち「おっしゃった後の状態」たる事態終了後局面が認識されるとみることができ。これも「おっしゃらない状態」の前段階である事態開始前局面は、捉えどころがなく想定しにくい。（47）は、「こままでの道中は特別面白いこともなかった」ということと「ここは風情がある」ということが書かれている。「面白くない状態」たる事態中途局面と「もうすでに別の感想を持っている状態」たる事態終了後局面が認識されているものと解釈できる。この例においても、「面白くない状態」の前段階である事態開始前局面を想定しようにも、想定しにくい。以上、見たように、「ず」が承接した表現は、事態開始前局面が想定しにくく、これが又の承接した用例が見当たらないことの背景事情としてあると考えられそうである。

三・七・二・二 特殊なニュアンスを表現しようとした際に生じる例外

「見る」は、ツが直接承接した用例が多く、平安期のみで一〇九例確認されたのに対し、又の直接承接は、奈良期、平安期を通して、一例しか確認されなかった。次の（33）のように、「くしてみる」にあたる表現も含まれている。

（48）それに、「はや、たばかれ」などぞ責めける。「今宵、もし、月おもしろくは、来かし。たばかり見つべくは」といひたれば、「なにのよきこと」と、来にけり。（平中物語）

「見る」という事態の内的時間展開の素性を考えると、「見る前の状態」たる事態開始前局面、「見ている状態」たる事態中途局面、「見終わった後の状態」ないし「見ていることからすでに認識が離れている状態」たる事態終了後局面が考えられる。

ゆえに、「見る」にはツはもちろん、又にも十分承接しそうであるが、なぜこんなにも偏りがあるのだろうか。

まず、ツの直接承接したものを見て、ツの意味規定によって解釈できることを確認しておく。

(49)「この、奉る文を見たまふものならば、たまはずとも、ただ『見つ』とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」とぞいひやりける。(平中物語)

(50)うち臥したれど目もあはず、見つる夢のさだかにあはむことも難きをさへ思ふに、かの猫のありさま、いと恋しく思ひ出でらる。(源氏物語・若菜下)

(51)年ごろかかることをつゆなかりつるを、風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ、さばかりの御心どもを騒がして、めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。(源氏物語・野分)

(49)は、男が手紙を送り、ただ「見た」とだけ知らせてくれればよいと伝え、それを受けた女が本当にただ「見た」とだけ伝えたという内容である。(50)は、先ほど見た夢について考えているところである。(51)は、珍しくも風が渡殿の格子を吹き上げ、女側の様子を見ることができたことをもって、「うれしき目」を見たと表現している。

続いて、又が直接承接したものを見て、用例が一例しかないことと背景事情を探る。

(52)二十三日、はかなく雲煙になす夜、去年の秋、いみじくしたてかしのづかれて、うち添ひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上に、ゆゆしげなる物を着て、車の供に、泣く泣く歩み出でてゆくを、見出だして思ひいづる心地、すべてたとへむかたなきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見^にけむかし。(更級日記)

(52) の「見る」ことの動作主たる「その人」とは、作者の亡くなった夫のことであると考えられる。悲嘆にくれる作者ないしその子供の様子や心持を「その人」が見てくれていたであろうことを記述している。

(52) において、又が現れていることは破格ではないと考えようとした場合、次のような解釈をすることになる。すなわち、『その人』がまだ見ていない状態」たる事態開始前局面と『その人』が見ている状態」たる事態中途局面が認識されており、なおかつ、『その人』がもう見ていない状態」や『その人』が見ていることをすでに認識していない状態」たる事態終了後局面は認識されていないことから、ツではなく、又が現れているのであると解釈することになるのである。これは、ただの事実描写でなくて、その場において効力をもつものであるというニュアンスを殊更に帯びる。このように解釈すれば、(10)からは、悲嘆にくれていた時、「その人」の見守っていた中に作者たちはあったであろうというニュアンスが読み取れる。すなわち、特別なニュアンスが生じるという事情が背景にあるものと考えられる。

「見る」と事情が似ていると考えられるものに「宣ふ」がある。「宣ふ」は、平安期でツが直接承接したものが二六例、又が直接承接したものが一例確認された。

(53) 「他子ども、〈これうらやまし〉とだに思ふべからず。同じやうに力入り、親に孝したるなし。少し人々しきになむよろしき物取らす。いはむや、こちらの年ごろかへりみるを、〈恩にや〉と思へ」と、いとさかしうのたまふを、君達は〈ことわり〉と思したり。「この家も古りてこそあめれど、広うよろしき殿なり」とて、大将殿の北の方に奉りたまへば、北の方聞きて泣きぬ。「のたまふことどもは、さものたまひぬべけれど、またいか恨み聞こえざらむ。(落窪物語)

(53) は、遺産相続の話をしている場面である。「大将殿」の発言を指して、「のたまふことども」と表現している。ここで又が用いられる余地があったのは、「大将殿」の発言そのものというよりは、発言の趣旨を指して、「のたまひぬべけれど」と表現しており、ただ「宣った」と事実を描写するだけにとどまらず、「宣った内容」が「北の方」の発話時現在

において効力をもつものとして、「北の方」から殊更に捉えられている場面であるからではなからうか。

対して次の(54)は、発言をそのまま取り次ぐ場面で、発言者はただ事実を描写する形で「のたまひつる」と発言している。

(54) さていふやう、「御前に御遊びなどしたまへるを、からうじてなむ聞えつれば、『たがものしたまふならむ。いとあやしきこと。たしかに問ひたてまつりて来』となむのたまひつる」といへば、(大和物語)

もちろん、ツは当該事態が「今はもう効力がない」などと積極的に規定するものではないので、「見つ」においても「宣ひつ」においても、ある時点における「見ること」「宣うこと」の効力を否定するものではない。その意味で、わざわざヌを用いるのはその場における「見ること」「宣うこと」の効力を殊更に表現したいという動機によるといえるのではないだろうか。このような事情が、「見る」「宣ふ」にツが直接承接した用例がある程度存在するのに対し、ヌが直接承接した用例が一例ずつしか確認されないことと背景となつていふと考えられる。

106

三. 七. 三 ツの承接が起こりにくいことと背景

三. 七. 三. 一 事態終了後局面の認識の難しさ

「色付く」「咲く」「枯る」「散る」「別る」「絶ゆ」「暮る」「更く」は、ヌが直接承接した用例を複数確認できるが、ツが直接承接した用例を確認できないものである。これらの語が表わす事態は、内的時間展開の素性の面から、事態終了後局面を想定することが難しいものであると考えられる。事態終了後局面を想定できなければ、当然の結果として、ツが承接することはありえないということになる。

まず、「色付く」の用例を見てみたい。

(55) をりならで色づきにける紅葉葉は時にあひてぞ色まさりける (蜻蛉日記)

(56) 日のいとうららかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなき中にも、梅は気色ばみほほ笑みわたれる、とりわきて見ゆ。階隠のものと紅梅、いとく咲く花にて、色づきにけり。(源氏物語・未摘花)

「色付く」は、葉や花が色付くことを表わす表現として使用されている。色付きが確認される前の状態(事態開始局面)と色付きが確認された後の状態(事態中途局面)を認識することは可能であり、従って、又が承接しうる。しかし、色付きが確認された状態のその後の状態(事態終了後局面)なるものは想定しがたい。事態終了後局面ではない事態終了後局面の認識の余地はあったかもしれないが、(55) (56)のように、色付いたことへの感動を述べる用例ばかりが得られる。

次に「咲く」「枯る」「(花や葉が)散る」の用例を見てみたい。

(57) わが屋戸の池の藤波咲きにけり山郭公いつか来鳴かむ(古今和歌集・一三五)

(58) いつしか、梅咲かなむ。来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて花を折りてやる。(更級日記)

(59) かげ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮かな(源氏物語・賢木)

(60) 時しあればかはらぬ色にほひけり片枝枯れにし宿の桜も(源氏物語・柏木)

(61) 散りぬとも香をだにのこせ梅の花恋しきときの思ひいでにせむ(古今和歌集・巻第一・春歌上・四八)

(62) その日になりて、「今日は物忌」と聞こえてとどまりたれば、「あな口惜し。これ過ぐしてはかならず」とあるに、その夜の時雨、つねよりも木々の木の葉残りありげもなく聞こゆるに、目をさまして、「風の前なる」などひとりごちて、「みな散りぬらむかし。昨日見で」と口惜しう思ひ明かして、つとめて、宮より、「神無月世にふりにたる時雨とや今日のながめはわかずふるらむさては口惜しくこそ」とのたまはせたり。(和泉式部日記)

「色付く」でみられた事情は、「咲く」「枯る」「(花や葉が)散る」においても同様であると考えられる。すなわち、「(花が)咲くこと」「(植物が)枯れること」「(花や葉)散ること」は、事態が生じる前の様子と、事態が生じている最中の様子を想定することはでき、認識す

することはできるが、「その後の状態」は捉えどころがなく、従って認識しにくい。言い換えれば、「色付いた後の状態」とは、「色付いていない状態」と捉えることは難しく、むしろ「色付いている状態」であると捉えられるのが普通であり、「咲いた後の状態」とは、「咲いていない状態」と捉えることは難しく、むしろ、「咲いている状態」であると捉えられるのが普通であり、その他も然りである。結果として、ツの承接した用例が確認されないのだと考えられる。

次に、「別る」を見る。

(63) みやこ出でて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬるかな(土佐日記)

(64) 別れにし今日は来れども見し人にゆきあふほどをいつとたのまん(源氏物語・賢木)

(63)(64)は、「(人と)別れている状態」と「(人と)別れていない状態」が認識されているものと考えられる。もし「(人と)別れている状態」の「その後の状態」を考えようとしても、「もっと別れている状態」などのように、事態中途局面が無限に拡散していくだけで、捉えどころがなくなってしまう²⁰⁾。事態終了後局面ではない事態終了後局面の認識の余地はあったかもしれないが、用例は見当たらず、この点についてはやはり何とも言えない。次に、「絶ゆ」を見たい。

(65) 逢ふことのもはら絶えぬる時にこそ人の恋しきことも知りけれ(古今和歌集・巻第一五・恋歌五・八一二)

(66) 六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、ひとりごとに、わが宿のなげきの下葉色ふかくうつろひにけりながめふるまになどいふほどに、七月になりぬ。絶えぬと見ましかば、かりに来るにはまさりなましなど、思ひつづくるをりに、ものしたる日あり(蜻蛉日記)

(67) 水無瀬河ありてゆく水なくはこそつひにわが身を絶えぬと思はめ(古今和歌集・巻第一五・恋歌五・七九三)

(68) せかなくに絶えと絶えにし山水のたれしのべとか声を聞かせむ(大和物語)

(69) 河原の左大臣の身まかりてののち、かの家にまかりてありけるに、塩竈といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる

君まさで煙絶えにし塩竈のうらさびしくも見えわたるかな(古今・巻第一六・哀傷歌・八五二)

(70) 「さらばもろともにこそ」とて、中將の帯をひき解きて脱がせたまへば、脱がじとすまふを、とかくひこしろふほどに、綻びはほろほろと絶えぬ。(源氏物語・紅葉賀)

「絶ゆ」は、「(機会や習慣、自然現象、命、結び目が) 絶えること」のように、様々な使われ方がしているが、どれをとっても、やはり事態終了後局面を認識することは難しそうである。「絶えること」のうちに、「絶えた後の次なる段階」は想定しがたい。

最後に、「暮る」「更く」を見たい。

(71) 「さらに、夜さり、この寮にまうで来」とのたまうて、つかはしつ。日暮れぬれば、かの寮におはして見たまふに、まことに燕巢つくれり。(竹取物語)

(72) かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつ、ののしるうちに夜更けぬ。二十二日に、和泉の国までと平らかに願立つ。(土佐日記)

「(日が) 暮れること」「(夜が) 更けること」も以上の議論と同様である。

これらの動詞は、一般に「変化動詞」と呼ばれるものにあたり、また、内的時間展開が二段階であり、三段階であるとは考えにくい点で、「変化動詞」らしい「変化動詞」であるといえることができるだろう。

これらの動詞は、事態終了後局面が想定しにくいことが、ツの承接した用例が見当たらないこと背景としてあったものとみることが出来る。事態終了後局面でない事態終了後局面が認識され、ツが承接した例があったかどうかについては、何とも断ずることができない。

三・七・三・二 特殊な文脈に支えられて生じる例外

先の動詞群と事情が似ていつつも、ツの承接した用例が存在する動詞として、「明く」が挙げられる。これは、特殊な文脈によって、事態終了後局面が想定できるようになるため、ツが承接可能になると考えられる。

「明く」は又が直接承接した用例が多数確認される 用例であり、「明けた後の状態」が「明けていない状態」というわけではないという意味的な特徴を持つ点で、似ているのである。しかし、ツの直接承接した用例が平安期に一例確認される。この一例を破格であると済ましてしまう方が正しい可能性もあるが、本研究では、破格ではないと解釈することもできることを示しておきたい。

(73) 蝸の声におどろきて、山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ、あさましや、今日この御返り事をだに、といとほしうて、ただ知らず顔に硯おしすりて、いかになしてしにかとりなさむとながめおはする。……(中略)……胸つぶれて、一夜のことを、心ありて聞きたまうけると思すにいとほしう心苦し。昨夜だに、いかに思ひ明かしたまうけむ、今日も今まで文をだに、と言はむ方なくおぼゆ。いと苦しげに言ふかひなく書き紛らはしたまへるさまにて、おぼろげに思ひあまりてやは、かく書きたまうつらむ、つれなくて今宵の明けつらむ、と言ふべき方のなければ、女君ぞいとつらう心憂き。(源氏物語・夕霧)

(73) における「今宵」とは、文脈上、「昨夜」の意味であり、(73) の場面は蝸の鳴いている夕方である。「今宵」が明けた時に「明けた」と認識し、夕方まで時間が開いてから「明けたと認識したこと」を客観視し、ツを用いていると考えられる。「今宵」が明けて以降、長めの時間を経ているので、「明けた後の局面」を「今」に定位する存在として把握する余地が生まれ、ツが現れたものとして、解釈することができる。

このような文脈設定は珍しいと考えられる。「明く」に又が承接した用例をみると、単純に「明ける前の状態」と「開けた後の状態」が認識されているものとして解釈できる。

(74) 明けぬれば、急ぎ立ちてゆくに、贅野の池、泉川、はじめ見しにはたがはであるを見るも、あはれにのみおぼえたり。(蜻蛉日記)

特殊な文脈が、「明く」にツの承接した用例の背景となっていると考えられる。

また、これと事情がやや似た例として、「忘る」が挙げられる。又が直接承接した用例が平安期に五〇例確認され、ツの直接承接した用例が平安期に一例のみ確認される点で、先の動詞群と共通している。これについても、破格ではないという可能性を追う余地があり、その場合に、特殊な文脈が背景となっていると考えられる。

(75)「いとあやし。同じ古ごとといひながら、知らぬ人やはある。ただこことにおぼえながら言ひ出でられねば、いかにぞや」など言ふを聞きて、前にゐたるが、『下ゆく水』とこそ申せ」と言ひたる。などかく忘れつるならむ。これに教へらるるも、をかし。(枕草子)

(75)は、歌の上の句が思い出せそうで思い出せず、苦しんでいたところを、目の前にいた少女に教えてもらい、思い出せたという場面である。「などかく忘れつるならむ」と認識した場面では、すでに思い出しているのであり、従って、「忘れている状態」たる事態中途局面と「もう忘れていない状態」たる事態終了後局面が認識されており、それによって、ツが現れていると解釈できる。

「忘れた後の状態」たる「忘れていない状態」が想定できる点で、一見、意味的に先の動詞群とは違うわけであるが、なぜ一例しか確認できないのだろうか。蓋し、それは、「今すでに思い出せてはいるが、なぜ忘れていたのだろうか」というような「忘れつ」を用いて表現すべき内容そのものの希少さによるのではないだろうか。すなわち、「思い出した」上で、「思い出した」ことよりも「忘れていた」ことに焦点を当てるような文脈が珍しいのである。「忘れぬ」を用いた表現は多数あるが、以下に見るように、単に「忘れてしまった」ということを述べる文脈ばかりである。

(76) また、和琴なども、朽目、塩釜、二貫などぞ聞ゆる。水竜、小水竜、宇多の法師、釘打、葉二つ、何くれなど、おほく聞きしかど、忘れにけり。(枕草子)

(77) これが返しまづせむなど、硯取りに局にやれば、「ただこれしてとく言へ」とて、御硯蓋に紙などして給はせたる。「宰相の君、書きたまへ」と言ふを、「なほそこに」など言ふ

ほどに、かきくらし雨降りて、神いとおそろしう鳴りたれば、物もおぼえず、ただおそろしきに、御格子まありわたしまどひしほどに、この事も忘れぬ。(枕草子)

(76) は、様々な楽器の名前を聞いたが、もう忘れてしまったことを述べており、(77) は、返事をしようとしていたが、他のことに気を取られて、忘れてしまったことを述べている。

やはり、特殊な文脈が、「忘る」にツの承接した用例が存在することの背景となっていると考えられる。

第三章のまとめ

本章では、主にツとヌの意味・機能をアスペクトの観点からモデル化しようとする先行研究で議論されている内容を検討し、それをブラッシュアップすることで、ツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムを説明付けられるほどに精緻なモデルを提示し²⁶、そして、実際にツがテンスレベルにおいて機能するメカニズムを説明し、テンスレベルではたらくことを確認した。

井島(二〇一一)で示された三種類の事態の内的時間展開構造について、「変化事態」を「三局面事態」、「行為事態」を「五局面事態」と名称を改めた。ツ、ヌの指すものについては、点的解釈を改め、事態間の移行関係であると捉えなおした。これによって、井島(二〇一一)にはなかった時間的ギャップ構造をツ、ヌのモデルの中に生み出し、ツがテンスレベルで機能するようになるメカニズムを説明付けた。また、一局面しか内的時間展開を持たないと考えられる形容詞について、テンスの時間軸に定位する形でツ、ヌが必要とする局面が得られるようになることを説明した。特に、形容詞にツが接続する場合は、「過去」の意味合いが出つつも、用例によってその「過去」らしさの強弱があることを、本研究のモデルから説明した。

また、ヌの承接が起こりにくいパターンとして、「ず」「見る」「宣ふ」を取り上げた。「ず」は、事態開始前局面の認識の難しさが、ヌの承接が起こりにくいことの背景にあり、「見る」「宣ふ」は、ヌ、ツどちらの選択も許される状況にあって、ヌを選択した場合には、特殊なニュアンスが生じることが、ヌの承接が起こりにくいことの背景にあることを見た。また、

ツの承接が起こりにくいパターンとしては、「色付く」「咲く」「枯る」「散る」「別る」「絶ゆ」「暮る」「更く」「明く」「忘る」を取り上げた。これらの動詞は、事態終了後局面の認識の難しさが、ツの承接が起こりにくいことの影響にありつつも、「明く」「忘る」においては、特殊な文脈に支えられて、ツの承接した用例が存在することを見た。

第三章の参考文献

新井無二郎（一九三三）『国語時相の研究』中文館書店

井島正博（二〇〇五）「古典語完了助動詞の研究史概観」『成蹊大学一般研究報告』第三六巻、成蹊大学

井島正博（二〇〇七・一一）「中古語完了助動詞と動詞の自他」『武蔵大学人文学会雑誌』第三九巻第二号、武蔵大学人文学会

井島正博（二〇一一）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房

井手至（一九六六）「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使いわけ」『国語国文』第三五巻第五・六号

井手至（一九九五）「完了の助動詞「つ」と「ぬ」の使いわけ」『遊文録 国語史篇一』和泉書院

糸井善太郎（一九三七）『万葉集語法私論』非売品

糸井通浩（二〇〇九）「古典にみる「時」の助動詞と相互承接——『枕草子』日記章段における」『国語と国文学』第八六巻第一号

大木一夫（一九九三）「古代語助動詞ツ・ヌとアスペクトの決まり方について——『枕草子』を例として」『国語学研究』第三二集、東北大学文学部国語学研究室内「国語学研究」刊行会

大坪併治・野田美津子（一九七八）「説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリ——今昔物語を中心に——」『大谷女子大國文』第八号

長船省吾（一九五九）「助動詞「つ」と「ぬ」——アスペクトの観点から」『国語国文』第二八巻第一二号

小田勝（二〇〇七）『古代日本語文法』おうふう

- 鎌倉暄子（一九九九）「いわゆる完了の助動詞「つ」「ぬ」の本質について——「らし」「けらし」との関連において——」『香椎潟』第四四号、福岡女子大学国文学会
- 川上徳明（一九八九）「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の解（上）——助動詞「ぬ」の意味を中心に——」『解釈』第三五卷第七号
- 川上徳明（一九九〇）「今はただ思ひ絶えなむ」の歌の解（下）——助動詞「ぬ」の意味を中心に——」『解釈』第三六卷第七号
- 木枝増一（一九二九）『高等国文法講義』東洋図書
- 木下正俊（一九六四）「助動詞「ツ」と「ヌ」の区別は何とみるべきか」『国文学』解釈と鑑賞』至文堂
- 桑田明（一九七八）『日本文法探求下』風間書房
- 桑田明（一九八八）「成存立につながる意味の語形式——「つ・ぬ」「たり・り」「ず・ざり」「き・けり」の意味」『就実語文』第九号、就実女子大学日本文学会
- 国立国語研究所（二〇二〇）『日本語歴史コーパス』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chi/（二〇二〇年一月一日確認）
- 小林好日（一九四一）『国語学の諸問題』岩波書店
- 近藤泰弘（一九九二）「丁寧語のアスペクト的性格——中古語の「はべり」を中心に」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院
- 進藤義治（一九八四）「栄花物語の「つ」と「ぬ」——「あり」に承接する例を中心に」『名古屋平安文学研究会会報』第一一号
- 鈴木泰（二〇〇九・二）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 竹内史郎（二〇一四）「事象の形と上代語アスペクト」青木博史・高山善行・小柳智一編『日本語文法史研究2』ひつじ書房
- 竹内美智子（一九九三）「土佐日記のテンス・アスペクト」『国文学』解釈と鑑賞』第五八巻第七号
- 中西宇一（一九五七）「発生と完了——「ぬ」と「つ」」『国語国文』第二六卷八号 中央図書出版社
- 野村剛史（一九八九）「上代語のツとヌについて」『国語学』一五八集

- 野村剛史(二〇〇九)「ツとヌ再訪——テクル・テイクと対照しながら」『国語と国文学』第八六卷第一一号
- 橋本進吉(一九六九)『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 浜田敦(一九五七)「中世の文法」『日本文法講座3 文法史』明治書院
- 飛田良文(一九七二)「完了の助動詞」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座第八巻 助動詞II』明治書院
- 松岡静雄(一九三六)『日本言語学(改定普及版)』刀江書院
- 松尾捨治郎(一九三六)『国語法論攷』文学社
- 松下大三郎(一九三〇)『改撰標準日本文法』(一九三〇年訂正版、徳田政信編・一九七四・勉誠社)
- 麦倉達生(一九八八)「古代日本語における完了の助動詞——〈ツ〉と〈ヌ〉の使いわけの規準——」『彦根論叢』第二五一／二五二号、滋賀大学経済学会
- 森野宗明(一九七〇・一一)「つ」と「ぬ」の相違」『月刊文法』第三巻第二号
- 山口明穂(一九九七)「古代日本語に於ける時間の意味」『紀要』第一六六号(文学科第七九号)、中央大学文学部
- 山崎良幸(一九六五)『日本語の文法機能に関する体系的研究』風間書房
- 山田裕次(二〇〇五)「つ」と「ぬ」——「見つ」「見えつ」「見ぬ」「見えぬ」の場合」『解釈』第五一巻第五・六号、解釈学会
- 山田裕次(二〇〇六)「ぬ」小考」『解釈』第五二巻第五・六号、解釈学会
- 山田裕次(二〇〇七)「つ」「ぬ」小考」『解釈』第五三巻第一一・一二号、解釈学会
- 山田孝雄(一九〇八)『日本文法論』宝文館
- 吉田茂晃(一九九二)「完了の助動詞」考——万葉集のヌとツ」『萬葉』第一四一号、万葉学会
- 吉田茂晃(一九九七)「古代日本語における形容詞時制述語」『山辺道』第四一号(天理大学)

おわりに

本研究のまとめ

本研究は、「文法形式はなぜ・どのように通時的に変化するか」、「古代語から現代語にわたって、時に関わる文法形式とその体系がどのように変化してきたか」、「古典語と現代語とでは、「体質」そのものが変わったという可能性はないのだろうか」、「形式群の変遷が起こる準備的段階として、上代・中古にどのような環境が整っていたか」といった関心を持って出発した。中古語のキ、ケリ、ツ、ヌを対象とし、時に関わる文法的観点からモデル化を行った。また、これに付随して、先行研究で指摘されているキ、ケリ、ツ、ヌの特徴的なふるまいについて説明した。

第一章では、研究を進めていく前提として、〈基本形〉、テンス、アスペクトの扱い方を考えた。テンスとは時間軸と「基準時」と事態で構成される主体的な範疇であるが、アクチュアル（現実的）な場合と非アクチュアル（非現実的）な場合があり、ある文や形式がテンスであるかどうかは曖昧な場合があると考えた。そして、〈基本形〉は、もともと素材的・概念的でテンスレベルにない状態だが、場合によってテンスレベルで意味・機能を発揮すると考えた。また、その他にも議論を進めていく上で必要な術語を導入したり、第三章での議論を行うための準備をした。

第二章では、キ、ケリのモデル化を行った。キは、「基準時」から見た過去を表わすものであると結論し、ケリは、「基準時」から見た過去を表わすものであるが、事態の生起時点が過去に位置づくというものであると考えた。そして、それぞれありうる時間軸のパターンを示した。

その後、「あなたなる場」モデルと本研究のモデルとの関係性に触れた。

第三章では、ツ、ヌのモデル化を行った。先行研究ではどちらも点的なマーカであるようになっていたが、本研究では、二局面間の移行を指すマーカとしての面を強調するモデルに変更した。これによって、ツがテンスらしく振舞う現象や形容詞にツ、ヌが接続した場合の解釈まで行えるようになった。

「はじめに」にこたえて

以上の検討をまとめ、上代・中古における各形式のモデルを考えあわせることで、その後の変遷の背景を考えたい。

まず、各モデルについてだが、各形式の意味・機能にはある部分で重なりがあったように見える。

キ、ケリについては、モデル図を比較してもわかるように、テンスに関する面で重なりがあり、ここに加えて、ツがテンスとしてはたらく場合に、同じくアクチュアルな過去を表現する形式として、重なりを見せていた。一つの意味・機能に対し、三つの形式の競合が見られたわけである。

本研究で得られたツ、ヌの意味規定は、その他の助動詞、とくにリ、タリの意味規定と本質的などころで重なりをみせることを示唆している。井島(二〇一一)の図表一では、タリ、リとヌ、ツはいわば「アスペクト」体系の中で役割を分掌する関係として捉えられていた。しかし、本研究のヌ、ツに対して行った意味規定は、タリ、リとの体系内における競合関係を見出すことにつながると思しい。

これら競合関係が、その後の形式淘汰の背景となっていたと見てよい可能性がある。

そして、重なっていない部分については、意味・機能自体が消失したという可能性と、まだ見ていない他の形式に担われていったという可能性が考えられる。本研究は、「はじめに」で、次の問題意識を提示した。

古典語と現代語とでは、「体質」そのものが変わったという可能性はないのだろうか。すなわち、「意味 α' 、 β' 、 γ' …を担う形式がそれぞれA'、B'、C'…だったのが、Aだけに代わった」というのではなく、「意味 α 、 β 、 γ …を担う形式がそれぞれA、B、C'…だったのが、意味 α 、 β を担うAだけが残り、意味 γ 、…は消失した」というような可能性はないのだろうか。

すなわち、通時的な言語変遷の中で、消えてしまった意味・機能はないか、という問題である。キ、ケリ、ツ、ヌで考えた場合は、やはり、ケリの「あなたなる場」モデルで示され

るところのニュアンスが、消失した可能性はある。現代語でも、タの「発見」用法がありはするが、ケリほど広範にわたる用法ではないように、一見考えられる。

そして、大体において意味・機能は消失していないのではないか。テンスの過去の意味はもちろん、ツ、ヌの移行関係を示すという機能も、現代語では基本的にタが果たしているのではないかと考えられる。この意味で、井島(二〇一一)のモデルで示された古典語と現代語の形式の対応は、かなり合っているのではないだろうか。

むしろ、注目すべきは、〈基本形〉で、鈴木(二〇〇九)が示した次の用例と用例解釈が象徴的ではないだろうか。第一章から再掲する。

③「…針にて見ゆる子は、いとかしこき孝の子なり。嫗の、丹波に侍る女の童生まむとて見給へしやうは、『いと使ひよき手作りの針の、耳いと明らかなるに、信濃のはつりをいとよきほどに挿げて、嫗の衣に縫ひつく』と見給へし」と言へば、(宇津保・俊蔭)「針の夢を見て生まれた子は、非常に賢い孝行の子です。私が丹波におります娘を産みますときに見ました夢では、じつに使いよさそうな手作りの針の穴がおおきく開いているところに、信濃のはつり糸をほどよい長さに通して、私の着物に縫いつけているところを見ました」と老女は言う」

これが単純に現代語の〈基本形〉やテイルで置き換えられないことは、第一章で見た。ここから、古典語と現代語とでは「かたり」方の癖が変わったのではと述べた。すなわち、古典語では、素材的・概念的な表現が多かったのではという考えである。もし、この発想が正しいければ、鈴木(二〇〇九)の現代語訳は、あくまで現代語の感覚で意味内容を解釈した場合の工夫に過ぎず、あくまで「近い意味」であり、「同じ意味」とは言えなくなるのではないだろうか。

今後の課題

古典語の〈基本形〉は未完成相であるというアイデアについて、考える必要がある。〈基本形〉そのものの体系内での位置付けの問題でもあるし、特に、タリ、リとの競合を考える必要がある。

従来これらの形式に関わる研究では、形式同士の違いに焦点を当てるものが多く、それらの共通性 \parallel 競合について意識しているものは少ないのではないだろうか。「はじめに」で確認したように、言語の通時的変遷には、言語同士の意味・機能の競合を考えることが重要であると考ええる。そして、このことが明らかになったところで、「競合だけが言語消失の要因なのか」「そのほかに要因はないのか」ということを捉えることができるようになると思われる。

又については、テンスレベルでどう振舞うか、あまり観察できなかった。今後、調査し、整理していく必要がある。

また、本研究で扱った形式と意味・機能的に隣接する形式としてタリ、リがあり、まさにこのタリが通時的変遷の中で大きな役割を果たしていたと見られるので、本研究で扱った形式と比較をしつつ見ていく必要がある。

そして、通時的変遷を見るために、中古以降に目を向けなければならない。存在詞系の新しい形式や、その他副詞の発達との連動の中で、それぞれの形式がどう動いていったか、捉えていく必要がある。

なお、先行研究でも触れられていないことからわかるように、キ、ケリに相対時制の用法は考えにくい。本研究でも絶対時制のモデルとして提示した。しかし、現代語を考えるにあたっては、相対時制を用いなければ説明しにくい現象があり、この辺り、どう事情が違うのか、考える必要がある。

ケリの「あなたなる場」モデルについては、本研究では特に異論は提示しなかったが、それが万能ではない（ように見える）ことも、指摘されてきたことである。「あなたなる場」が一見見当たらないケリの用例について、検討していく必要がある。

「芳賀（一九五四）参照。」

²ここで言う「イマ、ココ、ワタシ」とは、現実世界の「イマ、ココ、ワタシ」とは限らず、仮想世界のこともあり得る。また、「かたり」の中のタクシスとして働いている形式の場合は、「かたり」の視点の主における「イマ、ココ、ワタシ」であるということになる。

³ここでいう「態」はヴォイスのことを意味しているわけではないことを、念のため付言しておく。

⁴加えて、その中の過去というのは、必ずしも話し手や書き手のイマではなく、「かたり」の中で一度過去が導入された後にいわゆる「現在形」で過去が示されることがあるということにも言及している。

⁵大木（一九九七、二〇〇九）は古代語の文終止の位置の〈基本形〉について考えており、大木（二〇〇九）は、時間的意味を次のように整理している。

- ①存在の継続
- ②心情・感覚の持続
- ③動きの継続
- ④変化の結果
- ⑤意向
- ⑥動作同時
- ⑦想定

⑧一般論・繰り返し・動作者不特定多数

。木枝（一九二九）は、定時・不定時の別を発想しており、定時には、過去・現在・未来があるとしつつ、その他に「歴史的現在」を認めている。次のように説明している。

なほこの外に所謂歴史的現在 (Historical present) と称するものがある。様式は現在であるけれども実は過去を表してゐるのである。これは動作の過去に起つたものを、力強く表現するためにわざと用ひる様式であつて、その表現はむしろ修飾的の要求から来たものである。

そして、次の例を挙げている。

「戦は愈々始まつた。砲声がひびく、弾丸が飛んで来る、突喚の音が聞える、実に凄愴の極みであつた。」

「益岡（一九九一）は、物語における時制表現の移り変わりを、「ロング・ショット」と「クローズ・アップ」という概念で説明し、工藤（一九九五）もテンス・アスペクト表現のテキスト上での振る舞いを「タクシス」という概念で説明している。

⁸ 〈基本形〉を「はだかの形」と呼んでいる。

⁶ 野村（一九九四）や金水（一九九五）はタリ、リとの比較の中で、〈基本形〉に不完成相の意味があるとしてよいとしている。

⁷ キ、ケリの研究史については、鈴木泰（一九八四）が非常に詳しい。

⁸ 中西（一九六三、一九九六）も同様の姿勢である。

⁹ 加藤（一九九八）が言うキの基本的な意味・機能についての結論は、すくなくとも同書で扱われた資料すべてにあてはまるものとして提示されている。例外的な現象も、キの基本的な意味・機能と矛盾はしないという論理だからである。また、「…何らかの権威によって事実とされている過去の事象を、…」という例外規定については、すくなくとも、西大寺本金光明最勝王経の古点、三宝絵詞（観智院本）、今昔物語集には通じるものであると想定していることになる。

¹⁰ この内二例は万葉集のもので、キが使われていると断定できないものである。

¹¹ 次の二例は、反実仮想の例である。「基準時」と同日とも考えられるかもしれないが、それよりも、非リアルな表現であると見るべきであると考えるので、特別な例と見なす必要があるだろう。

○今日もかも都なりせ（奈里世）ば見まく欲り西の御馬屋の外に立てらまし（万葉集・巻第一五・三七七六）

○あしひきの山纒の兎今日行くと我に告げせ（告世）ば帰り来ましを（万葉集・巻第一六・三七八九）

¹² 本研究では、力を入れて取り上げはしないが、松下（一九三〇）、長船（一九五九）、野村（一九八九、二〇〇九）などの流れはある。また、記述態度として、比喩的表現を用いて説明しようとするものもある。三矢（一九二八）は、次のような説明をしている。

「ツ 動作的故意的にして急、（短、硬）対話体の文に多い」

「ヌ 状態的自然的にして緩、（長、軟）叙述体の文に多い」

徳田（一九三六）は、次のように説明する。

（一）両者とも観念上の完了を表わすことは同様であるが、「つ」は「ぬ」に比して動作が直線的、急迫的であること、そして主体（自己の意識）の関心が対象に対して直接的で強いとき、用いられる。（世上、意志的というのは一部の不可）

(2)「ぬ」は、これに対していわゆる傍観的でゆるく、事象に対して直接的関心を示さないとき用いられる。ことがらを客観的にややゆとりをもって写しているところがある。ゆえに「つ」が生活意識につながりキビキビしているが味わいが少ないのに対し、「ぬ」は婉曲でやや詠嘆的な感じを与えてくるわけである。

(九七〜九八頁)

このようなタイプは、他にも、山崎（一九六五）がヌもツも確認判断の表現で、完了ではないとしつつ、

ヌ…凝視的、詠嘆的性格

ツ…行動的、意欲的性格

としていたり、また、新井（一九三三）は、

ツ

(一) 突破的。折伏的。破摧的。衝動的。

(二) 達成的。遂行的。

(三) 語勢的。

ヌ

「往ぬ」

ツとは違い、元の動詞である「往ぬ」そのままの意味で用いられる。

とし、

「ツヌともに、「未来の想像にも、到来の意にも、完了の意にも、過去意ヌギユクにも使用されるから、狭い意味の一の名称を以て、詞の全生命を表すことは出来がたい。故に本書では其の性質及び用法の意義に本づいて名称を立て、「つ」を突破的、「ぬ」を徐行的と名づけたのである。」としている。本質的には、確認のような意味合いであるという立場であると考えられる。突破的、徐行的というのは、音声的感觉からそう言っている（一二七頁）。

¹⁹ 山田（二〇〇六）は、岩波書店新日本古典文学大系の『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『更級日記』『枕草子』『源氏物語』を対象としている。

²⁰ 語源に関わることで、余談的言及としたいが、ツ、ヌが現代語でいう「テイル」などとは違って、一語の動詞由来であると思しいことを踏まえると、アスペクトとして一つ

の形式が同時に二種類の、しかも「開始」的なものと「終了」的なものという真逆の概念構造を併せ持っているという姿は、奇妙である。

¹⁸ この系統の説を追認する説として、大坪（一九七八）、糸井（二〇〇九）等も挙げられる。

¹⁹ 中西（一九五七）の論上、「現在」「過去」というのは、必ずしも絶対テンスの「現在」「過去」というわけではなく、あくまで事態の内的時間展開中の局面を言い分ける手段として用いられていることがわかる。

²⁰ なお、「局面」という用語の使い方は、井島（二〇一一）に従っている。また、「局面を指す」とは、その他の局面の排除を同時に指すものである。すなわち、「開始局面を指す」というのは、「事態生起以前の局面や中途局面、終了局面を指さない」ということになり、「終了局面を指す」というのは、「開始局面や中途局面、事態終了後の局面を指さない」という意味合いを含むことになる。

²¹ 小田（二〇一〇）は、ツについて「完成相＋近過去」であるとし、状態性用言につき場合は、完成相が消え、時制を伴うと近過去が消えるとしている。

²² 進藤（一九八四）は『栄花物語』のツ、又について接続の性質を比率調査しているが、とくに存在表現、形容詞との接続調査に注目したい。

²³ 近藤（一九九二）は、確言のナム ヌベシ テム ツベシは、接続面でも緩くなることを指摘しており、意味が中和しているのではないかと指摘している。

²⁴ ツの連用形にあたるテと助詞のテの関係性をどう見るかという議論は、山田孝雄や橋本進吉、浜田敦、飛田（一九七二）などがあるが、本研究の議論からすれば、それだけゆれていて当然だということになる。

²⁵ 松尾（一九三六）は、ツとヌの上接語の性格の違いを傾向として言及しているが、意味的機能的な違いには言及していない。タリ、リも含め、完了の機能を持つとは言っていない。また、森野（一九七〇）は、ツとヌの違いについて、上接語の特徴という観点からの先行研究を検討している。

²⁶ 佐竹昭広氏の調査に若干補訂したものだという。

²⁷ 『源氏物語』のツ、ヌの用例リストアップしており、他動詞にツ、自動詞にヌがつきやすいということ、意思的作為的動詞にツ、自然推移的状态を示す動詞にヌがつきやすいということ、そして、それらには例外もあるということが示されている。

²⁸ オンラインコーパス検索アプリケーション「中納言」を用い、『日本語歴史コーパス』を使用した。奈良期、平安期、鎌倉期のコアデータを見たが、鎌倉期については、非コアデータも見ている。使用したコーパスは以下のものである。

国立国語研究所（二〇一七）『日本語歴史コーパス 奈良時代編Ⅰ万葉集』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html（二〇一八年七月二三日確認）

国立国語研究所（二〇一六）『日本語歴史コーパス 平安時代編』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html（二〇一八年七月二三日確認）

国立国語研究所 (二〇一六) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cj/kamakura.html (二〇一八年七月二三日確認)

²⁹ ただし、「再会」という場合も考えられ、原理的には可能性はあるが、用例としてはそのようなものは見当たらない。

³⁰ ヌ、ツを「完成相」と捉える考えについて

鈴木 (二〇〇九) は、古代語においてテンス、アスペクトに関わる体系を記述しようとしている。ヌ、ツそれぞれの個別的な意味については、ヌは、「限界到達」という意味を表わすものとし、ツは、「動作過程を一括的にさしだす」意味を表わすものとしている。

この意味規定における名称については、本研究の意味規定と齟齬を来すものではないと考えられる。しかし、これらが、両者ともに、「完成相」というカテゴリーに分類できるといふ考えは、受け入れがたい。本研究の考えでは、ツを「完成相」とすることに抵抗はないが、ヌを「完成相」とすることに抵抗がある。

本研究のヌの意味規定によれば、ツにおいては、「事態中途局面」と「事態終了後局面」およびそれらの移行関係が認識されるのであるから、「事態中途局面」が「一括的に認識される、完成的に認識される」というのは、首肯できる。しかし、ヌが現れた場合に、「事態中途局面」は認識されてはいるが、それが完成的なものとして認識されている保証はない。とくにここでいうアスペクト体系は、ヌ、ツが承接していない形式を「不完全相」とみて、それと対立する形でヌ、ツを位置付けるものであるから、ヌが承接すれば完成的で、ヌ、ツが承接しなければ不完全的であるというコントラストが見えなければならぬ。それが難しい。